

2015年度

活動報告書

Tokai University Student Project Center Activity Report

 東海大学チャレンジセンター



2015年度チャレンジセンター 活動報告書の発行にあたって



チャレンジセンター所長
木村英樹

2006年4月に開設されたチャレンジセンター（以降：本センター）は、関係各位から強力なご支援を受けながら、この報告書が発行される2016年3月末までに10年間にわたる活動を続けることが出来ました。これまでに、ご支援をいただきました皆様には一方ならぬ厚情をたまわり、御礼申し上げます。

本センターは、50名を超える大規模なプロジェクト活動に学生達が挑む過程や、チャレンジセンター開講科目を通して、「自ら考える力」「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」の4つの力に代表される社会的実践力を育成することを目的としております。そして、発足年度に申請した文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）の採択を受け、大学における教育改革の先駆けを担うという使命を帯びて発進しました。この現代GPの中で、チャレンジセンタープロジェクトを大学による社会的責任（USR）活動の場として位置づけ、地域住民、自治体、NPOから企業等とともに社会連携活動を推進してまいりました。初年度は8コマの科目と、12件のチャレンジプロジェクト、34件のユニークプロジェクトから始まりましたが、2015年度には149コマの科目を開講（ジャーナリズム実践教育科目を含む）、22件のチャレンジプロジェクトと27件のユニークプロジェクトが活動するに至りました。この10年間に、約40,000名の学生がチャレンジセンター開講科目を学び、約10,000名の学生がチャレンジプロジェクトに挑み、約4,500名の学生がユニークプロジェクトに参加したことになります。

2009年度に、文部科学省より大学教育・学生支援推進事業（テーマA・大学教育推進プログラム）として「SOHUMプログラムによる実践教育の提案」が教養学部で採択され、2013年

度に地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）として「To-Collaboプログラムによる全国連動型地域連携の提案」が採択を受けました。このような、背景から本センターはキャンパスストリートプロジェクト、福祉除雪プロジェクト、阿蘇援農コミュニティプロジェクトなどの活動を通して社会連携の拠点の一つとして機能しています。

一方、本センターでは、留学生や近隣学校の外国人児童との交流や支援を目的としたTokai International Communication Clubや、ソーラーカーの国際交流を通して海外の大学・大使館等との関係を構築するなどの国際連携の分野においても、活動を推進しています。

新たに取り組むことになったTo-Collaboプログラムの中で、私達はシティズンシップ教育（市民教育）の中で、新しい手法であるパブリック・アチーブメント（以降：PA）の概念を米国から学んでいます。このPAは、身の回りの様々な課題に対し、多様な考え方を尊重しながら解決していくプロセスを通して、若者が民主社会における市民性を獲得していくことを目指したものです。また、デンマークの成人教育機関である「国民高等学校」の教育内容をもとに開発されたもので、本学の教育とも親和性が高いといえます。2018年度から本学においてPA型科目を必修化するために、To-Collabo推進室や総合教育センター等とともに研修会や調整会議を行ってきました。2016年度からは新体制に移行する予定ですが、本センターが築いてきた教育や活動は継続されますので、引き続きご支援を賜りますようここに重ねてお願い申し上げます。

2016年3月

INDEX

2015年度チャレンジセンター活動報告書の発行にあたって	1
チャレンジセンターが育む学生像	3
チャレンジセンター支援体制・運営体制	5
チャレンジセンターの活動	7
学生への研修（広報講習会、リーダー研修）	8
チャレンジプロジェクト活動報告	9
【湘南キャンパス】 ライトパワープロジェクト	9
スポーツ社会貢献プロジェクト	11
サイエンスコミュニケーター	12
東海大学学生ロケットプロジェクト	13
Tokai Formula Club	13
3.11生活復興支援プロジェクト	14
病院ボランティアプロジェクト	15
キャンパスストリートプロジェクト	16
Tokai International Communication Club	17
環境キャラバン隊	18
Music Art Project	19
Beijo Me Liga	19
Japan Community Development Association	20
DAN DAN DANCE & SPORTS プロジェクト	20
【高輪キャンパス】 Takanawa共育プロジェクト	21
【熊本キャンパス】 先端技術コミュニティACOT	22
メカトロマイスター	23
熊本地域プロデュースプロジェクト	23
【阿蘇キャンパス】 阿蘇援農コミュニティプロジェクト	24
阿蘇は箱舟プロジェクト	25
あにまるれすきゅープロジェクト	25
【札幌キャンパス】 福祉除雪プロジェクト	26
チャレンジセンター所長賞、チャレンジプロジェクト学科別参加人数	27
チャレンジプロジェクト協力団体・協力者一覧	28
ユニークプロジェクト活動報告	29
【湘南キャンパス】 SAP	29
ポリヘドロン工作隊	30
ミュージアム・コミュニケーター	30
【代々木キャンパス】 よよさんぽ	30
【清水キャンパス】 ワンダフル・マリンアニマルズ	30
【熊本キャンパス】 知産地商	30
プロジェクト学生の声	31
プロジェクトコーディネーター・アドバイザー	33
チャレンジセンター開講科目	35
研究業績	41
FD研修会・FD研究会	43
ルーブリック	44
To-Collaboプログラムの取り組み	45
広報媒体（ポスター・チラシ・パネル・広報誌）	46
メディア掲載一覧	48
チャレンジプロジェクト活動一覧	49

チャレンジセンターが育む学生像

チャレンジセンターは社会が求める4つの力を育む成長の場

自ら考える力

常に未来を見据え、自らが取り組むべき課題を探求する力

学習力
思考力
探求力

挑み力

困難かつ大きな課題に勇気をもって挑戦する力

問題発見力
構想力
プランニング力

集い力

多様な人々の力を結集する力

コミュニケーション力
関係構築力
アイデンティティ獲得

成し遂げ力

失敗や挫折を乗り越えて目標を実現していく力

工程管理力
実行と継続力
分析と修正力



社会が必要とする人物像

社会的実践力を身につけ、高い専門性で社会に貢献出来る

チャレンジセンターとは

現代社会では、少子高齢化による社会活力の低下、環境・食料・エネルギーなど地球規模の課題への対応、グローバル化の進展に伴う国際競争の激化などの荒波に挟まれた厳しい時代を迎えており、将来は雇用環境も変化する可能性があることが示唆されています。

こうした厳しい時代を生きる学生達には、自らの手で自らの人生を切り拓くとともに、多様な価値観を受容し、**社会の複雑な課題にも挑戦していくこと**が求められています。

そのため、学生が思考力や判断力、表現力を磨き、主体性をもって**多様な人々と協働**することが出来るよう、学生の能力や可能性を引き出すとともに自信を育む教育の実現が急務となっています。

本学ではそういった現状を踏まえ、単に知識を身につけるだけでなく、常に未来を見据え自らが取り組むべき課題を探求する力「自ら考える力」、多様な人々を結集する力「集い力」、大きな課題に勇気をもって挑戦する力「挑み力」、失敗や挫折を乗り越えて目標を実現していく力「成し遂げ力」を修得し、**社会的実践力を身につけた学生の輩出**をしています。

2006年度より発足した本センターは、様々な分野のプロジェクトを教職員が協働して支援するとともに、カリキュラムにもチームで課題に取り組むPBL (Project-Based Learning) 型教育などを積極的に導入することで、多くの学生に社会的実践力を体得させる場を提供してきました。

今年度は、チャレンジセンター開講科目(ジャーナリズム科目も含む)を5キャンパス7,103名が受講し、社会的実践力科目では従来の大学の授業とは異なる学生自身に「気づき」を促す様々な演習を組み込んだ新しい授業を展開しています。また、ジャーナリズム実践教育科目では社会を批判的にとらえることで、社会の様々な問題を認識する目を養います。

プロジェクト活動では7キャンパス49プロジェクトを展開し、のべ1,892名(チャレンジプロジェクト1,436名、ユニークプロジェクト456名)が参加し「地域活性」「国際交流」「社会貢献」「ものづくり」「環境・動植物保護」など様々な分野において、座学だけでは経験出来ない実践的なプロジェクト活動に**主体性**をもって取り組んでおり、本学のリソース(資源)やスケールメリットを有効に利用しながら、急速な社会変化に伴う多様な課題に対応した、**学生が自ら地域や社会が抱える複雑な問題や課題を発見するなど**解決に向けて独自の活動を実施することで、よりよい社会への取り組みを行っています。

本センターが進めてきたこのような教育・社会貢献活動に全学的な「知・人・力」を活かした研究活動を連動させる形で2013年度にはCOC事業(※1)に採択を受けました。本学のスケールメリットである全国の拠点8キャンパス周辺地域特有の課題や共通の課題を全ての教職員・学生が共有し、協力して解決策を見出す取り組みとして「To-Collaboプログラム」(P45)を始動。地域コミュニティの中核的存在としての機能強化を図っています。

今年度はチャレンジプロジェクトの一部に対してルーブリックやPROG(※2)を実施しており、設定した目標を達成出来たかを振り返るなど自己評価するとともにアンケート調査および地域ニーズ調査から地域の協力者をはじめとする第三者評価を経て、その能力や知識を社会に還元していきます。(P44)

※1 COC事業…大学等が自治体と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める大学等を支援することで、課題解決に資する様々な人材や情報・技術が集まる、地域コミュニティの中核的存在としての大学の機能強化を図ることを目的とする取り組み
※2 PROG…専攻・専門に関わらず、大卒者として社会で求められる汎用的な能力・態度・志向-ジェネリックスキルを育成するためのプログラム

です。

チャレンジセンターの教育プログラム

プロジェクト活動(P9~)

学部・学科の垣根を越え、「地域活性」「社会貢献」「国際交流」「ものづくり」「環境・動植物保護」など多様な分野で活動。直面する様々な課題を乗り越える体験を通じて社会的実践力を培います。

チャレンジプロジェクト

- ◆学生が自由な発想で企画・立案した年間を通じたプロジェクト活動
- ◆大学職員によるプロジェクトコーディネーター、教員によるプロジェクトアドバイザーを配置
- ◆メンバーが複数学科に横断して構成されていること
- ◆参加人数が50名以上であること(湘南キャンパス以外は30名以上)

ユニークプロジェクト

- ◆将来的にチャレンジプロジェクトとして発展することを目的とした萌芽の位置づけのプロジェクト
- ◆少人数のグループ(10名以上)で構成
- ◆学生からの希望があり、かつ、人員が配置出来る場合はコーディネーターとアドバイザーを配置



・プロジェクトコーディネーター(職員)
・プロジェクトアドバイザー(教員)
による支援体制 ※詳細はP5

プロジェクト修了認定

チャレンジプロジェクトが以下の条件(抜粋)を満たし、プロジェクトコーディネーターによって1年間の活躍が評価されたプロジェクトメンバーに授与されます。

1 コーディネーターによる推薦

1年間のプロジェクトに積極的に参加し、また、その成果に貢献し「自ら考える力」「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」を身につけたと認められる学生を推薦

2 チームとしての条件

- ◆プロジェクト協議会へのプロジェクトリーダーの出席
- ◆全体・幹部ミーティングの実施
- ◆中間報告会(10月)および最終報告会(2月)での発表(P7参照)
- ◆建学祭での発表
- ◆応募要件のプロジェクトを実施するメンバー数を満たしていること 他5項目

3 個人としての条件

- ◆振り返りシートの提出※1
- ◆中間報告会・最終報告会への出席
- ◆参加報告書の提出・当該年度7/1現在プロジェクトに所属し、活動期間が9カ月以上であること 他2項目

※1 振り返りシート:プロジェクトメンバーは、各企画終了後に省察会を開催し、プロジェクトが設定した「学びのテーマ」を踏まえ活動を実施出来たかを振り返るシートを作成します(年3回)

チャレンジセンター開講科目(P35~)

社会的実践力科目とジャーナリズム実践教育科目からなり、総合大学としての多様性を活かし、学部・学科単独では出来ない、社会との繋がりの中で実践的な教育を行っています。

社会に通用する実践力

社会的
実践力科目

時代を生きる情報力

ジャーナリズム
実践教育科目

チャレンジセンター支援体制・運営体制

本センターでは、学生達がより大きな目標を成し遂げられるように、様々な面できめ細かくバックアップ。チャレンジセンターミーティングや教授会、プロジェクト協議会を通じて、組織内での情報交換や連携を図るとともに、プロジェクト活動の質を高めるための人的な支援として、各プロジェクトにコーディネーターとアドバイザーを配置しています。原則として、コーディネーターおよびアドバイザーは大学の教職員から選抜。安心して活動に取り組むことが出来るサポート体制が整っています。

◆チャレンジセンターにおける各種会議

- チャレンジセンターミーティング(月1回) (所長、次長、チャレンジセンター教職員)
- 教授会(月1回) (所長、次長、チャレンジセンター教員、オブザーバーとしてチャレンジセンター職員)

プロジェクト協議会

プロジェクト活動を円滑に推進するため、プロジェクト間の情報交換、本センターからの連絡事項の伝達を行う場として、プロジェクト代表者の出席を義務づけ、原則として月1回開催。今年度は、全9回開催し、全校舎をTV会議システムで接続して実施。

プロジェクト協議会の進行および議事録作成をはじめ、各報告会やガイダンスの司会、プロジェクト説明会の準備・運営などは各プロジェクトリーダーが順次務めます。

(議長:チャレンジセンター推進室長、委員:プロジェクトリーダー・プロジェクトコーディネーター)

支援

プロジェクト活動

ものづくり系やボランティア系、地域活性系など学部や学科、そして学年の枠を超えた学生達がチームならではの目標を掲げ、自主的および創造的な企画を行うことで社会的実践力を体得していきます。

※詳細はP9～

チャレンジセンター組織

チャレンジセンター教員

所長 木村英樹教授
(工学部電気電子工学科)
(To-Collabo推進室長)

次長 崔一英教授

主任 岡田工教授
岩田伊津樹教授
山口勉教授
末延吉正教授
磯波清一教授
堀本麻由子准教授
青木孝子講師
園田由紀子講師
田島祥講師
田中紀代子講師

チャレンジセンター推進室

室長 五十嵐義和

室長補佐 佐藤多嘉雄

係長 高橋操
山下直也
木村直樹
島村祐太
平島滋義
塚越智美
鈴木絵理

付教員

河野時廣教授
(生物学部海洋生物科学科)

齋藤寛教授
(海洋学部水産学食品科学専攻)

田中孝幸教授
(農学部応用植物科学科)

中嶋卓雄教授
(経営学部経営学科)

福崎稔教授
(高輪教養教育センター)

プロジェクトコーディネーター

プロジェクト全体の進行状況を把握し、活動全般の相談役や提出書類の作成指導を担います。また、予算管理・工程管理に関する指導や、活動が困難な状況の時に円滑に進むよう学生にモチベーションを与える「縁の下の力持ち」としての役割を担っています。なお、コーディネーターは、本センターが実施する複数の研修会の受講が義務づけられており、これは東海大学人事制度において「業務別研修」と位置づけられたオリジナルのSD※活動です。

プロジェクトアドバイザー

専門的知識または技能を持った教員が担当し、各プロジェクトに1名以上配置されます。主な役割として、プロジェクト活動に対して専門的な立場から指導・助言を行います。プロジェクトの活動を、より質が高く大きなチャレンジとするためには、プロジェクトアドバイザーの豊富な知識と経験に裏づけられたアドバイスが必要になります。

※SD(Staff Development)・・・授業開発などの教員による「FD」に対し、大学職員として学生支援に必要な能力を高めるための研修会やミーティングなどの実施

支援

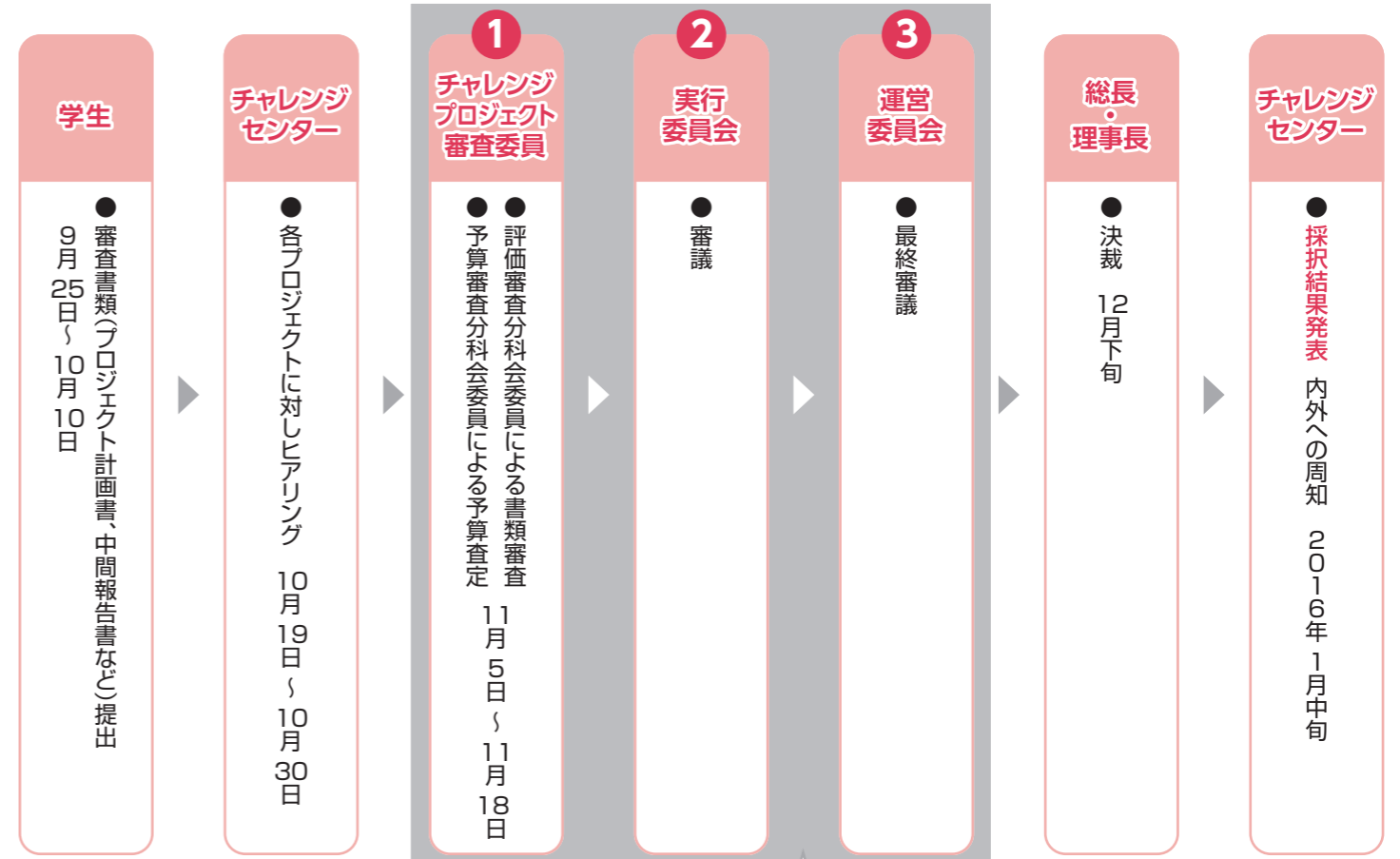
チャレンジセンター開講科目

従来の大学の授業とは異なる、学生自身に「気づき」を促すさまざまな演習を組み込んだ授業を通して実社会において自身がぶつかる様々な問題の解決方法を身につけていきます。 ※詳細はP35～

支援

本学では、チャレンジプロジェクト採択をはじめとする本センターの事業計画や修了認定、チャレンジセンター科目に関することなどについて審議・決定を行う、チャレンジセンター運営委員会および実行委員会を設置しています。本センターの取組みは、これら委員会の承認を得て実施されました。

◆チャレンジプロジェクト採択までの流れ



2015年度の会議開催と審議事項

	実行委員会	運営委員会	審議事項
第1回	5月13日(水)	5月20日(水)	●2015年度チャレンジプロジェクト支援金審査について ●2015年度松前重義記念基金ユニークプロジェクト選考について
第2回	9月3日(木)	9月8日(火)	●2016年度チャレンジプロジェクト募集要項について ●松前重義記念基金「2016年度ユニークプロジェクト」募集要項について ●2016年度チャレンジプロジェクト審査方法・審査スケジュールについて
第3回	12月2日(水)	12月9日(水)	●2016年度チャレンジプロジェクト審査について
第4回	2016年3月3日(木)	2016年3月10日(木)	●2015年度チャレンジプロジェクト修了認定について ●2016年度チャレンジセンター学年暦について

1 チャレンジプロジェクト審査委員

〈評価審査分科会委員〉

実行委員、付教員、チャレンジセンター教職員による書類審査(8キャンパス23名、うち教員7名、職員16名による)

〈予算審査分科会委員〉

事務課長、事務課(会計担当課長)、チャレンジセンター所長、チャレンジセンター次長、チャレンジセンター推進室長

2 実行委員会

チャレンジセンターの活動に関連した課長で構成され、プロジェクトが活動するにあたり必要な環境整備等、実務的な内容を審議します。また、実行委員はチャレンジプロジェクト審査委員も兼ねます。

委員長 : 木村英樹チャレンジセンター所長
副委員長 : 崔一英チャレンジセンター次長
委員 : 高等教育室長、入学課長、事務課長、事務課(人事担当課長)、事務課(会計担当課長)、施設管理課長、教務課長、学生課長、キャリア就職課長、代々木教学課長、清水教学課長、伊勢原教学課長、高輪教学課長、熊本教学課長、阿蘇教学課長、札幌教学課長、チャレンジセンター推進室長

3 運営委員会

チャレンジセンター運営に関連した部長などで構成され、実行委員会での協議を踏まえ、本センターの運営全体について最終的な審議をします。

委員長 : 梶井龍太郎副学長(企画・戦略担当)
副委員長 : 木村英樹チャレンジセンター所長
委員 : 大学運営本部長、国際部長、研究推進部長、事務部長、入学センター所長、教務部長、教育支援センター所長、キャリア就職センター所長、教務部事務室長、チャレンジセンター次長

チャレンジセンターの活動

7月14日 「第14回チャレンジセンターセミナー・To-Collabo市民セミナー」を開催

湘南キャンパスのほか、高輪・代々木・清水・熊本・阿蘇の6キャンパスとテレビ会議システムをつなぎ、学生や教職員、地域住民など約300名が聴講。本センター次長の崔一英教授の挨拶の後、東日本大震災の避難所で長期にわたりボランティア活動に携わっている映画監督の小川光一氏を講師に招き、小川氏が被災地で監督・撮影したドキュメンタリー映画「あの街に桜が咲けば」を上映しました。これは、岩手県陸前高田市で、東日本大震災の際に津波が到達した地点に1万7千本の桜を植える活動を続ける、NPO法人桜ライン311の取り組みを紹介した映画です。上映後は「その時あなたは大切な人を守れますか」と題した講演を実施しました。



10月26日 「2015年度チャレンジプロジェクト中間報告会」を開催

4月から9月まで、上半期の活動や実績について、各プロジェクトのメンバーが学生、教職員に報告するもので、湘南キャンパスのほか、高輪、清水、熊本、阿蘇、札幌の6キャンパスをテレビ会議システムで結び、教職員を含めた約700名が来場。過去最大の参加数となりました。当日は梶井龍太郎副学長の挨拶の後、22プロジェクトの代表メンバーがプレゼンテーションしました。「活動場所を増やすことで、これまでよりも多くの地域の方々と交流を深めました」「メンバーの役割をイベント運営、広報担当と分担したところ、効率よく作業ができました」などについて報告。会場ではメモを取りながら、熱心に耳を傾ける学生の姿も多数見られました。



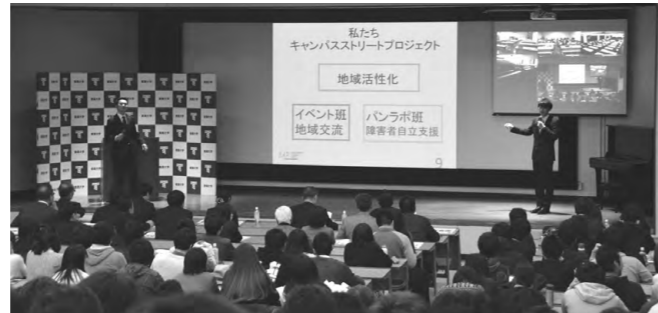
12月11日 「第15回チャレンジセンターセミナー」を開催

株式会社ネットマン代表取締役社長で発明家の永谷研一氏を講師に招き、「発明家永谷氏が語るじじらないでいこう～自分の可能性を広げ、成果につなげる技術～」をテーマに講演。湘南キャンパスをはじめ、代々木・高輪・清水・熊本・阿蘇の6キャンパスとテレビ会議システムをつなぎ、学生や教職員、地域住民ら約260名が参加しました。はじめに本センターの木村英樹所長が挨拶し、続いて永谷氏が登壇。講演後は来場者から感想をいただき会場のモニターにリアルタイムで映しました。永谷氏は「多くの失敗の中で、人の批判に耳を傾ける重要性を、身をもって学びました。そこにこそ、成長のヒントが隠されています」とアドバイスを送りました。



2016年2月4日 「2015年度チャレンジプロジェクト最終報告会」を開催

湘南、代々木、高輪、熊本、阿蘇、札幌の6キャンパスをTV会議システムをつなぎ、全体で約620名が来場しました。開会にあたり山田清志学長が挨拶。各プロジェクトを代表するプレゼンターはそれぞれの活動について、スクリーンに写真やテキスト、図表を示しながら報告。来場者らの「反省点を踏まえて次年度はどの点を変更していくか具体的に教えてください」「イベントで人前に立つときに何を意識しますか」といった質問に答えました。プレゼンテーション終了後、審査員を務めた本学同窓会東京ブロックの宮原孝夫会長、株式会社アビストの柳澤宏美氏、いであ株式会社の市川光昭氏、株式会社マイスターエンジニアリングの長安元和氏、株式会社和光ケミカルの小寺義昭氏、本センターの木村英樹所長が、メンバーの発表や活動内容を評価。特に高い評価を得たプロジェクトに贈られる「グッドプレゼンテーション賞」には、キャンパスストリートプロジェクト、サイエンスコミュニケーター、ライトパワープロジェクトが選ばれ、木村所長が代表者に賞状を手渡しました。その後、審査員がプロジェクトに対し、「限られた時間で発表することはとても難しいことですが、決められた期限を守るというのは社会に出てからも必要なスキルです。今後もその力を高めてほしい」「レベルの高い発表で見て話せていたのが印象的でした。次回にはさらに工夫を凝らした発表があることを期待します」とエールを送りました。



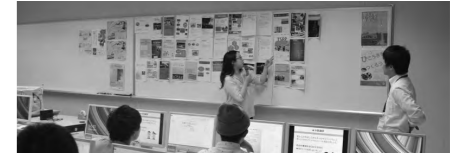
学生への研修(広報講習会、リーダー研修)

広報講習会

プロジェクト活動の広報を見直すきっかけになることを目的に、湘南キャンパスで初めて実施。プロジェクト広報リーダーをはじめとするのべ106名のメンバーが参加しました。

6月6日 「第1回広報講習会～ポスター制作の基礎～」を開催

プロジェクトメンバー40名が参加。前半は「広報をするにはまず企画を理解する」ことをテーマに、ポスター制作で見落としやすい記載事項や、フォント、配色などデザインについて留意点を本センター職員が解説しました。後半は、各プロジェクトで今後イベントに使用する告知用ポスターのラフ案を作成。アイデアを盛り込んだデザインを基に「パワーポイント」を用いて制作に取り組みました。



10月3日 「第2回広報講習会～プロジェクトの情報発信～」を開催

プロジェクトメンバー32名が参加。はじめに本センター職員が講師となり、自分達の活動の積極的な外部発信が、社会との信頼関係の構築に繋がることを解説しました。次に、本センター田島祥講師により「自分達はどういう広報が出来るのか?」「自分のプロジェクトと似た団体はどういう広報をしているのか?」をホームページをチェックしながら、意見交換をするワークを行いました。



12月19日 「第3回広報講習会～プレゼンテーションする力～」を開催

プロジェクトメンバー34名が参加。前半は、株式会社植松電機の植松努氏の動画を例にプレゼンテーションを解説しました。続いてスティーブ・ジョブズ氏のプレゼンをもとに、聞き手に伝わりやすくするためのポイントを紹介。後半は、ランダムで選ばれた各プロジェクトの代表者が、「所属プロジェクトがどのように社会の役に立っているか」をテーマに3分間プレゼンをしました。



リーダー研修

2016年2月17~19日 「2015年度チャレンジセンターリーダー研修会」を実施

- 目的とねらい：
- ① キャンパスを越えたプロジェクト学生同士の交流、およびプロジェクトリーダーの育成を通じて、プロジェクト活動を活性化する
 - ② プロジェクトメンバーとしてメンバーを統率し、プロジェクト目標を達成するために必要な力を学ぶ
 - ▶ リーダーシップとは何かを考える
 - ▶ リーダーとしての自分の課題を捉え、必要なスキル、特にコミュニケーションの取り方を中心に学ぶ
 - ▶ 所属するプロジェクトの課題は何かを考える

- 実施場所：湘南キャンパス 1号館3階1C-302教室
 宿泊場所：湘南キャンパスクラブハウス
 対象者：2016年度チャレンジプロジェクトリーダー・サブリーダー・他 計40名
 (幹部候補の中から選出し、1プロジェクト2名参加)
 講師：木村英樹(チャレンジセンター所長)・堀本麻由子(チャレンジセンター准教授)・田島祥(チャレンジセンター講師)・高橋操・島村祐太(チャレンジセンター推進室)
 事務局：佐藤多嘉雄・山下直也・島村祐太(チャレンジセンター推進室)



研修プログラム

DAY1 13:00~17:45	DAY2 9:00~17:30	DAY3 9:00~12:30
▶ 13:00~13:05 【開会式】 講師:堀本 ▶ 13:15~14:15 【アイスブレイク】自己紹介ワーク ▶ 14:15~14:50 【講義】相手を理解する(コミュニケーション方法を考える) ▶ 15:00~15:30 【講義】チームマネジメントとリーダーシップ ▶ 15:30~16:00 【ワークシート】リーダーとしての課題について ▶ 16:10~17:00 ビア・レビュー:グループで課題の話し合い ▶ 17:00~17:45 振り返りと木村所長からのメッセージ	講師:高橋 ▶ 09:00~10:00 【チャレンジセンターとは】 講師:田島 ▶ 10:15~11:45 【講義】目標達成のためのリーダーシップ ▶ 12:40~14:15 リーダーシップとコミュニケーション① ▶ 15:15~16:45 リーダーシップとコミュニケーション② ▶ 16:45~17:00 【振り返りとまとめ】 講師:島村 ▶ 17:00~17:30 【チャレンジセンターが課す提出物について】	講師:堀本 ▶ 09:00~09:50 2日間の振り返り・リーダーシップコンピテンシーアンケート記入 ▶ 10:00~10:30 チーム構築:メンバー一人ひとりの関心を理解すること ▶ 10:30~11:30 【ワーク】ワールドカフェ ▶ 11:40~12:10 振り返りとまとめ ▶ 12:10~12:30 修了式(修了証授与)

チャレンジプロジェクト活動報告

ライトパワープロジェクト

湘南 ものづくり

省エネルギー技術を利用したものづくり

達成目標 → 大会に出場し最高の記録を樹立するとともに、社会に貢献する活動を展開する

学びのテーマ → 多様な活動を通してマネジメントを学ぶ

プロジェクトリーダー	長谷川準人	情報理工学部	コンピュータ応用工学科	3年
サブリーダー	森美里	工学部	航空宇宙学科航空宇宙専攻	2年
サブリーダー	横井泰之	工学部	動力機械工学科	2年
広報リーダー	金澤七海	工学部	航空宇宙学科航空宇宙専攻	3年
会計	小寺佳寿	工学部	動力機械工学科	3年
				参加人数 130名

5月4・5日

電気自動車チーム

「ワールド・エコノムーブ2015」エコノムーブ・ライトAクラスで初優勝

■ 秋田県大潟村ソーラースポーツライン(秋田県南秋田郡大潟村)

1周1.1kmのショートコースを、市販されている電動式のミニカートで走行してその距離を競うもので、本プロジェクトは『INAZUMA II』で参戦。企業や高校などによる6チームと争った本選では、走行直前に電気系統のトラブルがあり出場が危ぶまれましたが、メンバー達による必死の修理でマシンは状態を持ち直し、ドライバーも安定した走行を見せて16周をマーク。2位とわずか1周差と、実力の拮抗した厳しい戦いを制して初優勝しました。同じバッテリーを使って1周6kmのコースを走行し、その距離を競う『鉛蓄電池』のオープンクラスには『ファラデーマジック2』で臨みましたが、バッテリーの充電ミスやモーターの不調もあって26チーム中12位に終わりました。



7月8日

電気自動車チーム

ソーラーカーチーム

「エコカー教室」を開催

■ 湘南キャンパス中央通り、松前記念館

本学と秦野市との提携事業の一環として毎年開催。「光電池と蓄電池について理解を深めてもらうとともに、地球環境保全の重要性を知ってもらう」ことを目的としており、今年度で10回目となります。当日は、秦野市立大根小学校の4年生約110名が参加し、中央通りで『2013年型Tokai Challenger』と電気自動車『ファラデーマジック2』のデモ走行を実施。続いて松前記念館講堂に移動し、ソーラーカーと電気自動車に関するクイズを出題。「曇りの日でも走れるのか」「運転には免許が必要なのか」といった問題に、児童は元気に答えていました。その後、本センター木村英樹所長が「太陽エネルギーとソーラーカー」をテーマに講演を行いました。



7月25・26日

人力飛行機チーム

「第38回鳥人間コンテスト2015」に出場

■ 琵琶湖(滋賀県)

読売テレビ主催による、全国の大学などが参加する人力飛行機の大会で、本学チームは昨年に引き続き、全長1kmのコースのタイムを競う「人力プロペラ機タイムトライアル部門」に出場しました。今年度は、昨年度の機体を引き継いで軽量化などを図った『Nachfolger』を製作。当日は卒業生や学生の保護者も応援に駆けつけましたが、折からの強風にあおられ離陸直後に急旋回。記録を残すことが出来ませんでした。新企画として行われた動画コンテスト「俺たちの機体はココがスゴイ!飛行機自慢コンテスト部門」では、チームの意気込みや機体の特徴を紹介したビデオを作成。視聴者による反響の大きさや番組スタッフによる審査の結果、『飛行機自慢動画賞』を受賞しました。



8月23日

人力飛行機チーム

「ものづくり教室」を開催

■ 湘南キャンパス12号館、高間原第2グラウンド

今回で6回目を迎える本企画は、「手作り飛行機の工作を通して、子ども達にもものづくりの楽しさを知ってもらう」ことを目的とするもので、キャンパス周辺の秦野市立広畑小学校、秦野市立大根小学校、秦野市立鶴巻小学校、平塚市立みずほ小学校の児童90名が参加しました。はじめに、プロジェクトアドバイザーの福田紘大准教授(工学部航空宇宙学科)よりプロジェクトを紹介。子ども達はメンバーや保護者の方と一緒に飛行機づくりに励みました。今回は、子どもが何度でも飛ばして遊べるよう、飛行機を飛ばしやすく、丈夫にするための改良をキットに施しました。出来上がった飛行機をグラウンドで一斉に飛ばしてみると、例年よりも上手に飛ばせる子が多く、笑顔で楽しんでいました。



10月18~25日

ソーラーカーチーム

ソーラーカー世界大会「ブリヂストン・ワールド・ソーラー・チャレンジ2015」で総合3位入賞

■ オーストラリア ダーウィン〜アリススプリングス〜クーパーピディ〜ポートオーガスタ〜アデレード



太陽光のみを動力源として、総延長約3,000kmを総走行時間で競うレースで、1987年から2年に一度開催され、今回が13回目となります。今大会には、前回覇者のオランダ・デルフト工科大学をはじめ、世界25の国と地域から集結する46チームによって行われました。本学は1993年から出場しており、2009年と2011年の大会で2連覇を達成しました。しかし、2013年の前回大会では惜しくも準優勝に終わったことから、本学チームでは優勝奪還を目標に新型車両『2015年型Tokai Challenger』を開発。予選の結果8番目からスタートし、レース前半では電気系統のトラブルやドライバーの体調不良、タイヤのパンクなどに見舞われましたが、徐々に順位をアップ。総合3位でゴールしました。その後フィニッシュ地点であるアデレード市内の

ビクトリア・スクエアでマシンを展示。表彰式では、チームリーダーの大塚隆司さん(工学部航空宇宙専攻修士課程1年次生)に地球儀をあしらったトロフィーが手渡されました。大塚さんは、「デルフト工科大学の優勝を聞いた時は、悔しさよりもすごいチームだという尊敬の念が湧いてきました。マシンの性能では劣っていませんでしたが、チームの総合力で負けてしまった部分があると思う。それを解決するために必要なことをもう一度考え直し、後輩達にはぜひ彼らと同じ場所に立ってほしい。そして私自身、これからもソーラーカーにかかわっていきたく思います」と将来の夢を語りました。11月28日には、BSジャパン開局15周年特別企画として本チームに密着した「太陽を追え!激走!ソーラーカーレース ~オーストラリア縦断3,000キロ~」が放送されました。

10月22~24日

ソーラーカーチーム

「湘南ひらつかテクノフェア2015」にブースを出展

■ ひらつかアリーナ(神奈川県平塚市)

“産学公の連携強化”を目的に業界の枠を越えて、交流を図ろうと平塚商工会議所が毎年開催しているものです。『2013年型Tokai Challenger』の展示とともに、日ごろの活動やチームの理念をポスターで紹介。これまでに出場した大会の実績を紹介する動画も上映し、参加者からの質問に答えました。23日にはメンバーの松崎隼士さん(工学部動力機械工学科4年次生)が“東海大学ソーラーカーチーム活動報告”をテーマに講演。「先生方や多くの企業の方々のご協力を得て、努力を重ねてきたことが結果に繋がっています。今後も上位を目指し、これまでの経験を後輩に伝えたいとともに、マシン設計においても、一つひとつ細かく見直していきます」と語りました。



10月31日

ソーラーカーチーム

「平工祭」に出展

■ 神奈川県立平塚工科大学(神奈川県平塚市)

同校は、部活動の一環でソーラーカーの製作を行っており、卒業生が本プロジェクトのメンバーになるなど、年々交流を深めています。当日は約30名がブースを訪れ、『ブリヂストン・ワールド・ソーラー・チャレンジ2015』での3位入賞をはじめ、オーストラリアの砂漠を走行することなどを、現地で撮影した映像を用いて来場者に説明。また『2013年型Tokai Challenger』の実車を展示し、ブースを見に来た子ども達に対し、運転席に座らせるなどソーラーカーを身近に体感してもらいました。山下奈由実さん(文学部広報メディア学科2年次生)は「小さなお子さんから、ご年配の方まで、どんな方にも分かりやすく興味を持てる説明が出来るように、知識をより深めていきたい」と語りました。



スポーツ社会貢献プロジェクト

湘南 社会貢献

スポーツ社会貢献の新しい形を発信

達成目標 ▶ スポーツ社会に貢献する

学びのテーマ ▶ スポーツ社会貢献の新しい形、可能性を学ぶ

※スポーツ社会…スポーツに関する全ての事柄

プロジェクトリーダー 中根京人 体育学部 スポーツレジャーマネジメント学科 3年
 サブリーダー 佐藤智也 体育学部 スポーツレジャーマネジメント学科 3年
 サブリーダー 石川真琳 体育学部 スポーツレジャーマネジメント学科 3年
 広報リーダー 福田助太郎 体育学部 スポーツレジャーマネジメント学科 3年
 小林沙樹 体育学部 スポーツレジャーマネジメント学科 3年
 会計 参加人数 61名

5月5日
「第37回秦野子どもまつり」に参加
 ■ 秦野中央運動公園陸上競技場(神奈川県秦野市)

秦野市子ども健康部子ども育成課の主催で開催され、本プロジェクトは、2010年から毎年参加しており、今回で5回目となりました。当日は「スポーツの楽しさを感じてもらい、家族間のコミュニケーションを促進する」ことを目的として、スポーツブースを出展。『まてまてしっぽ』『キックボリング』『カラフルけんけん』『カーリング』『大縄飛び』『わなげ』の6種類のブースを用意し、多くの親子連れや小学生達が来場しました。



5月30日、11月21日
「ノルディックウォーキング教室」を実施
 ■ 平塚市西部福祉会館(神奈川県平塚市)

“平塚市在住の高齢者とウォーキングを通じて交流する”ことを目的として開催。5月30日は、前回からのリピーターを含む、平塚市在住の高齢者17名が参加しました。はじめにラジオ体操と、ポールを使った準備体操を実施。ウォーキングではメンバーが先導し、往復約4kmの道のりを約2時間かけて歩きました。11月21日は14名が参加。メンバーは、身体に負担をかけにくいウォーキング方法をレクチャーしました。



10月10日、24日
ワークショップを開催
 ■ 大野子ども家、みなと子ども家(神奈川県平塚市)

“地域青少年の健全育成”を目的に、平塚市より依頼を受け、子ども達に多くの遊びを通して身体を動かす楽しさを知ってもらおうと、毎年実施しています。10月10日の大野子ども家では、30名の子ども達が参加。『アルプスじゃんけん』など4種類の遊びを紹介しました。10月24日のみなと子ども家では、31名の子ども達が参加。全員で物真似をする『犯人をさがせ』をはじめとする4種類の遊びを実施しました。



10月11日
「第4回にこにこ教室」を実施
 ■ 平塚市西部福祉会館(神奈川県平塚市)

本イベントは“親子で楽しめる運動遊びを提供する”ことを目的に、平塚市西部福祉会館より依頼を受け、2012年より毎年行っています。当日は、1歳から2歳の幼児27名とその保護者29名の総勢56名が参加。メンバーはダンスや色合わせのゲーム、障害物競走など4種目の運動を紹介しました。特に、準備体操や童謡の歌詞に合わせて真似をする『リトミック』では、親子でペアになり、互いに同じ動きをして運動を楽しみました。



12月6日
「ステップアップ卓球教室」を実施
 ■ 平塚市西部福祉会館(神奈川県平塚市)

昨年度実施した「初級者のための卓球教室」において、経験者向けの教室も開催してほしいという要望を受けて実施。メンバーと本学卓球部合わせて学生5名が講師を務め、午前・午後の部合わせて20名が参加しました。5台ある卓球台で1名ずつ指導し、基本から応用までステップアップしながら技を練習。参加者からの質問に、身体の向きやラケットの角度など細かく指導を行いました。その後、参加者同士で試合に臨み、ラリーを交わしました。



2016年 1月10日
「第8回東海スポーツDAY」を開催
 ■ 湘南キャンパス総合体育館

“地域に住む多くの方々とスポーツを通じた交流をする”ことを目的に、湘南キャンパス近隣に住む小学生を対象に実施。ポスターやSNSで参加者を呼びかけ、当日は約70名が集まりました。赤組、白組に分かれて全6種目を行い、小学生との交流を深めました。リーダーの中根京人さん(体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科3年次生)は「休憩時間にもメンバーと小学生が、一緒に走り回っている姿を見てほっとしました」と語りました。



サイエンスコミュニケーター

湘南 社会貢献

実験を通して科学の楽しさや魅力を伝える

達成目標 ▶ 理科離れを防ぎ、科学の楽しさを通して人と人とのつながりをつくる

学びのテーマ ▶ 参加者と共に心から科学を楽しめる企画を成し遂げる為のプロジェクト運営を学ぶ

プロジェクトリーダー 中山洋 工学部 応用化学科 2年
 サブリーダー 藤田大洋 情報理工学部 コンピュータ応用工学科 2年
 サブリーダー 佐藤理己也 教養学部 人間環境学科自然環境過程 2年
 広報リーダー 佐藤愛弓 理学部 化学科 1年
 会計 矢島真司 理学部 化学科 2年
 参加人数 58名

5月4・5日
「子ども科学館フェスティバル」にブースを出展
 ■ 伊勢原市立子ども科学館(神奈川県伊勢原市)

“身近な光の性質を紹介することで、科学について多くの人に興味を持ってもらう”ことを目的に出展。「箱の中に虹?!～分光器を作ろう～」をテーマに、分光器の手作りキットを配布し、白色光を赤や青といった色に分ける実験の他、ロボットアームの実験も行いました。



7月11日
「かながわ発・中高生のためのサイエンスフェア」に出展
 ■ 新都市ホール(神奈川県横浜市)

“多くの方々に科学の不思議や魅力を伝える”ことを目的に、同実行委員会が開催。本プロジェクトは『光の不思議を見てみよう』と題し、回折格子を利用した虹の観察や、発光ダイオードを用いて光通信の原理を説明するなど、光に関する展示を実施。当日は中高生や親子連れなど約460名が訪れました。



8月6日
「中高生の理科体験授業」にて実験ショーを実施
 ■ 湘南キャンパス18号館

“本学付属中学校・高等学校の生徒を対象に、理工系進学を身近なものに感じてもらう”ことを目的として実施し、当日は中学生16名、高校生40名の56名が来場。『光を知ろう』をテーマに、ブラックライト、偏光板、LEDの3つのブースを用意し、実験を行いました。



8月22日
「たのしい真空実験」を実施
 ■ 望星学塾(東京都武蔵野市)

“小・中学生に科学をより身近に感じてもらう”ことを目的に、望星学塾の主催で行われました。当日は小学3年生から中学生3年生の18名が参加。真空実験のキットを用いてマシュマロや水に入れた白い花などを真空にする実験に、子ども達は歓声を上げていました。



10月24日
「第23回大根ふれあい祭り」に出展
 ■ 秦野市立大根小学校(神奈川県秦野市)

大根地区社会福祉協議会主催で、来場者へ“理科実験の面白さを伝える”ことを目的に出展しました。当日は児童28名、保護者8名が来場。真空実験や偏光板を使ったブラックウォールの工作、ペットボトルの中で雲を作る実験など、子ども達の興味をひく実験を用意しました。



9月12日
「サイエンスミニフェスティバル」を開催
 ■ 伊勢原市子ども科学館(神奈川県伊勢原市)

子ども達に化学反応を間近で楽しんでもらおうと、スライムと人工イクラの技術を応用したスノードームの実験工作教室を実施。子ども78名、保護者88名の166名が来場しました。子ども達は液体が、スライムや細かな球体に変化する様子を、面白そうに覗き込んでいました。



8月8・9日、11月28日、12月13日
「世界一行きたい科学広場in熊本2015」にブースを出展
 ■ 宗像ユリックス(福岡県宗像市)、熊本キャンパス、本学付属浦安高等学校・中等部(千葉県浦安市)、湘南キャンパス

To-Collaboプログラムに採択された「科学コミュニケーション活動を通じた地域活性化プロジェクト」の一環として、“行政や大学、企業などによるサイエンスショーや科学実験を通して、子ども達が健全に育成される”ことを目的に実施。8月8日の宗像ユリックスにブースを出展し、9日の熊本キャンパスには約2,300名が来場。11月28日には本学付属浦安高等学校・中等部にて開催。子ども約120名、保護者約80名、約200名が来場しました。12月13日は湘南キャンパスで開催。当日はあいにくの雨模様となりましたが、会場には多くの家族連れが来場。科学広場に共催として参加し、防犯ブザーを入れた容器を真空状態にする実験や、骨伝導で音を伝える仕組みを紹介するブースを出展しました。



東海大学学生ロケットプロジェクト

湘南 ものづくり

ハイブリッドロケットを研究開発

- 達成目標 教育・技術継承・技術開発を主とする組織への安定した基盤づくり
- 学びのテーマ 組織に対して個が出来ることは何か? 個に対して組織が出来ることは何か?を学ぶ

プロジェクトリーダー	浦橋悠太郎	工学部	航空宇宙学科航空宇宙学専攻	4年
サブリーダー	橋本下春	工学部	航空宇宙学科航空宇宙学専攻	4年
サブリーダー	比呂悠介	工学部	航空宇宙学科航空宇宙学専攻	4年
広報リーダー	岸里大輝	工学部	航空宇宙学科航空宇宙学専攻	3年
会計	八木功貴	工学部	航空宇宙学科航空宇宙学専攻	3年
				参加人数 57名

4月1日～7月25日
文部科学省で企画展示とワークショップを実施
 ■ 文部科学省 情報ひろば(東京都千代田区)

同省における大学・研究機関等との共同企画広報の一環として行われ、「高度2,400mに到達したハイブリッドロケット～学生ロケットプロジェクトの挑戦～」と題して参加。ハイブリッドロケット「H-34号機」をはじめ、自主開発のロケットエンジン、能代市民ポスター展で最優秀賞を受賞したポスターなど、活動実績を展示しました。



11月3日
「建学祭」にて最優秀賞を受賞
 ■ 湘南キャンパス

170もの企画・展示の中から、教職員の投票により優れた展示団体を表彰するもので、本プロジェクトは、屋外では自作エンジンの公開燃焼実験や、モデルロケットの打ち上げ体験教室を実施。屋内では「TSRP20周年記念展示」と題し、プロジェクト発足の歴史やこれまで打ち上げたロケットの実物を内部まで解説した展示を行いました。



2016年 3月2日、6日
ハイブリッドロケット打ち上げ実験
 ■ 大樹町多目的航空公園(北海道広尾郡大樹町)

3月2日は、1・2年次生が製作した41号機(TSRP-H-41)を打ち上げました。従来のJ型よりパワフルなK型モータを使用し、高度約400mに到達しました。3月6日に打ち上げた40号機(TSRP-H-40)は、新型バルブシステムを搭載。40号機は高度約900mまで上昇したのち、無事にデータを記録した測定器を回収することが出来ました。



Tokai Formula Club

湘南 ものづくり

車体製作だけでなく、人間力もアップ

- 達成目標 全日本学生フォーミュラ大会総合5位以内
- 学びのテーマ 社会に貢献出来るエンジニアになるための知識・技術を学ぶ

プロジェクトリーダー	佐久間翼	工学部	動力機械工学科	3年
サブリーダー	小川和輝	工学部	動力機械工学科	2年
サブリーダー	瀬川高朗	工学部	動力機械工学科	2年
広報リーダー	西尾里奈	工学部	動力機械工学科	2年
会計	下田大	工学部	精密工学科	2年
				参加人数 98名

5月31日
「第53回SHCCミーティング at大磯ロングビーチ」に出場
 ■ 大磯ロングビーチ(神奈川県中郡大磯町)

湘南ヒストリックカークラブ主催の本イベントは、ヒストリックカーなどを愛車にもつ人達の交流を目的に開催され、本プロジェクトは19回目の参加となりました。「全日本学生フォーミュラ大会」と「Formula SAE Australasia 2014」に出場した「TF2014」とプロジェクト紹介パネルを展示し、来場者とマシン構造やメンテナンスについての意見交換をしました。



8月3、5・6、13、18・19、26、30日
「シェイクダウン」「走行会」を実施
 ■ 湘南キャンパス、小笠山総合運動公園エコパ(静岡県袋井市)、富士スピードウェイ(静岡県駿東郡小山町)、大井松田カートランド(神奈川県足柄上郡中井町)

8月3日の学内シェイクダウンに始まり、エコパ、富士スピードウェイ、大井松田カートランドで計6回のテスト走行を行いました。8月前半は走行も不可能な程のトラブルが多く発生しましたが、原因究明と改良を重ねた結果、8月後半には走行回数が増え、大会でトラブルのない走行が出来るように仕上げました。



8月27～31日、9月1～5日
「第13回全日本学生フォーミュラ大会」に出場
 ■ 小笠山総合運動公園エコパ(静岡県袋井市)

公益社団法人自動車技術会主催で、学生が設計・製作したオリジナルの車両の性能を競い、「ものづくりの知識を培うとともにマネジメント能力などを高める」ことを目的とした大会。全86チーム中総合33位でした。また、同大会に出場したオーストリアのグラーツ工科大学から協力の依頼を受け、8月27日から31日までサポートを行いました。



3.11生活復興支援プロジェクト

湘南 社会貢献

被災地の“持続可能な復興”を支援

- 達成目標 現地で行う企画では、毎回3割以上の参加者を募る
- 学びのテーマ 得た知識を理解し、正確に人に伝える力を学ぶ

プロジェクトリーダー	高橋直也	政治経済学部	政治学科	2年
サブリーダー	住吉優希	工学部	建築学科	2年
サブリーダー	藤田健輔	工学部	土木工学科	2年
広報リーダー	滝澤慶幸	政治経済学部	政治学科	2年
会計	杉江隆成	工学部	建築学科	2年
				参加人数 68名

4月26日
「結っ小屋」の完成式を開催
 ■ 三陸町越喜来泊地区(岩手県大船渡市)

結っ小屋は東日本大震災直後の2011年5月に地域住民の要請を受けて建設した応急公民館『どんぐりハウス』を移築した施設です。完成式の前日には、建設廃材を再利用した花壇造りや泊地区復興の取り組みを伝える写真の掲示、プロの音楽家による演奏会などを企画。当日はプロジェクトの学生約10名や地域住民ら約50名が参加し、本センター木村英樹所長の挨拶の後、テープカットなどを実施し完成を祝いました。



8月6日
「紙飛行機づくりやペットボトルロケット飛行体験」を初開催
 ■ 石巻市立相川保育所(宮城県石巻市)

相川地区の高台移転工事の影響で、園庭の一部しか使用出来ず、遊べる場所や遊び方が限られている子ども達に、普段とは少し違った遊びを楽しんでもらおうと本プロジェクトが企画。3種類の『紙飛行機』の製作と、水と空気を使って飛ばす『ペットボトルロケット』の打ち上げを実施しました。最後に、工作を頑張った子ども達全員に、メンバーが手作りのメダルをプレゼント。普段とは違った子ども達の笑顔が見られました。



8月8日
「きまつり～森と木に包まれる夏～」に出展
 ■ 小田原いこいの森(神奈川県小田原市)

さまざまな形で木と関わる機会を提供しようと、きまつり実行委員会が主催しているもので、本プロジェクトは、東日本大震災の被災地復興支援のために『復興ステーション』ブースを出展。柱に応援メッセージを書き込み、被災地の方に思いを届ける『テンセグリティタワー』を紹介しました。『東北物産展』では、道の駅上品の郷から仕入れた東北の特産品を販売。売上10,080円を被災地の製造元に送ることが出来ました。



8月8日
「電子工作教室」を開催
 ■ 泊区公民館(岩手県大船渡市)

津波の被害で遊びや集いの場が無くなった子ども達に、震災前と同様に交流し合える機会を設けようとして企画。地元の小学生とその保護者ら20名以上が参加しました。当日は、電子ピアノ・〇×ゲーム・ルーレット、工作キット3種から好きなものを選び製作しました。さらに、住民同士の結びつきをさらに深めたいという思いで手型アートづくりも実施。参加者全員で“結”の文字が浮かび上がる作品を完成させ、公民館に飾りました。



8月17～30日、11月7日
「結っ小屋」にウッドデッキを建設、完成記念イベントを開催
 ■ 三陸町越喜来泊地区(岩手県大船渡市)

8月30日に開催したイベントには、地域の小中学生とその保護者ら14名が参加。学生と参加者が結っ小屋を中心に泊地区周辺を巡り、店舗や宿泊施設、自然環境といった見どころを紹介する『泊いこマップ』の作成に取り組みました。また、「地域住民の方々にとって気軽に交流出来る憩いの場をつくる」ことを目的として、結っ小屋のウッドデッキに、シンプルで飽きのこないデザイン性にこだわった机と椅子(大人最大6名、子ども8名が利用可)を新たに製作。11月7日に、3セット設置し、地域の方々へお披露目しました。



10月11日、25日、11月15日、22日、12月6日
「市民アカデミー」で講演
 ■ 平塚市中央公民館(神奈川県平塚市)

市民に対して、東日本大震災の被災地への復興支援について考えるきっかけにしようとして企画されたもので、「被災地の未来を創る学生のチカラ つなげよう、ぼくらの支援から、みんなの支援へ」をテーマに全5回開催し、各回とも約20名が受講しました。第1回目から4回目は本プロジェクトの取り組みを紹介。第5回目には、同市の特産物を味わいながら、参加者とともに復興支援に向けて出来ることを話し合いました。



病院ボランティアプロジェクト

湘南 社会貢献

病院と社会をつなぐかけ橋となる

- 達成目標 ▶ 患者さんと接する機会を増やし癒しの場を作る
- 学びのテーマ ▶ スケジュール管理を徹底することを学ぶ

プロジェクトリーダー	梶原大輔	工学部 建築学科	2年
サブリーダー	赤羽哲明	理学部 数学科	2年
広報リーダー	梶原大輔	工学部 建築学科	2年
会計	常盤玲夫	工学部 医用生体工学科	2年

参加人数 33名

5月22日
厚木市に絵本を贈呈
■ 厚木市役所(神奈川県厚木市)

本プロジェクトでは、2012年度から“小児患者への読み聞かせや子ども達に治療の大切さを伝える”ことを目的とした絵本を制作。湘南キャンパスや伊勢原キャンパスの近隣の医療機関や幼稚園などに配布しています。その活動が認められ、厚木市立病院への絵本の設置が実現。『チクっはがんばりのしるし〜ちゅうしゃががんばるぞ〜』など、これまでに制作した4種類の絵本、約20冊を同市の宮台功副市長に手渡しました。



8月29日、12月17日
**「第2回癒しのイベント」、
「第16回院内コンサート」を開催**
■ 医学部付属大磯病院(神奈川県大磯町)、
医学部付属病院(神奈川県伊勢原市)

8月29日は、患者さんに病院内で夏を感じてもらおうと、色紙で手作りした花火の背景で会場を装飾。小田原総合ビジネス高等学校、秦野総合高等学校の2校に出演を依頼し、「上を向いて歩こう」など6曲を琴や三味線、合唱で披露しました。12月17日は、本学学生によるアンサンブルサークルと平塚市を拠点に活躍するゴスペル団体GOSPEL CHOIR 1Cubeの協力でクリスマスソングを披露。患者とその家族ら92名が来場しました。



11月1日
**広報誌「BRIDGE(ブリッジ)」
第3号を発行**

“少子高齢化が進む中で、これからの社会を支える高校生や大学生に、病院ボランティアを知ってもらい、若い世代の病院ボランティアを増やす”ことをコンセプトに、「学生ボランティア」を特集。本プロジェクトが病棟で行っている『食事介助』や、季節にちなんだ『院内コンサート』などの企画を紹介するとともに、プロジェクトOBで2012年に本学を卒業した介護士の山田祐樹さんへ、学生時代に病院ボランティアを経験したことでの学びや気づきについてインタビューを実施。また、順天堂大学の小児ボランティアサークルの取材記事などを掲載しました。



6月1日～12月22日
「2015年度病棟ボランティア」を実施
■ 医学部付属病院(神奈川県伊勢原市)

医学部付属病院脳卒中神経センターや混合病棟において、食事の配膳下膳や食事介助、食事量のチェックを行いました。整形外科病棟では、食事介助のほかにも、患部を冷やす氷枕づくりをしました。小児病棟では、乳児にミルクを与えたり、本プロジェクトが制作した絵本の読み聞かせや寝かしつけ、おもちゃの消毒を実施。計86回のボランティア活動を行い、のべ170名のプロジェクトメンバーが参加しました。



2016年 2月20日
**「第13回医療セミナー みんなで向き合う認知症
～あなたの大切な人が認知症になったら～」を開催**
■ 伊勢原キャンパス松前記念講堂

“患者の方々と同じ目線に立ち、入院生活における不安要素を緩和する”という理念のもと、いざというときに備えて病気に関する知識を身につけてもらうためにセミナーを開催。医学部付属大磯病院神経内科の吉井文均教授を講師に招いて講演会を行い、近隣住民や学生等49名が参加しました。吉井教授は、認知症の原因や症状、予防法や治療法について説明したほか、音楽療法による症状の改善事例をビデオで紹介。「早期発見・早期治療で悪化を緩和させることが出来ます。家族の積極的な関わりも大切です」と語りました。参加者からは「家族に認知症が現れて、不安になっていましたが、病院に連れて行く決心ができました」「周囲の動きかけが大切だとわかりました。家族に伝えて、皆でサポートしたい」などの感想が聞かれました。リーダーの梶原大輔さん(工学部建築学科2年次生)は「より市民に身近なセミナーにするため、参加者が患者を支える側になることを想定した内容にしました。参加者から多くの質問が出されるなど関心の高さがうかがわれ、開催してよかったと思います」と語っていました。

2016年 2月25日、27日
**絵本「やさい きちんと たべられるかな?」
を発行・贈呈式を実施**
■ ちどりこどもクリニック(神奈川県厚木市)

2月25日、“食育”をテーマにした絵本を発行しました。主人公のカナちゃんが野菜の妖精と出会い、好き嫌いを克服するようになるストーリーで、制作にあたり、吉田佐亜弥さん(教養学部芸術学科デザイン学課程2年次生)に挿し絵の協力を依頼。水彩で描かれた鮮やかな世界観が特徴の絵本となりました。2月27日には、ちどりこどもクリニックで絵本の贈呈式を開催。地域の子どもや保護者ら18名にメンバーが絵本の読み聞かせも行いました。本誌は湘南キャンパス近隣の医療機関や幼稚園、保育園、図書館などに配布しました。



キャンパスストリートプロジェクト

湘南 地域活性

より魅力ある街づくりを提案

- 達成目標 ▶ 地域のつながりを確かなものにする
- 学びのテーマ ▶ 相手の立場になって考える力を学ぶ

プロジェクトリーダー	江崎高弘	文学部 アメリカ文学科	3年
サブリーダー	七戸秀希	工学部 生命工学科	3年
サブリーダー	田村詩織	文学部 広報メディア学科	2年
広報リーダー	栗藤みゆき	文学部 広報メディア学科	2年
会計	木村春奈	文学部 広報メディア学科	2年

参加人数 50名

6月30日～7月2日
「TOKAI音食WEEK 2015」を開催
■ 湘南キャンパス噴水前特設ステージ

この街ならではの味を楽しむ“食”と、学生、教職員、地域の方々の有志らによる音楽パフォーマンスによる“音”をコラボレーションさせた地域交流イベントです。10年目を迎えた今回は、TICCと協力して6月30日に、世界中の食と音楽を集めた『異文化交流DAY』を初実施。7月1・2日は『地域交流DAY』として地域の魅力を発信。多くの学生や教職員、地域住民らでにぎわい、合計約1,400名が来場。“音”と“食”を楽しみました。



4月14日～7月2日、10月1日～12月17日(毎週火・木曜日)
「学内パン販売」を実施
■ 湘南キャンパス1号館前・14号館前

社会福祉法人かながわ共同会秦野精華園(以下 精華園)と協力して「学内パン販売」を実施しました。精華園は市町村や地域社会資源と連携を図り、障害のある方が暮らしやすい地域作りを目指すための支援施設として運営されている社会福祉法人かながわ共同会秦野精華園と協力して実施しました。メンバーは販売サポートを通じて、販売個数や品目のデータを収集し、統計処理・分析を行うことでマーケティングを実践的に学ぶ場として活用。年間で11種類の新商品を企画・販売し、計44回の販売で、総売り上げが520,190円、平均売り上げが11,823円でした。



10月12日、2016年 3月13日
花壇植栽を実施
■ 小田急線東海大学前駅南口(神奈川県秦野市)

東海大学駅前商店会主催によるもので“地域住民へ秦野市ブランドの意識づけ”と“秦野市と本学の繋がり”の発信を目的に、昨年度より、花壇のデザインを提案し、商店会の方々と共に、花の植え替えを行っています。10月12日は、12名の商店会や秦野市北矢名日の出自自治会の方々と12名のプロジェクトメンバーの総勢24名が参加。約1時間かけ、伸びた雑草の処分と、576株の花々を花壇に植えました。



11月20日、11月30日～12月25日
「クリスマスU-night2015」を開催
■ 大根幼稚園(神奈川県秦野市)、小田急線東海大学前駅駅前広場(神奈川県秦野市)

“地域住民の方々に地元でクリスマスの雰囲気を楽しんでいただくと共に、学生と住民の交流の場を作る”ことを目的に、様々な活動を展開。11月20日には、大根幼稚園にてクリスマスベイトポルライトの制作を行い、園児約80名が参加しました。11月30日には、駅前広場にてクリスマスツリーの点灯式を実施。地域の方々約30名、本学学生約20名、メンバー15名が参加し、色とりどりのイルミネーションが照らし出されました。12月6日は、サイエンスコミュニケーター、環境キャラバン隊と協力して、ワークショップや環境劇を実施し、約90名が来場しました。12月19日には、地域のクリスマスムードを盛り上げる『ナイトウォーク』を初開催。メンバー15名のほか秦野市職員、近隣住民など35名が参加し、サンタクロースやトナカイの衣装とともに、防犯意識を高めるために“地域の安全運動実施中”と書かれた幟やビブスを着用して夜の街を歩きました。



2016年 3月1日
フリーペーパー「ThLive!」を発行

“本学学生には周辺地域の魅力を、地域の方々には本学学生の活動を発信することで、世代や立場を越えて湘南キャンパスと周辺地域の繋がりを深める”ことを目的に、約3年ぶりに第16号を発行。“湘南キャンパス周辺地域の魅力”をテーマに、四季ごとに紹介する『2016年に行きたい地域イベント』や、学生・街の人にアンケートを実施した『この街の好きなところ』などを特集。湘南キャンパスをはじめ、キャンパス周辺地域の飲食店約80店舗にて配布しました。



Tokai International Communication Club

湘南 国際交流

異文化を知って、日本や自分を見つめ直す

- 達成目標 イベント参加者のべ1,300名を目標に多文化共生の意識を広める
- 学びのテーマ 物事の背景まで目を向けて多文化共生についての考え方を学ぶ

プロジェクトリーダー	倉升克幸	工学部 応用化学科	2年
サブリーダー	松田幸也	法学部 法律学科	2年
サブリーダー	高村深芽	観光学部 観光学科	2年
広報リーダー	館岡太郎	理学部 化学科	2年
会計	前場美里	文学部 日本文学科	2年
参加人数 55名			

4月15日～8月6日、9月9日～2016年3月24日 (毎週水・木曜日)

「2015年度にこティー教室」を実施

■ 秦野市立南公民館 (神奈川県秦野市)

外国につながりを持つ秦野市在住の子ども達に対し、日本語や普段の学習へのサポートを提供する場で、3年目を迎えた今年度は計73回実施。ペルーやブラジル、フィリピンなどにつながりのある未就学児から高校生までの子ども達、のべ1,000名以上が参加しました。



8月5・6日、19～21日

「宿題サポートプロジェクト」を開催

■ 秦野市立南公民館 (神奈川県秦野市)

『にこティー教室』の延長として夏休みの宿題に特化してサポートする企画です。期間中は毎回10名以上の小学生から高校生が集まり、のべ45名が参加。メンバー達は、夏休みの宿題についての質問に答えるとともに、作文や自由研究のテーマを一緒に考える姿も見られました。



5月8日～7月17日、9月25日～2016年1月12日

「2015年度Communication Lunch」を開催

■ 湘南キャンパス8号館

2013年度より「留学生と日本人学生と一緒に昼食をとりながら、簡単な英語や日本語を用いて交流が出来る場」として実施。今年度は計33回開催し、タイ、イラン、スペインなどの留学生のべ220名、プロジェクトメンバーを含む日本人学生のべ455名が参加、出身国の文化について話したり、ゲームを通じて親睦を図りました。



7月7日、11月24日、12月14日

「For the Future ～グローバル化していく日本社会～」を開催

■ 湘南キャンパス8号館

7月7日は、「子どもたちの未来は平等か」と題し、「海外移住者と教育」に焦点を当て、講演とディスカッションを実施。本学の一般学生や留学生48名が参加しました。11月24日は、「LGBTと社会空間」と題し、日本におけるグローバル化について講演とディスカッションを実施。本学の一般学生や、タイからの留学生など34名が参加しました。12月14日は、「国際結婚を語る」と題し、「文化の違いを受け入れる」ことへの理解を目的に、国際結婚に焦点を当てたパネルディスカッションを実施しました。当日は、本学の一般学生や、ベトナムや中国からの留学生など36名が参加しました。



6月6日、10月3日

「TICC Sports Festa」を開催

■ 湘南キャンパス高間原グラウンド

“本学に在籍する様々な国の留学生と日本人学生が交流を図る”ことを目的に開催。6月6日はメンバー23名と留学生8名、日本人学生10名の総勢41名が参加。10月3日はメンバー17名、留学生25名、日本人学生8名の計50名が参加。様々な競技を通して交流を深めました。



9月3日

「2015年度日本文化交流会」を開催

■ 翰林日本語学院 (神奈川県横浜市)

“日本語を学ぶ留学生に対し、日本人との交流の機会を増やす”ことを目的に実施し、本プロジェクトは日本の伝統文化をレクチャー。当日は、14名のメンバーと、中国やロシア出身の留学生25名が交流し、『ジェスチャーゲーム』や『日本食づくり』に挑戦しました。



9月19日、2016年2月27日

「世界の国々をのぞいてみよう」を開催

■ 秦野市立南公民館 (神奈川県秦野市)

“子ども達が外国に興味を持ち、将来的には国際的視野を持ってもらう”ことを目的に、9月19日は中国山東省青島市出身の野村瑛子氏を講師に招き14名が参加。2月27日はペルーの都市トルヒーリョ出身の市川ジョバンニ氏を講師に招き、51名が参加しました。※講師はいずれも神奈川県立地球市民かながわプラザ所属



湘南 環境

環境キャラバン隊

エコ教室や出前授業を開催

- 達成目標 「企画立案・主催」…多くの企画を通して、他団体とのつながりを得るとともにプロジェクトの運営力を身に付ける
- 「伝える」…様々な方法で広報し、プロジェクトの知名度を上げる
- 学びのテーマ 教学相長

プロジェクトリーダー	小倉有貴	教養学部 人間環境学科自然環境課程	3年
サブリーダー	梅澤麻衣	教養学部 人間環境学科自然環境課程	3年
サブリーダー	木村勇輝	工学部 材料科学科	2年
広報リーダー	井上明日香	教養学部 人間環境学科自然環境課程	3年
会計	伊東裕奈	教養学部 人間環境学科自然環境課程	2年
参加人数 43名			

5月4日

「ガーデンシティ多摩センター子どもまつり2015」にてワークショップを開催

■ エリアベネッセ多摩センター (東京都多摩市)

多摩センター地区連絡協議会の主催で、“子供・両親・祖父母の3世代がゴールデンウィークを多摩センターで楽しく過ごしてもらうため”のイベントとして開催。本プロジェクトは“電気の大変さやクリーンな発電方法について子ども達に体感してもらう”ことを目的に、『手回し発電』、『パラボラ発電』、『風力発電』の3つのコーナーを設けました。当日はブースに250名もの子ども達が訪れ、手回し発電機のブースは長蛇の列が出るほど盛況でした。メンバーの染谷侑さん(教養学部人間環境学科自然環境課程2年次生)は「子ども達が大きいに喜んでくれたことから、少しでも発電の大変さや電気の大変さを理解してもらえたと思います」と語りました。



5月17日

「ECOクッキング ～野菜を上手に使い切ろう～」を実施

■ ユニコムプラザさがみはら (神奈川県相模原市)

“まだ食べられる食品を廃棄する食品ロスについて学び、食の分野から環境問題を考えてもらう”ことを目的として開催。東京近郊の大学生ら約20名が参加しました。はじめにメンバーの野崎祐里香さん(教養学部人間環境学科自然環境課程3年次生)が、「食品ロス」について農林水産省の統計資料などを示しながら解説。続いて、全国大学生環境活動コンテスト(ecocon)実行委員会の学生が考えたレシピを基に、同実行委員会のメンバーが自治体や企業で実施している食品ロスを減らす取り組みを紹介。これを受けて“自分達に出来る食品ロスを減らす方法”をテーマにグループディスカッションを行い、各代表者が成果を発表しました。



10月3日

「おださがロードフェスタ」に初出場

■ 小田急線小田急相模原駅前 (神奈川県相模原市)

“小田急相模原の街の魅力を発信する”ことを目的に開催され、同実行委員会から依頼を受け、ブース出展と特設ステージで環境劇を行いました。ブースでは、100名以上の親子連れが来場。豆電球とLED電球の消費電力の違いを、手回し発電機を用いて来場者に説明しました。他にも、洗剤いらずの『アクリルたわし』を作るワークショップを実施。特設ステージでは、プロジェクトのオリジナルヒーロー「エコウェーブ」による環境劇を行いました。メンバーの染谷侑さんは「子どもに合わせた内容にしましたが、実際には大人の方も多く、私達に興味を持っていただけでもありがたいと感じました」と語りました。

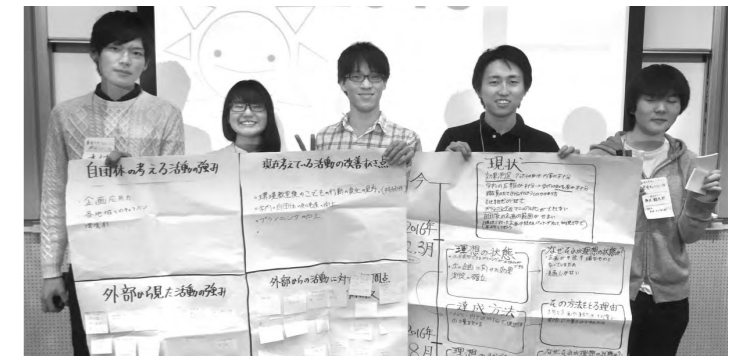


12月26・27日

「第13回全国大学生環境活動コンテスト(ecocon)」に出場

■ 国立オリンピック記念青少年総合センター (東京都渋谷区)

“学生環境活動の活性化を通じた持続可能な社会の実現”を目的に同実行委員会が開催。今大会には全国から43団体がエントリーし、6グループに分かれ予選会が行われました。メンバーは今年度行った活動として、難しい環境問題を子ども達にも楽しく知ってもらおうと、環境汚染に立ち向かうヒーロー「エコウェーブ」が活躍する「環境劇」と、高校生・大学生を対象に「フードロス」をテーマに料理教室とワークショップを実施した「ECOクッキング」の企画をパワーポイントで紹介。結果として、グループ内では6団体の6位という結果となりましたが、他大学の学生や審査員の方からアドバイスをもらい、メンバーの学びとなりました。



Music Art Project

湘南 社会貢献

音楽を通して、人とのつながりを深める

- 達成目標 ▶ 演奏会だけではなく、ワークショップなど新たな取り組みに挑戦し、幅広い交流を生み出す
- 学びのテーマ ▶ 外部団体とのイベント実施を通し、工程管理力を学ぶ

プロジェクトリーダー	吉田安部	教養学部	芸術学科音楽学課程	4年
サブリーダー	勝間田智美	教養学部	芸術学科音楽学課程	4年
広報リーダー	上田紅莉	教養学部	芸術学科音楽学課程	2年
会計	勝間田智美	教養学部	芸術学科音楽学課程	4年
参加人数 98名				

11月3日
「MAP FESTA2015」を開催
■ 湘南キャンパス・スタジオソナーレ

当日は会場が満席になる賑わいで、のべ38名が来場。メンバーは、映画「レ・ミゼラブル」をはじめとする管弦楽の独奏やアンサンブル、ピアノ演奏、声楽の独唱など、多様な音楽に触れられるコンサートとなるように演出の工夫を凝らしました。メンバーの上田紅莉さん(教養学部芸術学科2年次生)は「多様な演奏形態のコンサートを実現するためには、多くの協力が必要であることを学びました」と語りました。



12月16日
「Christmas Concert 2015~Classical Night~」を開催
■ 湘南キャンパス松前記念館講堂

“音楽を通じて人と人とのつながりを増やす”ことを目的に、本学学生や地域の方々にクラシックに触れてもらおうと、毎年クリスマスの時期にコンサートを開催しています。現役プロジェクトメンバーのほかにも、プロジェクトのOB、OGも演奏者として出演し当日は45名が来場。「ヴァイオリン・ソナタ K.454 第1楽章」、「輝く無限の空」「ロミオとジュリエット」より「私は夢に生きたい」など全12曲を披露しました。



Beijo Me Liga

湘南 国際交流

ブラジル人学校とのつながりを中心とした異文化交流

- 達成目標 ▶ 在日外国人が暮らしやすい環境づくり
- 学びのテーマ ▶ 異文化交流による異文化理解

プロジェクトリーダー	瀬本健	工学部	動力機械工学科	2年
サブリーダー	流田春美	文学部	ヨーロッパ文明学科	3年
サブリーダー	富澤沙央里	理学部	化学科	3年
広報リーダー	小針有翔	理学部	化学科	3年
会計	平田佑衣	法学部	法律学科	4年
参加人数 99名				

4月12日
「第4回イースター祭」を開催
■ 家跡地自然園(神奈川県厚木市)

アクアレラに通う3~15歳の子ども達に祖国の文化を日本でも楽しんでもらおうと実施。当日はアクアレラの生徒と先生20名と東海大生26名の計46名が参加し、イースターエッグを楽しそうに探していました。



6月27・28日
「日伯学園」にて交流会を実施
■ 日伯学園(群馬県大泉町)

異文化交流の一環として23名が参加。初日は在日ブラジル人が多く在住する東武小泉線西小泉駅周辺を散策。2日目は日伯学園を訪問し、ブラジルのお祭り「Festa Junina」やソーラン節で、お互いの文化を楽しみました。



8月6日
「マルチカルチャーキャンプ」を開催
■ 湘南キャンパス

“在日ブラジル人学校に通う子ども達がコミュニティの幅を広げ、多様な人々との交流を深める”ことを目的に、総勢117名が参加。即興でパフォーマンスを披露し合う「サラウ」など、多くのアクティビティを行いました。



2016年 2月6日
「キララ賞(かながわ若者生き活き大賞)」を受賞
■ オルタナティブ生活館(神奈川県横浜市)

神奈川県を拠点に平和・環境・福祉・文化・国際交流などの分野で活躍する若者に贈られるもので、日本に住む外国籍の子どもを対象に継続してきた交流活動の成果などが、高く評価されました。



Japan Community Development Association

湘南 国際交流

すべての人の権利が平等に保護される社会作り

- 達成目標 ▶ マイノリティに対する不利益を軽減し、誰もが自己の持つ権利が保護される
- 学びのテーマ ▶ マジョリティとマイノリティ、JICA、国際連合、NGOについて学ぶ

プロジェクトリーダー	金田孝史	法学部	法律学科	2年
サブリーダー	相場翔平	教養学部	国際学科	2年
広報リーダー	中村崇	工学部	動力機械工学科	1年
会計	大原司	政治経済学部	経済学科	4年
参加人数 44名				

5月21日
セミナー&ワークショップ
「誰がマイノリティなのか?」を開催
■ 湘南キャンパス8号館

“今後の活動に向けて異なる国にルーツを持つ人同士が互いのアイデンティティを尊重し、共存していくために必要なことを学ぶ”を目的に実施。地域住民や学生ら約50名が参加しました。当日は、荒木圭子准教授(教養学部国際学科)が基調講演を実施。続いて、異文化交流を疑似体験するカードゲーム「バーンガ」に挑戦。普通とは違うルールของเกมを通じ、不安やもどかしさなど、少数派における感情を体感しました。



6月27日
「第2回国際協力実務研修
誰かが足りない...大学生はまだか?!」を開催
■ 湘南キャンパス松前記念館講堂

国際協力に関心のある学生を対象に行っている講演会や勉強会の一環として開催し、学内外の学生や教員ら約40名が参加。当日は3部構成となっており、第1部はメンバーが登壇。“多様化する国際協力”をテーマに発表を行いました。第2部は、横須賀市議会議員の小林伸行氏と本センターの木村英樹所長が講演。第3部では『SSR-創出と実践-』をテーマに、パネルディスカッションを実施しました。



DAN DAN DANCE & SPORTSプロジェクト

湘南 社会貢献

パフォーマンスや身体表現を通じて地域と交流

- 達成目標 ▶ 「観る」「する(踊る)」「支える」のそれぞれの人たちが協力して活躍する
- 学びのテーマ ▶ 身体表現パフォーマンスを通じて「集うこと」「繋がること」「創り出すこと」を学ぶ

プロジェクトリーダー	横堀美咲	体育学部	生涯スポーツ学科	2年
サブリーダー	米盛一馬	理学部	化学科	3年
サブリーダー	出雲琴乃	文学部	日本文学科	2年
広報リーダー	相澤かざね	体育学部	スポーツレジャーマネジメント学科	2年
会計	鈴木杏実	体育学部	スポーツレジャーマネジメント学科	2年
参加人数 52名				

6月14日、8月9日
オープンキャンパスで
パフォーマンスを披露
■ 湘南キャンパス

昼と夕方にダンスイベント「フラッシュモブ」を計6回披露。会場に突然音楽が流れ、スタッフとして来場者の誘導に当たっていたメンバーに加え、事前に練習を重ねていたオープンキャンパスのボランティアスタッフの学生達が踊りだすと、来場者は突然のことに驚いた様子でその光景に見入っていました。



11月21日
「みんなであつなろう!友達の輪
~Let's challenge in Sozen~」に参加
■ 平塚市立崇善小学校(神奈川県平塚市)

ライトパワープロジェクトと合同で、“子どもと保護者のふれあいの場を提供する”ことを目的に開催。小中学生約100名と保護者約50名の総勢150名ほどが集まりました。小学生でも覚えやすいよう擬態語を使いながら振り付けをレクチャー。終盤には、フラッシュモブを実施。突然のサプライズイベントに児童らは、大喜びでダンスを見つめました。



2016年 1月24日
「DAN DAN DANCE & SPORTS
第5回公演」を開催
■ 湘南キャンパス2号館大ホール

“身体表現の楽しさや所属団体、世代、ダンスのジャンルを超えて楽しむ”ことを目的に毎年開催。本キャンパスで活動しているモダンダンス部やチャリーディング部、他大学の学生や厚木市、平塚市などのダンススクールに通う小・中学生らも参加し、13組約250名が日ごろ培ったパフォーマンスを披露。約300名が観覧に訪れました。



Takanawa共育プロジェクト

高輪 地域活性

高輪地区の活性化を目指して

達成目標 大学と地域の融和

学びのテーマ 地域貢献から広報を学ぶ

プロジェクトリーダー	田口幸来	情報通信学部	通信ネットワーク工学科	3年
サブリーダー	片岡優子	情報通信学部	通信ネットワーク工学科	3年
サブリーダー	森本実沙	情報通信学部	組込みソフトウェア工学科	2年
広報リーダー	菅野真優花	情報通信学部	通信ネットワーク工学科	3年
会計	佐々木凛	情報通信学部	経営システム工学科	3年
参加人数 49名				

2015年4月～2016年2月(毎月開催)

地域に向けた定期活動の実施

■ 高輪キャンパス周辺

高輪警察署と協力して開催した「地域清掃」をはじめ、ボランティア団体の桂坂を花いっぱいにする会が主催する「桂坂の花植え」やテニス部と協力して実施した「テニススクール」など月に1度のペースで高輪地域に向けた活動を行い、地域の方々との交流を深めました。



5月16・17日

「三社祭」で神輿担ぎを体験

■ 浅草神社(東京都台東区)

毎年約150万人が訪れるイベントで、高輪地区の神輿同好会「縄の会」から招待され、「地域の方々との交流」と「日本文化の再認識」を目的に、初日には4名、2日目には11名のメンバーが参加。「縄の会」や他の神輿団体の皆様と一緒に、神輿を担ぎました。



8月22・23日、29・30日

港区の夏祭りをサポート

■ 高輪キャンパス周辺

8月22日・23日は「高野山東京別院盆踊り」で12名のメンバーが会場の設営や屋台を担当。同日に行われた「麻布十番納涼まつり」では12名が屋台をサポート。8月29日・30日の「泉岳寺大盆踊り大会」では、7名がやぐらや提灯の設置や、屋台で調理・販売。9月6日の「高輪神社例大祭」では、10名が神輿を担ぎました。



12月1日～25日、12月18日

「クリスマスイルミネーション点灯式」を実施

■ 高輪キャンパス1号館前

地域の子供達や学生など28名が来場。吉田正廣教授(情報通信学部長)が挨拶したのち、参加者全員でカウントダウンを行い、キャンパスに色とりどりの明かりが照らし出されました。12月18日には「クリスマスワークショップ」も開催。高輪地域に住む15名の親子連れが参加し、サンタをかたどったキャンドルを作りました。



5月4・5日

「清正公大祭 のれんノ市」に出展・サポート

■ 高輪キャンパス周辺

メリーロード高輪が主催する本イベントは、約15,000名が訪れる賑わいで、本プロジェクトの出展ブースにも約150名が来場。メンバーは気仙沼の写真展示や、気仙沼の復興現状、更なる支援が求められていることを伝えました。他にも気仙沼特産品の販売補助や、気仙沼への募金活動を行い、約5万円が集まりました。



7月1～7日

「七イベント」を開催

■ 高輪キャンパス1号館エクステンションセンター前

学生や地域の方々、短冊に願い事を書くことで、学内を盛り上げると同時に、地域の方々により大学を身近に感じるきっかけを作るために実施。メリーロード高輪商店街会長より提供いただいた笹を学内に設置。目標の150枚を上回る170枚の短冊を飾ることが出来ました。



11月22日

「高輪まつり2015～防災・減災を考える交流会～」を開催

■ 高輪キャンパス

“地域の方々緊急時・災害時における意識を高める”ことを目的として、災害時の避難所に指定されている本校舎に地域の方々490名が来場。内田理准教授(本学情報理工学部)の講演をはじめ、ビデオの上映、マグロの解体ショーや、お寿司の販売と同時に寄付を集めました。



12月11～13日

「電子工作教室」を開催

■ 宮城県気仙沼市

気仙沼中学校の生徒を対象に開催。本企画で使用する基盤やキットは、情報通信学部のメンバーが日ごろの学びを生かしてあらかじめ作成したものです。当日は、初めてハンダごてを使う中学生も多い中、メンバーは丁寧に指導。自分で組み立てた機器を使い、相性診断ゲームなどを楽しみました。



先端技術コミュニティACOT

熊本 ものづくり

先端技術を活用したシステム開発と社会貢献

達成目標 新たな先端技術の活用を目指しシステム開発や、それらを支える様々な社会的実践力とコミュニケーション力を培う活動を通して、社会貢献に繋げる

学びのテーマ 社会貢献のための実践力とコミュニケーション力を学ぶ

プロジェクトリーダー	花岡昇	基盤工学部	電気電子情報工学科	3年
サブリーダー	堀文雄	基盤工学部	電気電子情報工学科	3年
サブリーダー	笹原信也	基盤工学部	電気電子情報工学科	3年
広報リーダー	木下建介	基盤工学部	電気電子情報工学科	1年
会計	中島祐人	基盤工学部	電気電子情報工学科	2年
参加人数 35名				

3月23日～4月5日

「夜桜ECOライトアップ」を実施

■ 熊本キャンパス

校内にあるソメイヨシノ約10本を、太陽光発電で蓄えた電気を使ってLED投光器で照らすもので、グリーンエネルギーで非常用電源を確保する基盤を作るとともに、キャンパスのよりいっそうの活性化を目標に毎年行っています。期間中は日没から午後10時までライトアップ。今年は発電に使うソーラーパネルを6台から8台に、投光器の数も16器から25器に増やすことで、昨年以上に鮮やかに桜を照らし出しました。



10月13日

「ロボット教室」を開催

■ 熊本市立西原小学校(熊本県熊本市)

“小学生にロボットやプログラミング体験を通して興味を持ってもらう”ことを目的として、4年生から6年生を対象に、本学付属熊本本翔高等学校の生徒と共同で開催。クラブ活動の時間を利用して、定期的に訪問しています。当日は、簡単にロボットのプログラミングが出来る「教育版レゴ マインドストームNXT」を使って、約30名の児童に対し、4名のメンバーと4名の付属高校の生徒、計8名で指導にあたりました。



6月27日～8月9日

「ロボットサマークラブ」講座をサポート

■ 熊本キャンパス

“レゴマインドストームNXT”を通じてものづくりの魅力を伝えるとともに、ロボットの競技会で上位を目指してもらう”ことを目的にNPO法人HITOプロジェクトが主催となり計4回実施。毎回、小学校4年から中学校3年約20名が参加しました。メンバーは、ロボットの部品の役割を説明し、組み立て方を指導。完成したロボットのセッティングやプログラムを見てアドバイスを送りました。また、実際の競技会で使われているコースを設置し、ロボットを走行させました。



11月18・19日

「ETロボコン2015 チャンピオンシップ大会」に出場

■ パシフィコ横浜(神奈川県横浜市)

“今までの自分達を超える”という思いを込め、チーム「ACOT+」として出場。コースに特設したパフォーマンスステージでのアイデアや、ロボットの動作の完成度が審査されるイノベーター部門で、全国の予選を勝ち上がった9チームと日本一を争いました。当日は携帯端末やプロジェクターなど、ハードウェアにトラブルが発生。マシンは目的地まで走行しましたが、プロジェクターが動作しないなど実力を発揮できず、総合9位となりました。



9月12日

「WRO Japan2015熊本大会 リベンジマッチ」の運営をサポート

■ 熊本キャンパス

WROは自律走行するロボット「レゴマインドストームNXT」のプログラミング技術などを競うもので、8月23日に行われた「WRO Japan2015熊本大会」に参加した小中学生約10名を対象に、反省を踏まえて記録更新を目指そうと開かれました。参加した小中学生はロボットを改良し、専用のコースで記録更新を狙う中、メンバーはコースを設置したり、子ども達からの質問に答えたりしていました。同日には「CTF for ビギナーズ015 熊本」勉強会の運営もサポート。約50名の学生や地域住民らが参加しました。



12月12日

ものづくり教室「作って楽しいクリスマスパーティー」を開催

■ 熊本キャンパス

ものづくりの楽しさを知ってもらおうと、昨年度より熊本地域プロデュースプロジェクトと合同で開催。地域の小学生とその保護者ら48名が参加。キャンドル作家の上村敏子氏を講師に招き、サンタクロースをイメージしたキャンドルを手作りしました。また、アルミ製の棒を磁力で動かすリニアモーターの作成をはじめ、レゴロボットの遠隔操作や自作の塗り絵を携帯端末に取り込み画面上で立体的に見せるワークショップも実施しました。



メカトロマイスター

熊本 ものづくり

技術の融合から新しい社会を考える

- 達成目標 レスキューロボットコンテスト、ソーラーカーレース鈴鹿にて自己ベストを更新する
- 学びのテーマ 目標達成のための効率良い行程管理やチームマネジメント能力を学ぶ

プロジェクトリーダー	中村祐大	基盤工学部	医療福祉工学科	3年
サブリーダー	梅津圭佑	基盤工学部	電気電子情報工学科	2年
サブリーダー	富田恭平	基盤工学部	電気電子情報工学科	2年
広報リーダー	富田恭平	基盤工学部	電気電子情報工学科	2年
会計	梅津圭佑	基盤工学部	電気電子情報工学科	2年
				参加人数 36名

6月28日
「レスキューロボットコンテスト 神戸予選」に出場
■ 神戸サンボーホール(兵庫県神戸市)

レスキュー活動の大切さ、難しさを考えてもらおうと開催され、地震で倒壊した市街地を模した6分の1スケールの実験フィールド上の人形を、ロボットを遠隔操作して安全地帯に移動させ、その数やタイムなどを競います。本プロジェクトは新規に開発した3機のロボットで挑みましたが、マシンの故障が相次いで走行することが出来ませんでした。



7月10日
「ロボット教室～ロボットで遊ぼう～」を開催
■ 付属かもめ幼稚園(熊本県熊本市)

ロボットやソーラーカー開発のスキルを生かして、子ども達へものづくりに興味を持ってもらおうと、2013年より毎年同園を訪問。年長組の園児80名が参加し、グループに分かれてロボットの操作を体験しました。メンバーは、初めてのロボット操作でも上手に扱えるように、一人ひとりに対して丁寧にアドバイスをしました。



2016年 3月5日
「東海大学 CHALLENGE CUP 2016 第4回マイコンカーラリー」に出場
■ 熊本キャンパス

マイクロコンピュータで制御された完全自走式マシンによって、規定コースの走行タイムを競うもので、先端技術コミュニティACOTと共に出場。合わせて5台がエントリーしたのですが、予選で敗退となりました。また、高校生の部では運営スタッフとして参加。副審をはじめ、車検や写真・動画の撮影などを担当しました。



熊本地域プロデュースプロジェクト

熊本 地域活性

熊本の街をブランディング・外部への発信

- 達成目標 ①地域交流及び魅力発信のためのイベントを年4回実施 ②地域の魅力を発信するためのフリーペーパーを年2回発行
- 学びのテーマ 地域の魅力発信のノウハウを学ぶ

プロジェクトリーダー	岡田善典	経営学部	観光ビジネス学科	3年
サブリーダー	瀬田勇樹	経営学部	観光ビジネス学科	2年
サブリーダー	大庭悠登	経営学部	観光ビジネス学科	2年
広報リーダー	甲斐正子	経営学部	観光ビジネス学科	3年
会計	岡優希	経営学部	観光ビジネス学科	2年
				参加人数 30名

6月6日
「ホテル鑑賞ツアー」を開催
■ 熊本県御船町

地域の自然の豊かさを感じてもらおうと同時に、交流を通じて地区の魅力を知ってもらおうと企画。御船町に住む小学生と、熊本市立帯山小学校と同西原小学校の児童にも参加を呼びかけ、計43名が参加。当日は学生がガイド役をつとめ、水越川沿いの一帯を案内。日没を待ってホテルが光り始めると、歓声を挙げて喜ぶ姿が見られました。



10月13日、2016年 3月30日
フリーペーパー「望逢(noah)」 vol.2、vol.3を発行

熊本の観光資源をPRすることなどを目的に、取材、編集、撮影、レイアウトまで全てを担当。10月13日発行のvol.2では、熊本県三ヶ浦の施設や名所を取材して組んだ特集「さんがうらってどんなところ?」や、熊本の方言の意味を解説する『熊本方言集』を掲載。3月30日発行のvol.3では、熊本市内を走る路面電車を特集しました。



11月21日
「みんなおいで写真大会 ～西原の秋を撮りに行こう～」を開催
■ 熊本キャンパス周辺

“キャンパス周辺の地域を実際に散策しながら写真に収めることで、街の魅力を地域の方々と発見・共有することが目的です。地域の方々とメンバー合わせて34名が参加し、“この街の魅力”をテーマに写真を撮影。撮影会後、写真コンテストを行い、菅原神社とイチョウの木を一枚に収めた写真がグランプリに輝きました。



阿蘇援農コミュニティプロジェクト

阿蘇 地域活性

農業の実態を学び、発展を考える

- 達成目標 地域への情報発信により、多くの方に農業について関心を持ってもらう
- 学びのテーマ 援農活動の実践を通し、技術と知識を深め、農業の現状を学ぶ

プロジェクトリーダー	笹本翠	農学部	応用動物科学科	3年
サブリーダー	一戸明香	農学部	応用動物科学科	3年
サブリーダー	畑川祐希	農学部	応用動物科学科	2年
広報リーダー	竹村愛乃	農学部	応用動物科学科	3年
会計	脇志明弥	農学部	バイオサイエンス学科	3年
				参加人数 82名

4月11・12日、5月3日、31日、6月14日
「春の短期援農」を実施
■ 阿蘇郡西原村、阿蘇郡南阿蘇村

4月11・12日は、阿蘇郡西原村のアスパラ農家へ12名が訪問。アスパラ苗の定植や、倉庫の床にビニールシートを敷き砂利を被せる作業、ビニールハウス間の除草に取り組みました。5月3日は阿蘇郡南阿蘇村のトマト農家に4名が訪問し、ハウス栽培のトマト苗の定植、5月31日・6月14日はアスパラガスの短期援農を実施しました。新メンバー12名を含む17名が参加し、摘芯作業や作物を支える網の位置替え、農薬の散布などを行いました。



8月7～13日、8月21～27日、9月3～9日
「夏の長期援農」を実施
■ 熊本県阿蘇市、阿蘇郡産山村、南阿蘇村

農作業のサポートをすることで、農家さんの負担を軽減するとともに農業の現状を学びながら地域活性化につなげようと、毎年取り組んでいるもので、今年度は10名以上のメンバーが参加。産山村に6件、南阿蘇村に8件、阿蘇市に5件の計19件にのぼる農家の方々へ援農活動を実施しました。8月7日から13日まで産山村でホウレンソウの袋詰めや出荷作業や、バンジーやビオラの播種作業。8月21日から27日まで南阿蘇村ではトマトやアスパラガスを収穫。9月3日から9日までは、イチゴの定植作業などを手伝いました。メンバーは活動を通して、訪問先の農家さんより、気候や地形によって野菜の生育が異なることや、手作業が農業の基本であることを教わりました。メンバーの竹村愛乃さん(農学部応用動物科学科3年次生)は、「大変だった分、農家の方からの感謝の言葉が身にしみました。今後も活動を継続し、少しでも地域の方々の力になっていきたい」と語りました。



10月18日
「あそのみなみのあきまつり」に出展
■ あそ望の郷くぎの(熊本県阿蘇郡南阿蘇村)

“南阿蘇村の地域活性”を目的として開催。地域貢献と広報活動の一環で、昨年度より引き続き、2度目の参加となりました。会場には地域の特産品を販売する屋台が立ち並び、約3,000名が来場する賑わいの中、援農の取り組みや農業の抱える問題について来場者への認知度調査と活動の情報発信をしました。ほかにも、プロジェクトのPRも兼ねて、ステージイベントの大根のかつら剥きに参加。来場者との交流を深めました。



9月19・20日、22・23日、10月10・11日、10月24・25日、11月7日、29日
「秋の短期援農」を実施
■ 熊本県阿蘇郡西原村

9月19日、10月10日は、のべ12名のメンバーがアスパラガスの剪定や除草作業を実施しました。9月20日、22日・23日、10月11日は、サツマイモを収穫。4日間でのべ37名にのぼるプロジェクトメンバーが参加し、短い時間でも効率的に収穫作業が出来ました。10月24・25日、11月7日、29日は、4日間でのべ11名のメンバーが参加。熊本の特産品である『いきなり団子』の原料としても使われる鳴門金時と、糖度が高く近年人気の品種シルクスweetを収穫。傷が付かないよう、丁寧に作業を進めました。



2016年 1月4・5日、9日、2月5～9日
「冬の短期援農」を実施
■ 熊本県阿蘇郡西原村、阿蘇郡高森町

来シーズンに向けての準備として、4・5日は枯れたアスパラガスの苗を撤去する「親株出し」を行いました。メンバーは、伸びきったアスパラガスの苗を根元から切り倒し、ひとまとめにしました。9日はハウス内に巡らせるホース等を通りやすくするため『コケ取り』と『除草作業』を行いました。2月5～9日にはミニトマトやベビーリーフを育てるためのビニールハウスの建設作業を実施。支柱を1本1本手作業で繋げてハウスを組み立てました。



阿蘇は箱舟プロジェクト

阿蘇・湘南 動植物保護

希少野生動物保護の最前線

達成目標 阿蘇地域の子供達に希少動植物の現状を理解してもらう

学びのテーマ 希少動植物の保全を通して環境教育や地域理解について学ぶ

プロジェクトリーダー	工藤直生	農学研究科	農学専攻	修士課程	2年
サブリーダー	晴原拓也	観光学部	観光学科		2年
サブリーダー	葉原寺深	農学研究科	農学専攻	修士課程	1年
広報リーダー	玉川佳樹	農学研究科	農学専攻	修士課程	2年
会計	渡邊裕太	農学部	応用植物科学科		4年
					参加人数 82名

5月17日 オオルリシジミの「観察会」と「除草活動」を実施

■ 熊本県阿蘇郡高森町

新メンバーに対して、熊本県の特定希少野生動植物に指定されているオオルリシジミのオスとメスの見分け方などを教え、タマボウキ、オキナグサなど、貴重な植物等も観察しました。また大鎌、草刈り鎌、刈込鋏を用いて、希少な植物を刈り取らないように注意しながら、外来植物であるセイタカアワダチソウを中心に約1haを除草しました。



9月8日 神奈川県立秦野高等学校高校生へプロジェクトの活動を紹介

■ 湘南キャンパス、阿蘇キャンパス

神奈川県立秦野高等学校の生徒3名を対象にプロジェクトアドバイザーの岡田工教授が本センターの科目やプロジェクト活動内容について紹介。その後テレビ会議システムで阿蘇キャンパスとつなぎ、メンバーからオオルリシジミなど阿蘇の希少な動植物への自然保護のために行っている除草活動や不法採集防止パトロールについて説明しました。



9月19・20日 「南阿蘇BBフェス～家族の休日～」にブースを出展

■ 熊本県野外劇場アスペクタ(熊本県阿蘇郡南阿蘇村)

毎年約1万名が来場するイベントで、本プロジェクトでは、Kumamotoマルシェからの協力依頼を受けて参加。メンバーは、集まった児童やその保護者に向けてオオルリシジミを主人公とした紙人形劇を披露。絶滅危惧種を取り巻く環境や、オオルリシジミの食草であるクララの生育を助けるための除草活動について紹介しました。



あにまるれすきゅープロジェクト

阿蘇 動植物保護

一匹でも多くの捨て犬・猫の命を救う

達成目標 殺処分される捨て犬猫たちを少しでも減らす

学びのテーマ 現在の動物愛護の状況を理解し、現状を改善するためには何が必要かを学ぶ

プロジェクトリーダー	加藤美咲	農学部	応用動物科学科	3年	
サブリーダー	江崎美帆	農学部	応用動物科学科	3年	
広報リーダー	高木佳代子	農学部	応用動物科学科	3年	
会計	秋山千香	農学部	応用動物科学科	3年	
					参加人数 92名

5月2・3日 「くぬぎの丘マルシェ 2015 Anniversary」に出展

■ 熊本県野外劇場アスペクタ(熊本県阿蘇郡南阿蘇村)

当日は多くの親子連れが来場。「殺処分される犬や猫を減らす」ことを目的に、『迷子札』普及のためコーナーを設置し、スタンプラリーやフリーマーケットを実施しました。動物愛護団体活動のための募金箱も設置。今回の販売の売上1,365円と募金6,840円は、今後寄付される予定です。また、動物愛護やペットへの接し方に関するスタンプラリーも実施。30名の子供も参加し、「盲導犬や介助犬についても勉強が出来た」などの声がありました。



7月15日、2016年2月15日 小学校で「出前授業」を実施

■ 大津町立美咲野小学校(熊本県菊池郡大津町)、阿蘇市立阿蘇小学校(熊本県阿蘇市)

小学校の児童を対象に、出前授業を実施。7月15日には大津町立美咲野小学校を初めて訪問し、5年生105名が参加。2月15日は阿蘇市立阿蘇小学校を訪問し、1・2年生50名が参加しました。授業では、児童達へ保健所での殺処分の現状、『迷子札』の重要性、命の大切さを伝えるクイズや紙芝居を行いました。中には保健所の存在を初めて知る児童もあり、真剣な表情でメンバーの話聞いていました。また、プラ板を用いて実際に迷子札を作成しました。



福祉除雪プロジェクト

札幌 地域活性

ボランティアを通じて、一回り大きな自分になる

達成目標 除雪作業のボランティア活動を中心に、社会貢献や地域貢献に尽力する

学びのテーマ プロジェクト活動を通して安全安心な街づくりに貢献し、地域の方々とのコミュニケーションを図り社会性を学ぶ

プロジェクトリーダー	佐野加奈子	生物学部	生物学科		2年
サブリーダー	方遼見輝士	国際文化学部	国際コミュニケーション学科		4年
サブリーダー	久保田雄飛	国際文化学部	地域創造学科		4年
広報リーダー	中村みゆ	国際文化学部	国際コミュニケーション学科		4年
会計	川合沙輝	国際文化学部	国際コミュニケーション学科		3年
					参加人数 83名

5月11日 「安全・安心なまちづくり道民の集い」に参加

■ ホテルオークラ札幌(北海道札幌市中央区)

高齢者の除雪をはじめとする日頃のボランティア活動が認められ、参加要請を受けたもので、来場者へ会場の誘導ボランティアなども行いました。当日は高橋はるみ北海道知事をはじめ、防犯団体の会員ら約500名が参加。岩手大学・鈴木護准教授(人文社会科学部人間科学課程)による講演や、お笑いコンビ「テツandトモ」が特殊詐欺・飲酒運転撲滅に向けたパフォーマンスを行い、詐欺や飲酒運転の注意を呼びかけました。



7月14日 「大学生等サイバーパトロール防犯ボランティア研修会」を受講

■ 札幌キャンパス

北海道警察本部生活安全部サイバー犯罪対策課が、札幌近郊の大学生を対象に参加を呼びかけているもので、本プロジェクトから23名が参加しました。研修では、位置情報付き画像をネットに出すことが、個人や自宅の特定につながる危険性があることなど、インターネットでの情報発信によるトラブルの原因を紹介。また、防犯ボランティアをより活発化させることで、安心安全なインターネット環境の構築に繋がるという説明がありました。



9月26日 「花壇の除草・植栽作業ボランティア」に参加

■ 札幌キャンパス周辺

近隣の南沢旭台町内会が主体となり、毎年定期的に行っている活動の協力依頼を受けたもので、本プロジェクトは地域と密接したボランティア団体として、地域の方々との交流をさらに深めることを目的に、今年度6月に初参加し、今回で2回目となりました。当日は、町内会会員約100名が集まり、さわやかな秋空の下、約200mにわたるキャンパス周辺の同町内会の花壇の整備や、除草を手作業で行いました。



12月8日 「出陣式」を開催

■ 札幌キャンパスマルチメディアホール

8年目を迎えた今年度はメンバー41名が参加。支援を希望した38世帯を対象として授業の合間や放課後に各世帯を訪問し、除雪活動を行います。アドバイザー大形利之教授(国際文化学部国際コミュニケーション学科)のメールに続いて、網野真一教授(生物学部長)も激励。リーダーの佐野加奈子さん(生物学部生物学科2年次生)は「これまで不明確であった訪問先の条件を、ご高齢や重度の身体障害があるなどの理由から自力で除雪を行うことが困難な方と明記したことにより、支援が本当に必要な方に対して活動に臨むので気が引き締まります」と決意を表明しました。なお同日、対象世帯からの除雪要請を受け今年度初出動。玄関前や駐車場などに降り積もった雪をスコップなどで除きました。



12月8日 「除雪活動」に出動

■ 札幌キャンパス周辺

メンバー達は、昨秋から大学周辺地域のお宅を訪問して世帯主と面談、除雪が必要な場所についてカルテを作成。少数でも効率的な除雪が行えるよう、除雪方法の効率化、全員の授業日を調査したシフト表や除雪マニュアルの作成など様々な対策を行いました。昨年12月から始まった冬の除雪では、23回出動。除雪は1軒あたり30分から1時間かかる重労働で、雪の重みでスコップの柄が折れ曲がってしまうこともあるほどです。それでも、地域住民の方々から寄せられる「予想以上の大雪でもあつという間に除雪してくれる学生さんのおかげで安心して暮らせます」などの声を励みに、活動に取り組みました。



チャレンジセンター所長賞

プロジェクト活動を通じて社会に貢献出来る「自ら考える力・集い力・挑み力・成し遂げ力」を身に付けた学生に対し、「チャレンジセンター所長賞」を授与しています。2015年度は4キャンパス15名が選ばれました。

【受賞要件】

- ①チャレンジプロジェクトに加入して2年以上活動した者
(継続していなくてもかまわない)
- ②プロジェクトリーダーを務めた経験がある者
- ③修了認定を2回以上受けている者
- ④卒業後の進路が定まっている者

チャレンジプロジェクト学科別参加人数

学部	学科	人数
国際文化学部	地域創造学科	24
	国際コミュニケーション学科	19
	デザイン文化学科	3
生物学部	生物学科	27
	海洋生物科学科	10
情報通信学部	情報メディア学科	12
	組込みソフトウェア工学科	11
	経営システム工学科	10
	情報ネットワーク工学科	13
文学部	文明学科	6
	アジア文明学科	4
	ヨーロッパ文明学科	1
	アメリカ文明学科	11
	北欧学科	5
	歴史学科日本史専攻	6
	歴史学科東洋史専攻	1
	歴史学科西洋史専攻	1
	歴史学科考古学専攻	1
	日本文学科	6
	文芸創作学科	1
	英語文化コミュニケーション学科	14
	広報メディア学科	14
	心理・社会学科	9
観光学部	観光学科	27
政治経済学部	政治学科	10
	経済学科	10
	経営学科	15
法学部	法律学科	19
教養学部	人間環境学科自然環境課程	39
	人間環境学科社会環境課程	16
	芸術学科音楽学課程	98
	芸術学科美術学課程	4
	芸術学科デザイン学課程	1
体育学部	国際学科	56
	体育学科	23
	競技スポーツ学科	1
	武道学科	0
	生涯スポーツ学科	20
	スポーツ・レジャーマネジメント学科	51
理学部	数学科	3
	情報数理学科	2
	物理学科	15
情報理工学部	化学科	30
	情報科学科	2
	コンピュータ応用工学科	16

校舎名	プロジェクト名	氏名	リーダー経験年度
湘南	ライトパワープロジェクト	本田鼓太郎	2014年度
	スポーツ社会貢献プロジェクト	柏原裕	2014年度
	サイエンスコミュニケーター	高瀬早桐	2013年度
	東海大学学生ロケットプロジェクト	浦橋悠太郎	2015年度
	Tokai Formula Club	奈良祥太郎	2014年度
	病院ボランティアプロジェクト	吉永将太郎	2013年度
	キャンパスストリートプロジェクト	関根太陽	2014年度
	Tokai International Communication Club	福岡夏海	2013年度
	環境キャラバン隊	石塚杏奈	2014年度
	高輪	Takanawa共育プロジェクト	鈴木琢也
熊本	先端技術コミュニティACOT	森本智	2014年度
	熊本地域プロデュースプロジェクト	白澤諒	2013・2014年度
阿蘇	阿蘇援農コミュニティプロジェクト	井上雅妃	2014年度
	あにまるれすきゅープロジェクト	嶋村海人	2014年度
	阿蘇は箱舟プロジェクト	工藤寛生	2015年度

学部	学科	人数	
工学部	生命化学科	12	
	応用化学科	27	
	光・画像工学科	11	
	原子力工学科	3	
	電気電子工学科	20	
	材料科学科	10	
	建築学科	39	
	土木工学科	12	
	精密工学科	17	
	機械工学科	46	
	動力機械工学科	112	
	航空宇宙学科航空宇宙学専攻	78	
	航空宇宙学科航空操縦学専攻	7	
	医用生体工学科	8	
	医学部	医学科	1
	健康科学部	看護学科	1
		社会福祉学科	0
総合経営学部	マネジメント学科	3	
経営学部	経営学科	6	
	観光ビジネス学科	20	
産業工学部	環境保全学科	1	
	電子知能システム工学科	5	
	機械システム工学科	12	
	建築学科	2	
基盤工学部	電気電子情報工学科	40	
	医療福祉工学科	9	
農学部	応用植物科学科	84	
	応用動物科学科	123	
	バイオサイエンス学科	32	
学部生 計		1,408	
別科	日本語研修課程	1	
別科 計		1	
大学院	総合理工学研究科総合理工学専攻	1	
	情報通信学研究科情報通信学専攻	1	
	人間環境学研究科人間環境学専攻	2	
	理学研究科化学専攻	1	
	理学研究科物理学専攻	2	
	工学研究科建築学専攻	5	
	工学研究科機械工学専攻	4	
	工学研究科航空宇宙学専攻	4	
	医学研究科医科学専攻	1	
	産業工学研究科情報工学専攻	1	
	産業工学研究科生産工学専攻	2	
	農学研究科農学専攻	3	
	大学院生 計		27
	合計		1,436

※チャレンジプロジェクト学生が在籍している学部および専攻のみを抜粋しております。(学部は生物理工学部、海洋学部は除く)

チャレンジプロジェクト協力団体・協力者一覧

(敬称略)

ライトパワープロジェクト

パナソニック株式会社
東レ株式会社
東レ・カーボンマジック株式会社
株式会社ソフトウェアクレイドル
日野自動車株式会社
株式会社ブリヂストン
株式会社ミツバ
石塚工業株式会社
植木プラスチック株式会社
株式会社ジェイテクト
株式会社三協
株式会社日本デジコム
サンスター技研株式会社
日本ケミコン株式会社
株式会社スマートビジョン
株式会社ソーアアップ
有限会社フジアロイ
株式会社プロジェクト・ミュー
KYB株式会社
KYBモーターサイクルサスペンション株式会社
アールエスコンポーネンツ株式会社
株式会社パトライト
ベクター・ジャパン株式会社
有限会社三島木電子
ソーラーカーチーム柏会
タカタ株式会社
九重電気株式会社
国立研究開発法人産業技術総合研究所
チームTEEDDA
トヨタ自動車株式会社
鹿島科学金属株式会社

スポーツ社会貢献プロジェクト

秦野市役所こども健康部こども育成課
平塚市西部福祉会館
平塚市大野子どもの家
平塚市みなと子どもの家
平塚市立金目小学校
Good Sport association
東海大学湘南キャンパス体育会卓球部

サイエンスコミュニケーター

NPO法人ガリレオ工房
伊勢原市立子ども科学館

東海大学学生ロケットプロジェクト

大樹町企画課
国土交通省東京航空局帯広空港出張所
国土交通省東京航空局釧路空港事務所
国土交通省札幌航空交通管制部
国土交通省航空交通管理センター
広尾警察署
航空大学校帯広分校運用課
インターステラテクノロジズ株式会社
一般社団法人あきた宇宙コンソーシアム
上町すみれ会
夢工房咲く・咲く
特定非営利活動法人人口ロケット研究会
株式会社ホーベック
有限会社スリーホープ
GEOSPORTS

Tokai Formula Club

ススキ株式会社
株式会社井上ボーリング
ソリッドワークス・ジャパン株式会社
トータル・ルブリカンツ・ジャパン株式会社
有限会社及川製作所
株式会社日本ヴェーテック
エヌ・イー有限会社
日本グッドイヤー株式会社
有限会社鈴村製作所
株式会社コイワイ
株式会社IDAJ
NTN株式会社
AVO/MoTeC Japan
アンシス・ジャパン株式会社
日信工業株式会社
株式会社エフ・シー・シー
株式会社レント

株式会社ミスミグループ本社
東海パネ工業株式会社
株式会社東科精機
有限会社プライムズ株式会社
株式会社コタキ
京王観光株式会社
ウエストレーシングカーズ株式会社
株式会社ミクニ
株式会社TAN-EI-SYA WHEEL SUPPLY
株式会社サイアン
有限会社丸山ラジエータ工作所
株式会社コーヨー
有限会社福岡ゴム工業所
株式会社デンソー
株式会社ダサイ
FCデザイン株式会社
三和メッキ工業株式会社
丸紅情報システムズ株式会社
株式会社CD-adapco
新日本フェザーコア株式会社
株式会社深井製作所
株式会社平塚イトウネジ
高砂産業株式会社
武藤工業株式会社
有限会社ボルケーノ
有限会社サンフレッチェ
石原金属化工株式会社
東芝機械株式会社
株式会社N.A.C.T
大井松田カートランド
日産自動車株式会社
本田技研工業株式会社
ヘンケルジャパン株式会社
braille BATTERY JAPAN
HPCシステムズ株式会社
有限会社鈴木精機
株式会社SOHC.ENG
東海大学機友会

3.11生活復興支援プロジェクト

大船渡市立越喜来小学校
石巻市立相川保育所
平塚市災害対策課
平塚市中央公民館
平塚大門会
NPO法人アーバンデザイン研究体
芝浦工業大学作山研究室
泊区復興まちづくり委員会
株式会社総合資格
伊勢原境内ジグスカン 拝島鳥元
東海大学情報理工学部コンピューター応用工学科 浅川研究室

病院ボランティアプロジェクト

順天堂大学医療看護学部小児ボランティアサークル
神奈川県立小田原総合ビジネス高等学校邦楽部
神奈川県立秦野総合高等学校合唱部
GOSPEL CHOIR 1 Cube
国際ソロプチミスト厚木
ちどりこどもクリニック
学校法人厚木バプテスト学園厚木幼稚園
東海大学 伊勢原キャンパス アンサンブルサークル
東海大学医学部付属大磯病院 吉井文均
教養学部芸術学科デザイン学課程 吉田佐亜弥
プロジェクトOB 山田裕樹

キャンパスストリートプロジェクト

秦野市建設部道路管理課
秦野市大根地区自治会連合会
東海大学駅前商店会協同組合
株式会社ヨネザワGK
秦野市観光協会
社会福祉法人かながわ共同会 秦野精華園
東海大学湘南キャンパス望星会 舞台屋

Tokai International Communication Club

神奈川県立地球市民かながわプラザ
秦野市教育委員会

環境キャラバン隊

全国大学生環境活動コンテスト実行委員会(ecocon)
株式会社ベネッセコーポレーション

Beijo Me Liga

Escola Aquarela
日伯学園
玉川大学
Escola Opaco
日本ビオダンサファシリテーター協会所属 内田佳子
生活クラブ生協・神奈川
東海大学湘南キャンパス写真部

DAN DAN DANCE & SPORTS プロジェクト

株式会社Theatre Kanpany 山口明子
第二映像企画 宮本祐一
株式会社ヨネザワGK
東海大学湘南キャンパス望星会 舞台屋
東海大学湘南キャンパス写真部

Takanawa共育プロジェクト

メリーロード高輪
高輪台商店会
高輪泉岳寺前商店会
港区国際交流協会
高輪 松ヶ丘会
高輪 伊血子睦会
高輪一丁目アパート自治会
高輪一丁目君友会
高輪二本榎町会
高輪台町会
秀和高輪自治会
高輪タウンハウス自治会
高輪二丁目長和会
高輪親睦会
高輪 西町自治会
高輪 白金張町会
高輪南町会
高輪共和会
マンジョン高輪
ドルフ高輪
高輪地区高齢者相談センター
高輪警察署
高輪消防署二本榎出張所
高輪 神興同好会 縄の会
東京新聞
第一水産株式会社大物部
高輪子供中高生プラザ
東海大学付属高輪台高等学校
港区立高輪台小学校
東海大学医学部付属東京病院
港区高輪総合支所協働推進課
東海大学同窓会たかなわ会
東海大学高輪キャンパステニス部
東海大学高輪キャンパスフットグラフィック部

先端技術コミュニティACOT

熊本県自閉症協会
NPO法人HITOプロジェクト
熊本市立西原小学校
世界一歩行きたい科学広場 宗像実行委員会
熊本県高等学校教育研究会理化部会

メカトロマイスター

ソリッドワークス・ジャパン株式会社

熊本地域プロデュースプロジェクト

水越地域活性化協議会
田舎の体験交流館 さんがうら
キャンドルハウス 上村敏子
熊本市立西原小学校校区自治会長

阿蘇援農コミュニティプロジェクト

産山村井村天集落営農組合

阿蘇は箱舟プロジェクト

水源の森林ボランティアネットワーク
阿蘇郡高森町高森警察署

福祉除雪プロジェクト

北海道警察本部
北海道環境生活部くらし安全局道民生活課
南沢地区町内会連合会
藻岩地区町内会連合会
南沢旭台町内会

ユニークプロジェクト活動報告

★は今年度新規プロジェクト
☆は名称を変更したプロジェクト

【湘南キャンパス】

きらきら実験教室

子ども達にものづくりの楽しさと理科に対する興味をもってもらうための企画を実施する。

TOKAI DESIGN PROJECT

デザインを通じて東海大学をアピールすると共に、社会貢献・地域貢献が出来る作品づくりに取り組む。

HRE-Airplaneプロジェクト

水素ロータリーエンジンを搭載したラジコン飛行機を製作し、RC航空ページェント出場を目指す。

☆SAP

ラジコン飛行機の設計・製作・制御・飛行を通して、飛行力学や電子制御術などを習得する。

Fabsatプロジェクト

さまざまな人が人工衛星開発に関われるような世界を目指して、ワークショップなどの取り組みを行う。

International Cultural Properties Project

学内の古代エジプト・中近東コレクション文化財調査などを行い、地域活性化や社会貢献活動を行う。

★Space Elevator Tokai

安全性を最優先とする、新たな宇宙エレベーターの開発・製作を目指す。

★Tokai Dream Space Team

高校生・大学生・企業の連携で、信頼性の高いものづくり技術を習得するイベントを企画・実施する。

★ポリヘドロン工作隊

子ども達に主体的に図形作り体験に取り組んでもらうことで、科学への理解を深めてもらう。

★ミュージアム・コミュニケーター

ミュージアムワークショップを通して、実際に「触れて見る」楽しさを多くの人に伝える。

★日食観測プロジェクト

天体の正しい観測方法と知識を学び、多くの大人に安全な観測方法を伝えていく。

★訪日外国人おもてなし隊.Tokai

学生や留学生が鎌倉を訪れる外国人観光客のボランティアガイドを行い、異文化理解を深めていく。

【代々木キャンパス】

よよさんぽ

学生の目線から地域を見つめ、代々木周辺の魅力を発見し、情報を発信していく。

【高輪キャンパス】

ロボP

ソフトウェア開発を通じて、組み込みの世界を知らない人達にものづくりの楽しさを伝える。

情報通信研究プロジェクト

学科を越えた知識・技術の習得を行い、地域貢献をテーマとしたアプリ開発を地域の方に提案していく。

★地域安心ネットワークプロジェクト

行政機関と協働して、無線LANを用いた地域安心ネットワークの仕組みを考える。

【清水キャンパス】

ワンダフル・マリンアニマルズ

生物の外見的特徴などをとらえた生物型ロボットを製作し、講演や出展を積極的に行うことで、海洋生物の魅力を発信していく。

三保活性化プロジェクト

三保半島を中心として地域の人達との交流を通して地域活性化に貢献する。

海の森プロジェクト

乾燥昆布など、さまざまな製品を生産・活用し、地域の方により魅力的な情報を発信する。

夢工房

子ども達の理科に対する感性を豊かにするため、地域の施設と協力してさまざまなイベントを開催する。

Tour～三保と世界をつなぐ旅～

豪華客船の清水港入港におけるボランティアとして、外国人観光客に観光プランを提供し、国際交流を通じた地域貢献に取り組む。

サンゴを守るプロジェクト

駿河湾に生息するサンゴの現状を調査し、サンゴ生息情報として公開する。

【清水・湘南キャンパス】

Tokai Kesenuma Shark Project

気仙沼のサメを商品として有効活用し、地域の人々の生活再建支援を行う。

【熊本キャンパス】

“sync”スポーツ

熊本県全域の小・中・高校生を対象にスポーツイベントを企画・運営し、スポーツの魅力を、国際交流を通じた地域貢献に取り組む。

★知産地商

若者文化と地域振興を結びつけ、地元産の素材を用いた菓子を地元企業と開発し、製品化する。

【阿蘇キャンパス】

日本農機具遺産プロジェクト

阿蘇地域の農業について、古くから伝わる伝統的な農機具を保存・復元し、発信していく。

【札幌キャンパス】

地域連携プロジェクト

地域からの聞き取りなどを通じて得られた課題を解決するための協働プロジェクトを企画・立案する。

8月22・23日

ポリヘドロン工作隊が「青少年のための科学の祭典大阪大会・サイエンスフェスタ2015」で優秀賞を受賞

湘南

■ハービスHALL(大阪府大阪市)

当日は約80の団体が出展。本プロジェクトは“黄金比”をテーマに、菱形20面体を作る工作ブースを出し、2日間で約70組の親子が来場しました。未就学児や小学校低学年の参加が多く、プロジェクトメンバーは4・5歳の子どもにも作れるか不安になりましたが、作業を一つひとつ丁寧に説明。兄弟や親子で力を合わせ、参加者全員がきれいな立体を制作することが出来ました。この成果が評価され、“未来を担う子ども達が科学・技術に興味を持つ上で大きな貢献を果たした団体”として優秀賞が贈られました。



10月11日、11月1日

ミュージアム・コミュニケーターが「子ども向けワークショップ 鉛筆で描く 正確に描く」を企画運営

湘南

■神奈川県立歴史博物館(神奈川県横浜市)

神奈川県立歴史博物館(神奈川県横浜市)で開催された特別展「没後100年五姓田義松-最後の天才-」の関連イベントの企画運営に参加。五姓田義松は、日本における西洋画のパイオニアとなった明治時代の画家です。メンバー達は、9月に事前学習として神奈川県立歴史博物館主任学芸員の角田拓朗氏からレクチャーを受けながら作品や館内を見学するなど、準備を進めてきました。当日は、同博物館の講堂に子どもから大人まで、両日ともに約100名が参加。本学の河野孝博教授(教養学部芸術学科)が講師として参加者に描き方をアドバイスしました。



9月22日

よよさんぽが「代々木八幡宮例大祭」に参加

代々木

■代々木キャンパス周辺

“代々木校舎周辺地域の行事やイベントに参加・運営を行い、地域を盛り上げ、つながりをつくる”ことを目的に活動をしています。今回の「代々木八幡宮例大祭」では、去年に引き続き、女子学生が女神輿を担ぎ、キャンパス前の東海大学通りなどを「えいさ!」「ほいさ!」と気合の入った掛け声に合わせて、約3時間をかけて練り歩きました。リーダーの照井美帆さん(観光学部観光学科4年次生)は、「地域の方々の手拍子や掛け声がとても嬉しく、共に楽しむことが出来て、より交流が深まりました。これからもこのような催しに参加し、今後の活動に活かしていきたい」と語りました。



11月21・22日

ワンダフル・マリンアニマルズが「青少年のための科学の祭典2015 山梨大会」に出展

清水

■山梨県立博物館(山梨県甲府市)

本イベントは子ども達に実験や観察、工作等の科学的体験を提供することによって知的好奇心を刺激し、科学の面白さや不思議さを実感してもらうために開催され、本プロジェクトは“海洋生物の魅力を伝える”ことを目的に活動しました。会場には2日間で約3,000名が来場しプロジェクトのブースには約1,900名が訪れました。プロジェクトが用意した特設プールでは、浜辺に打ち上げられた廃棄物などを使った本物そっくりの海洋生物ロボットを披露。深海サメやウミガメのロボットが泳ぐと、会場には歓声が上がリ、子ども達は遊泳するロボットに触れていました。



9月26・27日

SAPが「第11回全日本学生室内飛行ロボットコンテスト」で入賞

湘南

■大田区総合体育館(東京都大田区)

“学生の実践的な教育を支援する”ことを目的に日本航空宇宙学会が毎年開催しているもので、大田区総合体育館(東京都大田区)にて開催されました。一般的な模型飛行機の性能を競う「一般飛行機部門」と2つ以上のプロペラを備えた回転翼機で争う「マルチコプター部門」、自動操縦装置を備えた模型飛行機が参加する「自動操縦部門」、機体のユニークさを比べる「ユニークデザイン部門」が行われ、各部門に1チームずつエントリー。マルチコプター部門では、上岡泰明さん(工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻2年次生)が中心となってフレームを自ら設計した機体「Spider」を製作し、見事2位に入賞。一般部門でも3位に入りました。



11月28・29日

知産地商が「第108回日本観光学会大宰府全国大会」で天草の観光振興について発表

熊本

■プラム・カルコア大宰府(福岡県太宰府市)

本学会は、観光事業に関する学術の進歩・普及を目的に設立された日本有数の観光学会です。当日は、メンバーの梅田晋太郎さん(総合経営学部マネジメント学科4年次生)と山室公紀さん(経営学部観光ビジネス学科3年次生)が「フードツーリズム×「オタク」vs「サブカル」=地域経済活性化!?～熊本県天草をフィールドとした観光振興の事業提案～」をテーマに発表。かつて養蚕業が盛んだった天草市と静岡県松崎町の地域活性化につなげようと、繭と桑をイメージしたロールケーキ開発に取り組んだ成果を伝えました。



ライトパワープロジェクト



プロジェクトリーダー
■ 長谷川隼人
湘南キャンパス
情報理工学部
コンピュータ応用工学科 3年

詳しい活動報告は P9

本プロジェクトは様々な大会に出場し最高記録を樹立することで、省エネルギー技術の素晴らしさを社会に伝えています。ソーラーカー・電気自動車チームは、大会に出場する傍ら、地域の小学生をキャンパスに招き、クリーンエネルギーの凄さを実感してもらい環境問題に目を向けよう、「エコカー教室」を毎年実施しています。一般的な家電製品よりも少ないエネルギーで走るソーラーカー「Tokai Challenger」を見学してもらい、身近にあるものがどれだけ電力消費しているかを伝える良いきっかけになっていると考えています。参加した児童からは「日常生活で電気をムダ遣いしないようにしているよ!」といった手紙をもらうこともあり、私達が伝えたことが学びにつながっているのだと感じています。

また、人力飛行機チームでは、何かを作り出す際に、「どうして上手くいかないのか」「どう工夫すれば良くなるか」といった、ものづくりの根底にある学ぶ意欲や興味関心を刺激したいという思いがあり、地域の小中学生を対象にグライダー飛行機を手作りしてもらった「ものづくり教室」を実施しています。工作の過程で、モノは一人で生み出せるものではなく、様々な役割の人達によって完成するといった、製作工程の仕組みも併せて伝えています。参加した子ども達はここで学んだことを持ち帰り、自由研究の題材としても活かしているようです。

企画に参加する子ども達の中には、イベントを毎回楽しみに来てくれる子どもが多数おり、保護者の方からも「本プロジェクトの企画であれば子ども達を安心して参加させることが出来る」といった声をいただいています。活動を継続して行った結果、社会の信頼が徐々に得られているという実感があります。

今後も、高い目標を掲げながらプロジェクト活動を続け、ものづくりの魅力を発信していくことで、子ども達に夢や希望を与え続けていきたいです。



エコカー教室



ものづくり教室

Takanawa共育プロジェクト



プロジェクトリーダー
■ 田口幸来
高輪キャンパス
情報通信学部
通信ネットワーク工学科 3年

詳しい活動報告は P21

本プロジェクトが始動して7年間、私達は様々な活動を行ってきました。当初は、校内だけで行なう企画が多かったために地域と大学には距離がありました。また、高輪キャンパス周辺地域は、高輪神社や泉岳寺といった由緒ある寺社が数多く点在し、年間を通じてお祭りが多い活気ある街です。その一方で、お祭りなど地域のイベントを行うには、若い人が少なく、高齢者が多くで伝統ある行事を行わなければならないといった問題を抱えていました。そのような中で地域活性をするために、本プロジェクトは地域の方が企画しているイベントに参加し、まずは自分達に出来るようなことを見つけては率先して地域の手伝いをするところから始めました。

今年度は、5月に開催された「のれんノ市」において出店の手伝い・清掃活動、近隣の3つの商店会が主催する「夏祭り」では、出店の管理や設営を行いました。次に、学生自らの企画として「七夕イベント」や「クリスマスイルミネーション」を開催し、地域や大学を盛り上げて地域を巻き込む形で活動しました。地域の方々と交流を深めていくにつれ、次第に私達を商店会や自治会の会議に呼んでいただいたり、メリーロード高輪商店会のホームページ作成を一任していただいたり、「街の仲間」として受け入れてくれるようになりました。

そして、初の試みとして学生で企画した「高輪神輿」や「高輪まつり」を作り上げていく際に地域の方に協力を求めたところ、お神輿には150名もの地域の方々が発的に集まり、お祭りでは「君達東海大生の頼みなら」と様々な商店会の方々から協力していただき、本プロジェクトが何年もかかって積み上げてきた地域との繋がりを目にする事が出来た機会となりました。



地域の夏祭りにおいて設営をサポート



かけ声に合わせて神輿を担ぐメンバー

3.11生活復興支援プロジェクト



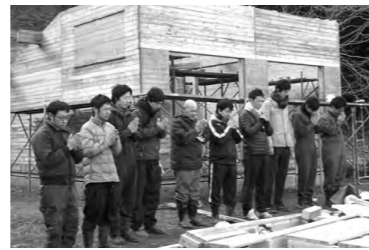
プロジェクトリーダー
■ 高橋直也
湘南キャンパス
政治経済学部
政治学科 2年

詳しい活動報告は P14

震災が発生した2011年から現在まで被災地へ通い続けています。未だに津波の被害によって地区の設備やコミュニティが失われており、今後も多くの人が被災地に関わっていく復興支援が必要とされています。また、震災から月日が流れることにより、人々の東日本大震災の記憶が薄れていることや震災に対する防災意識の低下がみられています。そこで、本プロジェクトは被災地の地域発展をサポートすることや活動で得た震災の知識を伝えるために、被災地や大学周辺にて企画を行ってきました。

2011年の震災直後、岩手県大船渡市泊区に建設した応急公民館「どんぐりハウス」は、地域住民に支援物資を届けるための生命線として役割を担ってきました。解体が決まった際に「これまでの心のよりどころをただ解体してしまうのは忍びない」との声を聞き、集会所「結っ小屋」と名称を改め、本年度移設をすることが出来ました。

津波の影響により、2つに分断されてしまった地域の中間地点に建つ結っ小屋は、地域のコミュニティが再び集うことが出来るきっかけとなったり、泊区を訪れた他県や海外の方との交流を深める場になったりしました。住民の方からは、「震災後は、泊区全体で集まる機会が少なくなっていました。結っ小屋が出来たことで、多くの住民が集まり、皆との交流の機会が少しずつ増えて嬉しい」といった声をいただきました。また、本プロジェクトの活動が評価され、FM湘南ナバサ、東海新報など多くのメディア取材を受けました。取材を通じて、活動の周知や最近報道されなくなってしまった被災地の現状を社会に広めることが出来たと思います。今後も、日々復興により変化していく被災地の現状を発信していき、多くの人が被災地の明日を考え行動していただけるように活動していきたいと思っています。



3月11日に、越喜来湾に向かい黙祷(建設中の結っ小屋前にて)



結っ小屋で開催した「泊・食まつり」

先端技術コミュニティ ACOT



プロジェクトリーダー
■ 花岡舜
熊本キャンパス
基礎工学部
電気電子情報工学科 3年

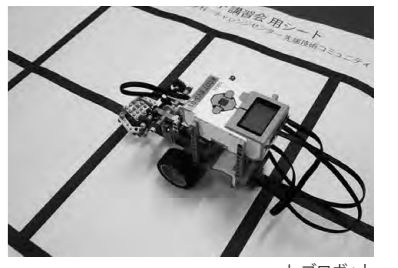
詳しい活動報告は P22

近年、子ども達の理科離れが進み、高等学校では「物理」の選択者が少なくなり、さらに工業系大学入学者も減少傾向にあります。国際的な学力テストでも物理や数学の学力が低下するなどの状況にあります。このような理科教育が抱える課題改善に少しでも貢献出来るよう本プロジェクトでは、子ども達が「ものづくり」「科学」への興味を持って貰うことを目的に色々な活動を行っています。そうした活動の一つに、NPO法人HITOプロジェクトと共に毎年開催している小学生を対象とした「ロボットサマーカークラブ」は人気が高く、子ども達にレゴロボットに接する機会が増えるよう5回以上行っています。参加した子ども達からは「レゴロボットを動かして楽しかった。また動かしたい」といった喜びの声を頂いており、私達が「ものづくり」の場を提供出来たことを嬉しく感じています。この「ロボットサマーカークラブ」の実績を評価され、WRO2016(レゴロボット国際大会)地区大会会場に本学熊本キャンパスが選ばれ、本プロジェクトが中心となり大会運営をサポートします。

本プロジェクトとして、理科離れの改善に役立ちたいと自分達が貢献出来ることをコツコツと行ってきた結果がこのよう大きな大会運営を任せられることに結びついたことに誇りを感じるとともに、活動し続けることが大事だと改めて実感しています。これからも「ものづくり」「科学」をキーワードに多くの子ども達が科学技術を身近に体験出来る場を提供していきます。そして、私達が関わった多くの子ども達が、将来の日本を担える「科学者」「技術者」へ育つことを信じて、子ども達の将来と社会の未来に繋がる案内人として本プロジェクトの活動を広く発信していきたいと思っています。



ロボットサマーカークラブ



レゴロボット

キャンパスストリートプロジェクト



プロジェクトリーダー
■ 江崎高弘
湘南キャンパス
文学部
アメリカ文学科 3年

詳しい活動報告は P16

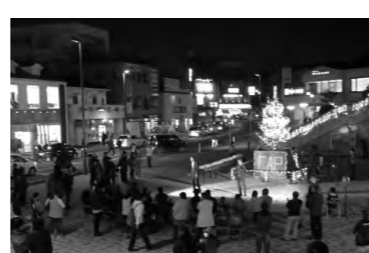
本プロジェクトは湘南キャンパス周辺の地域において「多様な人々が住みやすい社会」を目指し、日々活動しています。きっかけは、小田急線東海大学前駅から本学までの約1kmにわたる通学路でした。毎日大勢の学生が利用するにも関わらず、学生と地域のつながりが弱いを感じていました。そこで今年度は「つながりを確かなものにする」ことをテーマに、学生と地域の方々互いに興味関心をもてるような企画を実施しました。

キャンパスに近隣の飲食店やパフォーマーが集まり交流する「TOKAI音食WEEK」や、駅前広場へクリスマスツリーの設置やクリスマスにちなんだイベントを実施する「クリスマスU-night」では、昨年度以上に学外の団体へ参加の声掛けに力を入れたところ、東海大学駅前商店会のほか大根自治会連合、秦野市観光協会の協力もあり、昨年度以上の規模でイベントを実施することが出来ました。また、賑わう場所には自然と人が集まり、いつもは素通りしていた駅前広場やキャンパスに大勢の学生や地域の方が次々と足を止め、イベントを楽しんでいました。

ほかにも、「TOKAI音食WEEK」がきっかけとなり、同イベントに出演したボーカルユニットのカノンCanonや秦野観光和太鼓が、同じくイベントに出店した社会福祉法人かながわ共同会秦野精華園のお祭りにてパフォーマンスを披露するなど、私達のイベントに協力いただいた団体同士でのつながりも出来ました。これは、本プロジェクトの活動規模が大きくなってきたことで、本プロジェクトが「人と人をつなぐパイプ役」になったのだと思います。今後も地域の方々を取り合い、この街を盛り上げていきたいと思っています。



音食WEEK



クリスマスU-night(駅前広場ツリー点灯式)

阿蘇援農コミュニティプロジェクト



プロジェクトリーダー
■ 笹本翠
阿蘇キャンパス
農学部
応用動物科学科 3年

詳しい活動報告は P24

今の日本の農業の大きな課題として、後継者不足や高齢化による人手不足への対策が挙げられています。また、こういった生産者の現状を知らない消費者が多いことも課題といえます。そこで、本プロジェクトでは、人手不足に悩む農家の方々をサポートするとともに、農業の実情を知り、学んだことを社会に向けて発信していく活動を行っています。

今年度は、要請のあった農家への援農活動はもちろんのこと、農業に関わる方や消費者にも目を向け、阿蘇地域での多くのイベントに出展し、農業が抱える課題やプロジェクト活動について広報活動をしました。その結果、主婦の方や10~30代の若い方々にも「援農」という言葉を知っていただいたり、イベントがきっかけで、ブースに来場された方と「農業従事者を増やす」ことをテーマに意見交換会を実施したりすることも出来ました。

援農活動では、人手不足で悩んでいた70代の農家の方から「農業をやめようと思っていたが、学生さんが来てくれたことで農業の楽しさを思い出した。また頑張れる」という声をいただきました。訪問時のアンケートでは、農作業以外に、コミュニケーションにおいても高い評価をいただいています。このことから、私達の活動は、農家の方々に元気づけ、阿蘇における農業の活性化に繋がっていると思います。

プロジェクトは8年目となり、私達を含め約400名が援農活動を経験しました。プロジェクトの先輩方は全国各地で農業や食品関係の仕事に従事されています。援農の経験を通して、「悩める農家を助けたい」という本プロジェクトの思いは、社会へ羽ばたいていくメンバーによって全国各地へ広がっていくと信じています。



サツマイモ畑にて援農活動に励むメンバー



イベントブースで来場者に活動を紹介

プロジェクトコーディネーター・アドバイザー

東海大学は教員と職員による協働体制で教育支援を推進しています。その一環として、本センターでは、プロジェクト活動の質を高め、より高度な目標を成し遂げられるよう各プロジェクトには東海大学教職員から選抜されたコーディネーターとアドバイザーを配置しています。チャレンジプロジェクトにおいては、コーディネーターとアドバイザーが必ず配置されますが、ユニークプロジェクトでは学生からの支援要請に基づき本センターで審議の上、配置を決定します。

【2015年度 プロジェクトコーディネーター 担当者一覧】

担当プロジェクト名	氏名	所属	担当プロジェクト名	氏名	所属
チャレンジプロジェクト			ユニークプロジェクト		
病院ボランティアプロジェクト	島村祐太	チャレンジセンター推進室	ワンダフル・マリニアニマルズ		
スポーツ社会貢献プロジェクト	原田千穂	教務課	海の森プロジェクト	舟尾隆	清水教学課
Music Art Project	宮崎諒	キャリア就職課	夢工房		
サイエンスコミュニケーター	森川真希	技術支援課	サンゴを守ろうプロジェクト	鈴木啓司	清水教学課
環境キャラバン隊	平瀬尊士	技術支援課	三保活性化プロジェクト	日置純子	清水教学課
キャンパスストリートプロジェクト	木村直樹	チャレンジセンター推進室	Tour～三保と世界をつなぐ旅～	舟尾隆	清水教学課
Tokai Formula Club	平島滋義	チャレンジセンター推進室	Tokai Kesennuma Shark Project	村山剛子	熊本教学課
ライトパワープロジェクト	佐藤多嘉雄	チャレンジセンター推進室	*sync*スポーツ	六嘉孝裕	熊本教学課
東海大学学生ロケットプロジェクト	山下直也	チャレンジセンター推進室	知産地商	後田浩	阿蘇教学課
Beijo Me Liga	伊地知弘樹	事務課	日本農機具遺産プロジェクト		
Tokai International Communication Club	中嶋清香	教育支援課			
3.11生活復興支援プロジェクト	雨木秀文	入学課			
DAN DAN DANCE & SPORTSプロジェクト	佐藤多嘉雄	チャレンジセンター推進室			
Japan Community Development Association	山下直也	チャレンジセンター推進室			
	三橋雅之	図書課			
	高橋操	チャレンジセンター推進室			
	佐藤邦夫	高輪教学課			
	渡部真紀	高輪教学課			
	福岡恵	熊本教学課			
	佐藤行祥	熊本事務課			
	石川真之	熊本事務課			
	六嘉孝裕	熊本教学課			

【2015年度 プロジェクトアドバイザー 担当者一覧】

担当プロジェクト名	氏名	所属	担当プロジェクト名	氏名	所属
チャレンジプロジェクト			ユニークプロジェクト		
病院ボランティアプロジェクト	児玉千代子	健康科学部看護学科	TOKAI DESIGN PROJECT	池村明生	教養学部芸術学科デザイン学課程
スポーツ社会貢献プロジェクト	萩裕美子	体育学部スポーツレジャーマネジメント学科	SAP	富田誠	教養学部芸術学科デザイン学課程
Music Art Project	梶井龍太郎	教養学部芸術学科音楽学課程	Fabsatプロジェクト	水書穂治	工学部航空宇宙学航空宇宙学専攻
	二宮洋	教養学部芸術学科音楽学課程	International Cultural Properties Project	中藤恭一	工学部航空宇宙学航空宇宙学専攻
サイエンスコミュニケーター	瀧川洋二	教育研究所	Space Elevator Tokai	山花京子	文学部アジア文明学
	広川美津雄	教育研究所	ポリドロン工作隊	佐藤実	理学部基礎教育研究室
	岡田工	チャレンジセンター	ミュージアム・コミュニケーター	青木孝子	チャレンジセンター
	小栗和也	教養学部人間環境学自然環境課程	日食観測プロジェクト	篠原聡	課程資格教育センター-博物館研究室
	藤野裕弘	教養学部人間環境学自然環境課程	訪日外国人おもてなし隊.Tokai	岡田工	チャレンジセンター
	室田憲一	教養学部人間環境学自然環境課程		貴家勝宏	教養学部国際学科
	北野忠	教養学部人間環境学自然環境課程		遠藤見弘	観光学部観光学科
	藤吉正明	教養学部人間環境学自然環境課程		森田直樹	情報通信学部通信ネットワーク工学科
キャンパスストリートプロジェクト	崔一英	チャレンジセンター		宇津圭祐	情報通信学部通信ネットワーク工学科
	吉永昌史	工学部動力機械工学科		加藤和美	清水教養教育センター
	岡本高光	工学部動力機械工学科			
	陳之立	工学部動力機械工学科			
	森下達哉	工学部動力機械工学科			
	加藤英晃	工学部動力機械工学科			
	佐々木一哉	工学部動力機械工学科			
	坂本俊之	工学部動力機械工学科			
	太田高裕	工学部動力機械工学科			
	平岡克己	工学部航空宇宙学航空宇宙学専攻			
	木村英樹	工学部電気電子工学科			
	福田結大	工学部航空宇宙学航空宇宙学専攻			
	那賀川一郎	工学部航空宇宙学航空宇宙学専攻			
	森田真和	工学部航空宇宙学航空宇宙学専攻			
	中藤恭一	工学部航空宇宙学航空宇宙学専攻			
Beijo Me Liga	小貫大輔	教養学部国際学科			
Tokai International communication Club	田口香奈恵	国際教育センター			
	森山美紀子	外国語教育センター			
	杉本洋文	工学部建築学科			
	大塚滋	法学部法律学科			
	浅川毅	情報理工学部コンピュータ応用工学科			
	中村なおみ	体育学部体育学科			
	田巻以津香	体育学部生涯スポーツ学科			
	若林広	教養学部国際学科			
	杉本浄	文学部アジア文明学			

コーディネーター研修

チャレンジプロジェクトのコーディネーターおよびアドバイザーを対象にプロジェクト支援に活用出来るスキル向上を主な目的とした研修や意見交換会をTV会議システムを活用し実施しています。特に、プロジェクトコーディネーターに対しては、多様な学生の成長に対応出来るよう目的に応じた研修を行っており、2015年度は阿蘇・熊本キャンパスにおいて能力研修を初開催しました。

開催	研修名	テーマ・内容	担当	場所・人数
4月14日	コーディネーター事務研修	①チャレンジセンターが目指すもの ②チャレンジセンター推進室業務担当について 勤務管理などについて ③コーディネーター業務について ④予算の留意事項について	①木村英樹(チャレンジセンター所長) ②五十嵐義和(チャレンジセンター推進室長)	24名*
6月3日	アドバイザーミーティング	①2015年度本センターの方針およびプロジェクトアドバイザーの役割について ②学生の自己関心(self-interest)をプロジェクトに活かす～パブリック・アチーブメントのコーチングから～	①木村英樹(チャレンジセンター所長) ②堀本麻由子(チャレンジセンター准教授)	22名*
6月11・12日	コーディネーター能力研修	◆1日目 ①【講義】プロジェクト支援で活用出来る『ケーススタディ』について【グループワーク】「コーディネーターが抱える問題について」ケーススタディシート(事前課題)をもとに ②校舎見学・プロジェクト学生との交流 ◆2日目 ①【講義】学生の自己関心(self-interest)をプロジェクトに活かす～パブリック・アチーブメントのコーチングから～【ワーク】One to one インタビューの方法 ②校舎見学(農場、加工場など)、プロジェクト学生との交流 ③本学宇宙情報センター見学	①堀本麻由子(チャレンジセンター准教授) ②福岡恵(熊本教学課係長) ①堀本麻由子(チャレンジセンター准教授) ②高橋誠二(阿蘇教学課 課長補佐) ③福岡恵(熊本教学課係長)	熊本キャンパス 24名 阿蘇キャンパス 25名
10月19日	コーディネーター中間研修	プロジェクトの目的達成に役立つ『パワーマップ』について	高橋操(チャレンジセンター推進室係長)	27名*
2016年3月9日	コーディネーター・アドバイザー意見交換会	①【事例紹介】「学生にどのような学びを与え、サポートしたのか」 ②意見交換	①田口香奈恵(国際教育センター講師) 雨木秀文(入学課職員) ②堀本麻由子(チャレンジセンター准教授)	34名*

*湘南、高輪、熊本、阿蘇、札幌の5キャンパスをTV会議システムにて接続

プロジェクトコーディネーターミーティング

本センター職員がファシリテーターを務め、湘南キャンパスのプロジェクトコーディネーター(14名)を対象に、プロジェクト支援で要する基本的なスキルアップを図りながら学生対応の課題改善を共有するための意見交換を行っています。

開催	内容	担当
4月14日	新任プロジェクトコーディネーターを対象にした業務研修	高橋操(チャレンジセンター推進室係長)
5月29日	第1回 工程管理を通じたプロジェクト支援	
7月10日	第2回 プロジェクトにおける振返りとは? 振返る効果とは? 一振返りシートの活用について	
11月24日	第3回 プロジェクトに役立つファシリテーションについて	
2016年1月26日	第4回 ①大学職員としての役割について 一私大連研修報告を通じて ②2015年度の学生支援に関する振返り	①木村直樹(チャレンジセンター推進室職員) ②高橋操(チャレンジセンター推進室係長)



チャレンジセンター開講科目

本センターは、「自ら考える力」「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」を身に付けることによって建学の精神を培うという教育理念のもとで、総合大学としての多様性を活かし、学部・学科単独では出来ない、社会とのつながりの中での実践的な教育を行っています。

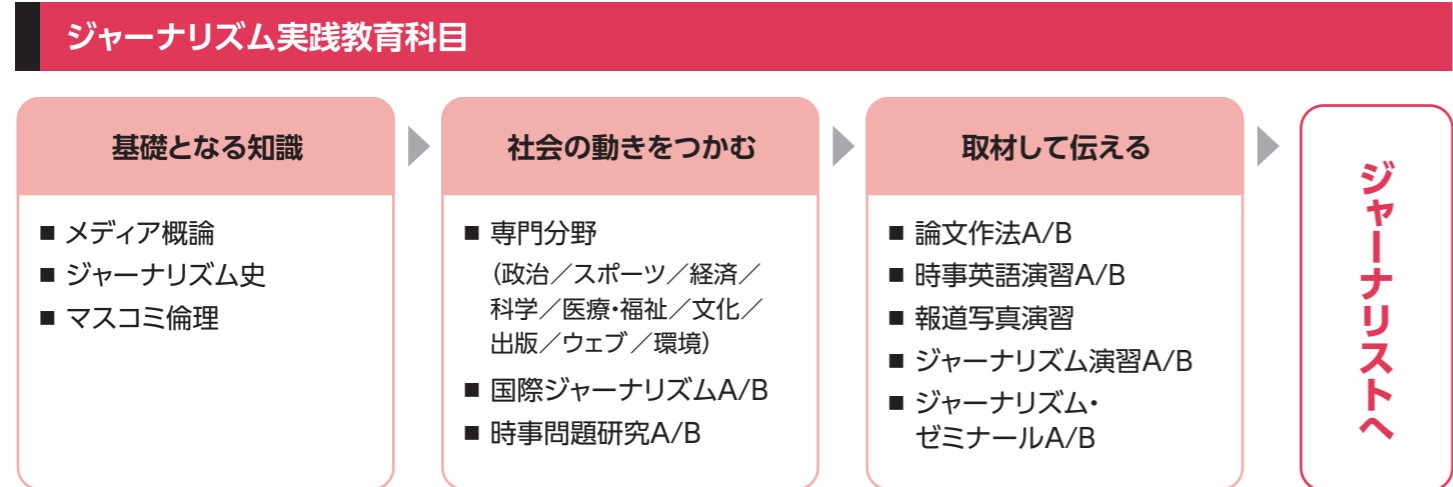
本センターが開講する科目には、2つの科目群があります。

【1.社会的実践力科目】

目標を見つけ、計画を立て、実行する方法を体験的に学ぶための科目群（「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」「プロジェクト入門」「プロジェクト実践」など）を「社会的実践力副専攻」として開講。目標を見つけ、計画を立て、実行する方法を体験的に学ぶことによって、社会に出てから通用する実践力を身につけます。

【2.ジャーナリズム実践教育科目】

より高度な実践力を身に付けるジャーナリズム実践教育のための科目群（「ジャーナリズム史」「メディア概論」「国際、政治、出版ジャーナリズム」など）を「ジャーナリズム副専攻」「ジャーナリズム実践教育特定プログラム」として開講。公共的な価値に基づいて「情報を選別し、加工し、多くの人々へ提供する作業」を担う人材を育てます。



履修者状況一覧

〈社会的実践力科目〉

校舎	授業科目名	担当教員名	開講クラス数	履修者人数
湘南	集い力(入門)	園田由紀子・田島祥	8	755
	集い力(演習A)	崔一英・田島祥	8	231
	集い力(演習B)	崔一英・岡田工	9	161
	挑み力(入門)	堀本麻由子・園田由紀子・富永貴公	8	864
	挑み力(演習A)	園田由紀子・堀本麻由子	4	106
	挑み力(演習B)	園田由紀子・田島祥・青木孝子	9	264
	成し遂げ力(入門)	堀本麻由子・末延吉正・崔一英 他	5	564
	成し遂げ力(演習A)	堀本麻由子・青木孝子	6	198
	成し遂げ力(演習B)	広川美津雄・富永貴公	4	80
	プロジェクト入門A	岡田工・堀本麻由子・園田由紀子・結城健太郎	12	330
	プロジェクト入門B	崔一英・青木孝子・園田由紀子	8	256
	プロジェクト入門C	堀本麻由子・岡田工 他	4	103
	プロジェクト実践A	崔一英	1	18
	プロジェクト実践B	崔一英	1	11
プロジェクト実践C	岡田工・木村英樹	2	84	
プロジェクト実践D	木村英樹 他	1	43	
合計			90	4,068

校舎	授業科目名	担当教員名	開講クラス数	履修者人数
湘南	挑み力(演習A)	堀本麻由子	1	29
	集い力(入門)	田島祥	1	87
	集い力(演習A)	田島祥	1	39
	挑み力(入門)	堀本麻由子	1	92
	挑み力(演習B)	田中紀代子	4	80
	成し遂げ力(入門)	堀本麻由子	1	85
	成し遂げ力(演習A)	太田民夫	1	67
	成し遂げ力(演習B)	太田民夫	1	51
	プロジェクト入門A	倉田和夫・福崎稔	3	56
	プロジェクト入門B	田中紀代子・福崎稔	5	36
	プロジェクト実践A	福崎稔	2	22
	プロジェクト実践B	田丸智也	1	20
	プロジェクト実践C	村松香織	1	17
	プロジェクト実践D	田中紀代子	2	36
清水	集い力(入門)	園田由紀子	1	40
	挑み力(演習B)	園田由紀子	1	21
	成し遂げ力(入門)	園田由紀子	1	33
	プロジェクト入門A	園田由紀子	1	19
熊本	集い力(演習A)	鹿田光一 他	1	31
	プロジェクト入門A	鹿田光一 他	1	46
合計			30	907

〈ジャーナリズム実践教育科目〉

校舎	授業科目名	担当教員名	開講クラス数	履修者人数
湘南	時事問題研究A	岩田伊津樹	1	11
	時事問題研究B	岩田伊津樹	1	3
	論文作法A	岩田伊津樹	1	5
	論文作法B	岩田伊津樹	1	3
	時事英語講習A	山口勉	1	2
	時事英語講習B	山口勉	1	1
	報道写真演習	平博之 他	1	5
	ジャーナリズム演習A	山口勉	1	2
	ジャーナリズム演習B	山口勉	1	3
	ジャーナリズム・ゼミナールA	岩田伊津樹	2	6
	ジャーナリズム・ゼミナールB	岩田伊津樹	2	6
	ジャーナリズム史	飯塚浩一	1	256
	国際ジャーナリズムA	山口勉	1	118
	国際ジャーナリズムB	山口勉	1	106
	政治ジャーナリズム	永田和男 他	1	111
	出版ジャーナリズム	松室徹 他	1	74
	ウェブ・ジャーナリズム	鈴木美潮 他	1	104
	経済ジャーナリズム	丸山康之	1	139
	マスコミ倫理	岩田伊津樹	2	216
	環境ジャーナリズム	岩田伊津樹	2	259
	メディア概論	水島久光	1	200
スポーツ・ジャーナリズム	滝鼻太郎 他	1	146	
科学ジャーナリズム	滝田恭子 他	1	104	
文化ジャーナリズム	福永聖二 他	1	129	
医療・福祉ジャーナリズム	猪熊律子 他	1	119	
合計			29	2,128

ジャーナリズム講師一覧

講師は「読売新聞社」、「中央公論新社」他より招いています。

<p>読売新聞社より招聘</p> <p>【ウェブ・ジャーナリズム】</p> <p>鈴木美潮 編集委員 松井正 専門委員 小坂剛 メディア局編集部 山根章義 メディア局編集部 出雲秀一 Twitter Japan株式会社 藤村厚夫 スマートニュース株式会社 執行役員 柴川昌央 メディア局企画開発部 川嶋路大 メディア局記者 杉本誠司 株式会社ニワンゴ代表取締役 堀津宏 広告局 広告第六部第一課 課長 津泰幸江 メディア局大手小町編集長 中村文陽 メディア局管理部(ネットワーク担当)</p> <p>【政治ジャーナリズム】</p> <p>永田和男 調査研究本部主任研究員 笹森春樹 調査研究本部主任研究員 榊原智子 調査研究本部主任研究員 福田昌史 世論調査部記者 十郎浩史 政治部次長 川上修 政治部次長 杉山祐之 論説委員</p>	<p>【写真ジャーナリズム】</p> <p>平博之 編集委員 佐藤俊和 写真部次長 今利幸 写真部次長</p> <p>【文化ジャーナリズム】</p> <p>福永聖二 編集委員 西田浩 編集委員 鶴岡哲夫 編集委員 田中聡 文化部次長</p> <p>【スポーツ・ジャーナリズム】</p> <p>滝鼻太郎 運動部長 川島健司 編集委員 結城和香子 編集委員 萱津節 運動部次長 軍地哲夫 運動部次長 山脇幸二 運動部次長 近藤雄二 運動部次長 向井太 運動部次長 若水浩 運動部主任 塩見要次郎 五輪サッカー推進事務局次長 谷祐一 五輪サッカー推進事務局次長 清水暢和 運動部記者 大塚貴司 運動部記者 三宅宏 紙面審査委員</p>	<p>【科学ジャーナリズム】</p> <p>滝田恭子 科学部部長 吉田昌史 科学部次長 高田真之 科学部次長 宮崎敦 科学部次長 佐藤俊彰 科学部次長 中島達雄 科学部次長 山田哲朗 科学部次長 佐藤淳 編集委員 柴田文隆 編集委員 増満浩志 編集委員 知野恵子 企画委員 大塚隆一 企画委員 吉田典之 論説委員 芝田裕一 調査研究本部主任研究員 佐藤良明 調査研究本部主任研究員</p> <p>【医療・福祉ジャーナリズム】</p> <p>猪熊律子 社会保障部部長 岡部匡志 社会保障部次長 本田麻由美 社会保障部次長 高倉正樹 社会保障部記者 石原毅人 社会保障部記者 野口博文 社会保障部記者 樋口郁子 社会保障部記者 大広悠子 社会保障部記者</p>	<p>吉田清久 医療部部長 館林牧子 医療部次長 坂上博 医療部次長 藤田勝 医療部記者 中島久美子 医療部記者 佐藤光展 医療部記者</p> <p>中央公論新社より招聘</p> <p>【出版ジャーナリズム】</p> <p>松室徹 文庫統括部長 中田哲史 事業戦略部長 森本広美 商品管理部長 郡司典夫 学芸局長 木佐貴治彦 学芸局編集委員 三木哲男 編集企画部長兼特別編集部長 企画制作本部副部長兼編集総務部長 佐野泉 校閲部部長 高井潔 製作部長</p>
---	--	--	---

チャレンジセンター開講科目

社会的実践力科目

集い力(演習A)

担当: 崔一英 (チャレンジセンター教授)

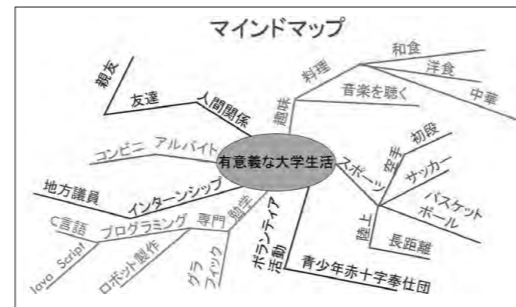
この授業では、個人またはグループによる種々の調査を行い、それに関する集計とプレゼンテーション、ディスカッションを通して集い力を養うことを目的としています。イベント開催、商品開発、販売促進等において、それらに関係する人々のニーズに応えるため、色々な場面で聞き取り調査やアンケート調査等が行われています。調査で集めた多くのデータを解析することによって、社会で起きている大小様々な問題を解決、または、改善するための対策を作り出すことが出来ます。この授業を通して、問題の発見、解決のための調査とグループワークの方法を学びます。

授業の前半は、ルーブリックを用いた集い力の自己評価、エゴグラムによる性格診断等、自己分析を行い、自己紹介資料を作成。それに基づいて、口頭による自己紹介を行います。次に、まとめた資料を使って自己紹介用スライドを作成。数値データはエクセルでグラフ化し、スライドに貼り付けます。中間報告会として、パワーポイントを用いた自己紹介を4~5名のグループ内で全員が行い、発表に対する相互評価を行います。(図1)は大学での目標をマインドマップの形式で作成したものです。スライドを全てワードに貼り付けてその内容を文章化。相互評価の結果はグラフ化して自分の発表について考察し、報告書の形式にまとめます。

後半は、グループワークの意識付けをするために、「チームで働くこと」に関するDVDをまず視聴し、その内容をまとめます。次に国際適応力のテストを行い、グラフ化し自己評価を行います。自分の国際適応力の水準を意識しながら

インターネットを用いて、異文化について調査を実施。3~4名程度でグループを構成し、グループごとに異なる国を選択し、グループ内で調査項目を決定し、役割を分担してワークを行います。得られたデータを集計し、再度報告会用のパワーポイントをグループで作成、グループを再構築して各自発表を行います。発表については相互評価を行い、発表内容を文章化し報告書を作成します。

この授業を通して、調査の方法、データの集計方法、まとめ方、報告書作成方法が身に付きます。授業に欠席せず、積極的に演習、グループディスカッションに参加し、グループ内の役割を確実に実行することで、コミュニケーション能力や協調性を高めることが出来ます。ワード、エクセル、パワーポイントの基本的な操作方法および効果的なプレゼンテーションの基礎を身に付けることが出来ます。



(図1)

挑み力(演習B)

担当: 田島祥 (チャレンジセンター講師)

この授業では、「災害にまつわる自助・共助について考える」をテーマに、身近な課題を発見し、自分なりに考えることを通じて挑み力を高めることを目的としています。いつ起こるとも知れない災害に対し、どのような準備が必要か。また、起こってしまった災害にどのように対応していく必要があるのか。こうしたテーマに対しては、「いざとなっても自分は助かるだろう」と、つい他人事のように考えてしまいがちですが、「我がこと意識」を持って具体的に考えることを目指しました。授業は、「自分で自分の身を守る」「地域について知る」「周りの人と助け合う」という3つのテーマについて、グループディスカッションやグループワークを中心に進めました。他学科・他学年の学生とグループを作ることで、学部

の授業とは異なった幅広い視野を獲得することを目指しました。1つ目のテーマにおいて、はじめに学生自身の災害経験を振り返ると共に、防災・減災に対する概念地図を作成し、既存の概念構造を可視化しました。書き出されたラベルを「自助」「共助」「公助」に分類していくと、個人差はあるものの、特に「共助」に対する認識に乏しいことが確認されました。また、専門家と素人とのリスクに対する考え方の違いや、災害時に陥りやすいバイアスについて学びました。

2つ目のテーマでは、大学周辺地域で一人暮らしをする学生で構成されたグループと、他地域から電車で通学している学生で構成されているグループとに分かれ、防災マップを作成しました。初めにグループごとに対象地域を選択し、人口や世帯数、要支援対象者や避難施設等の社会特性や自然特性、災害特性を調べました。大学周辺では高齢者の割合が多いことや、大学生の単身世帯が

多いこと、坂の多い地域であることなどが確認されました。その上で、グループごとに実際にまち歩きをし、地域の様子を直接確認した上で防災マップを作成しました。これらのワークを踏まえて、「高齢者の避難が遅れないよう、地域との連携が必要」「土地勘がなければ対応が難しいため、通学・通勤時の災害からの避難には行政との協力が不可欠」「学生の若い力が共助の一翼を担える」「普段からの地域とのつながりが大切」といった提言がなされました。

3つ目のテーマでは、災害対応のシミュレーションゲームを行ったり、ワールドカフェ形式のディスカッションを行ったりしながら「共助」について考えました。特にディスカッションにおいては、模範解答ではなくリアルな大学生の声を出し合うことで、大学生が現実的に共助に取り組む上での課題や、実現に向けて必要となる仕掛けについて検討しました。様々な意見が出される中で、「そもそも災害や共助について考える機会がないので、本授業のようなきっかけが必要」「ボランティアな働きを期待するのは難しく、ギブアンドテイクでの助け合いが大切」といった意見が多くみられました。



授業風景

成し遂げ力(演習B)

担当: 広川美津雄 (教育研究所教授)

この科目は、チャレンジセンターのプロジェクトを想定したPBL (Project Based Learning) を通して、プロジェクト管理、自己管理の能力を高めることが目標です。そのため、自らの活動を広報する企画、計画、デザイン、展示、プレゼンテーション(図1)などの対話と実践によるプロジェクトを課しています。授業の前半および後半のプロジェクトでは、グループ相互で展示やプレゼンテーションならびに相互評価を行います。授業では、教員と学生の間で、またグループメンバーの間で情報の共有やファイルの集中管理を行うために、優れた機動性とインタフェースを備えたiPadや学生のスマホならびにクラウドサービスを導入しました。その結果、学生自身による在宅学習、パソコン室での補完学習、および通学時間を利用した隙間学習など主体的な授業外学習が可能になりました。

導入したクラウドサービスDropboxとEvernoteは、グループごとにIDとパスワードを用意し、メンバー間で情報やファイルを共有出来るようにしました。これらのアプリを学生のスマホにもインストールして、クラウドと同期させ、時間外学習に利用するよう勧めました。その結果、教員がアップロードした教材、出席状況、授業ごとに学生やグループの評価を記入したポイント表などの確認が自宅や通勤途中で行われました。また、学生が作成した文書(議事録や個人の作業記録など)の閲覧や編集などが自宅や通勤途中で行われました。さらに、学生が制作した文書、画像、動画ファイルのダウンロード、編集・加工、およびアップロードがパソコン室や自宅で行われました。

今年度からLINEを授業の公式アプリに指定しました。「グループトーク」機能を使って、メンバー同士が文字による会話および画像や動画ファイルの交換が出来ます。各グ

ループに教員も参加しました。LINEによるグループトークの対話内容を(表1)に示します。LINEをPBLに導入する利点は、学生に親しみがあり、使い慣れているので対話を促進します。授業外の対話は早朝や深夜にも及びました。また、リアルタイムで対話が進み、発信者・既読者数・時間などの記録が時系列で残るので、対話や行為が循環しやすくなります。教員は、従来Evernoteでは1週間単位で把握していた学生の進捗状況をリアルタイムで把握出来るようになりました。また、授業時間外の指導が可能になっただけでなく、返信や既読数などから学生の反応を細かく把握出来るようになりました。アンケートの自由記述から、学生は個人のスマホを授業に使うことに対して好意的な反応を見せました。「使い慣れたものなので使いやすい」「わくわくする」「操作が楽しい」「携帯いじってやれると授業に対して意欲が出る」「仲が良くなる」など親近感を持っていることが分かります。また、「この授業で自分のスマホや携帯電話を使うことに抵抗がありましたか」という問いに対して、全員が「抵抗も問題もなかった」を選択しています。



(図1)プレゼンテーション

Lineによる対話内容		授業中 外部の 学生と	授業 時間外
グループメンバーどうしの対話			
企画段階	テーマの検討や決定事項		○
計画段階	コンセプトやアイデアの検討	○	○
準備段階	並行作業の進捗状況の確認	○	○
	プレゼンで使う音声や画像の転送	○	○
全工程	必要機材の用意		○
	欠席・遅刻の事前連絡		○
	重要事項や緊急事項の連絡 (欠席者への連絡を含む)	○	○
教員と学生の対話			
学生から 教員へ	必要機材の用意の依頼	○	○
	オンラインストレージについての問合せ	○	○
教員から 学生へ	授業の感想(全15回の授業終了後)	○	○
	授業中に伝えられなかった緊急連絡 (鉄道事故による遅延対策 (教員遅延時間の学習について指示))	○	○

(表1) LINEによる対話の内容

プロジェクト入門A

担当: 結城健太郎 (外国語教育センター講師)

留学生と日本人学生によって構成されるグループで様々な活動を行いながら、インバウンド旅行を企画・発表する授業です。日本人学生については、グループで協力しつつ計画・実行・振り返りを行なっていくこと、異文化コミュニケーションを実践すること、基本的な報告・発表の技術を学ぶことを目標とし、留学生については、日本人と協同作業を進めつつ、日本語で調査・発表する力を身につけることをめざしています。アイスブレイクの後、受講者・留学生を班に分け、モデルとなる外国人旅行者を設定し、休暇・ビザといった旅行の諸条件、訪問地と活動、移動と宿泊、予算、発生しうるトラブル等について段階的に検討します。それぞれの過程で、アイデア出し、ディスカッション、調査、報告、振り返りを行うほか、二回の発表とその相互評価を行います。これまで、東京・奈良・京都といった日本の代表的な観光地を巡る旅行プランから、スキー場、温泉地、サブカルチャーやアニメゆかりの場所を訪れるテーマ性の強い旅行プランまで、様々な訪日旅行の計画が提案されてきました。また、パブリック・アチーブメントの活動として、授業外でインタビューを実施しました。言語や背景はもちろんのこと、学年や所属の異なる様々な学生が、試行錯誤を繰り返しつつ、小さなグループの中で作業を分担します。自らが行動し、口を開き、耳を傾け、与えられた役割を果たしていくことを、様々な活動とおして経験していきます。言語やスキルが足りなければ助け合うことも学びます。積み重ねてきた活動の集大成として、自分達の旅行プランの魅力を皆の前で発表する時、達成感や充実感を感じてほしいと思っています。過去のアンケートの結果によれば、受講後に多くの学生が、協同作業を行なう力、

コミュニケーションを行なう力、またプレゼンテーション・スキルの向上を感じているようです。日本人学生の声としては「人の意見をちゃんと聞く。自分の意見をおしつけない(ことを学んだ)」「分担作業を上手に行なえた」「楽しかった。他の人にもすすめたい」といったものがあり、グループ活動から充実感を得ていることがわかります。また、留学生は「日本語で何かを決めたり、話しあったりして(コミュニケーション力)が高まった」「みんなよく話した、みんなの意見を取り入れることが出来た」と述べ、日本人学生とのコミュニケーションや協同作業に意義を感じています。日本人学生達が留学生を受け入れ、彼らを知り、助け、共に役割を分担し、時にリーダーシップを与えながら課題を行なうことは、将来受講者達が進むであろうグローバル社会の一つの予行演習になっています。今後は、これまでの良い点は残しつつ、グループ活動と社会の接点を探り、パブリック・アチーブメント型授業としての展開を目指していきたいと考えています。



授業風景



プレゼン例

チャレンジセンター開講科目

ジャーナリズム実践教育科目

2010年度に特定プログラムとして25科目(50単位)に拡充されたジャーナリズム・コースは、うち9科目(18単位)を読売新聞東京本社の現役記者が講師を務めています。日々ニュースを伝えている編集局の部長、デスク、編集委員ら現役のベテラン記者達が直接語りかける講義は、学生にとって日本を取り巻く内外の情勢を知る絶好の機会となっており、どのクラスも受講希望者が殺到する人気授業として定着してきました。残念ながら履修制限を実施せざるを得ないクラスもありますが、真剣な受講態度も印象的です。

このコースでは、副専攻科目を兼ねたさまざまな分野の入門編の科目でジャーナリズムと社会問題への関心が開けたら、次はコースの中核部分である専門科目を受講します。こちらは、国内だけでなく世界の外交、政治、社会問題など、事実関係だけでなくその歴史的経緯やあるべき姿などまで見方を深化させていきます。ただ、この専門科目コースは、最初に選抜があるため受講者数が少なく、2016年度からよりオープンな編成にしてゆく予定です。

ジャーナリズム・ゼミナールA/B

担当:岩田伊津樹(チャレンジセンター教授)

水曜の3、4限の連続授業で実施しているこのゼミナールは、特に学外での取材演習に力点を置いています。取材記者という仕事は、言われたことをそつなくこなせばすむというものではなく、自分で主体的に問題意識を持ってテーマを見つけ、現場に行き、人によって調べることが基本だからです。これまでも事件の舞台となった土地や建物の背景を探るために管轄の法務局へ行って不動産や法人の登記簿を上げる作業など取材の基本技術修得を実践してきました。

今年度は5月末、横浜地方裁判所に法廷の傍聴に出かけました。その日は、前年秋に大きなニュースになった中国漁船の赤サンゴ密漁事件で逮捕、起訴された中国人船長の判決公判を傍聴することが出来ました。法廷には大勢の新聞記者も詰めかけており、判決が出ると会社に一報を入れるために駆け出てゆく姿を見ることも出来、現場取材の厳しさを垣間見ることが出来ました。

また、7月には、よくニュースに登場する靖国神社にも行って見ました。何か怖い場所を想像していた学生もいたようですが、行ってみると他の神社のたまたまいと大差なく意外な感じを受けた人もいたようです。ただ、傍らに開設されている遊就館に入ると雰囲気が一変、妙に恐ろしい感じがしたのが印象的でした。この後、靖国から歩いて10分ほどのお濠端にある千鳥ヶ淵

戦没者墓苑にも足を延ばしました。こちらは、まったく宗教色のない追悼施設で天皇、皇后両陛下の献花も飾られていることも多く、その違いの背後にある政治的な難しさを肌で感じたようです。今年、就活期間の長期化が大きく授業に影響しました。



横浜地方裁判所では、注目事件の判決公判取材した。

福島定点観測取材

担当:岩田伊津樹(チャレンジセンター教授)

4年目を迎えた福島定点取材による柳沼家訪問取材も今年9月で7回目となりました。東日本大震災から4年が経過、福島県産農作物への風評被害は徐々に下火になりつつあるようです。柳沼家の人達は淡々とした日々を送っており、桃やリンゴなどの果樹園を一手に切り盛りする千津子さんの奮闘が続いています。

今回の福島取材では、地元紙の福島民友本社(福島市)を訪れ、五阿弥宏安社長や菅野篤編集局長から長時間にわたって福島の現状について聞くことが出来ました。各地で原発事故による放射性廃棄物の受け入れ拒否などが続く現状に対して「絆って何だったの?」という五阿弥社長の問いかけが心に残りました。

また、この後、海沿い地区の浜通りへ出て国道6号線を南下、初めて福島第一原発の近くを通りました。これまで何度も規制地域の入り口までは行っていました。今回初めて北から南へ福島県の浜通りを縦断出来ました。第一原発に最接近した時には、一瞬持参した放射線量計の数値が上がりましたが、思ったほどの数値ではなくほっとしました。

しかし、第一原発周辺の帰宅困難地域は現在も無人地帯で、道の角々にガードマンが立つ姿が現状の厳しさを物語っているようでした。



今年、初めて福島県浜通りを南北に縦断して復興工事現場取材した。

時事問題研究A/B

担当:岩田伊津樹(チャレンジセンター教授)

春学期が「A」、秋学期が「B」として開講しています。入門編のAでは、今年には読売新聞東京本社の協力で受講生にその日の朝刊を1部ずつ配り、その中からニュースを選んで討論するなど生ニュース重視の姿勢で臨みました。また、沖縄・普天間基地移転問題に絡み、明治の琉球処分や沖縄県の歴史的経緯から、なぜ中国が沖縄の帰属は未解決といった主張を展開したのかなども考えてみました。

春学期には、集団的自衛権をめぐる国会論戦が白熱していました。これに合わせて集団的自衛権がなぜ憲法で許されないとされてきたのか。憲法の条文を読み、これまでの自衛隊をめぐる歴史的な議論の積み重ねはどうなっているのか。日米同盟の歴史や安全保障の考え方の基本はどうか——なども議論しました。

秋学期は、よりニュースに対する理解を深めてみようという考えで取り組みました。途中、パリでイスラム国による同時多発テロ事件が起きました。テロリストの動機を考えるため第1次湾岸戦争から米国の9.11同時テロ、そしてアフガン、イラクの両戦争とこの間の経緯を考えてみました。

しかし、中東問題の根源を考えるとさらにさかのぼる必要があります。ソ連のアフガン侵攻やイスラエル建国による中東戦争。また問題の発端は、100年前の帝国主義の時代にまでさかのぼらざるを得ません。こういった歴史的な経緯を調べるのも現在の問題を理解する上で欠かせません。少人数

授業の特徴を生かし、極力、学生一人一人が問題を深く考えられる授業にしています。

目の前で起きている出来事も、単純にその場で起きている事実を見るだけでなく、その原因がはるか前の時代にあることも多いということを理解してくれればと思います。



この授業では、尖閣問題や集団的自衛権行使関連法案などを深く議論をした。

マスコミ倫理

担当:岩田伊津樹(チャレンジセンター教授)

「芸能ジャーナリズムという言葉がありますが、この授業では芸能人のスキャンダルは扱いません」という言葉からこの授業は始まります。なぜ、扱わないのか。本来のジャーナリズムが扱うニュースとは、どんな問題なのか。それはどうしてなのか、そんなことを一つ一つ考えていきます。

また、憲法で保障された取材や報道の自由は無制限の自由なのかといった、過去に裁判で争われた内容も取り上げます。取材記者が現場で遭遇する問題は、過去に様々な議論の積み重ねがありその上に行動規範が出来あがっています。

しかし、長いジャーナリズムの歴史には、当局からのリークに頼った挙句、被害者を犯人視して報道したり、捜査陣の思い込みをそのまま特ダネとして報じ、結局、それが冤罪事件となったりするなど数多くの失敗もあります。そうした過去の失敗はどうして起きたのか、どうすれば防げたのかなどを実践的に取材現場の視点から考えるのもこの授業の特徴の一つです。

毎回、多くの受講希望者があるため春学期、秋学期とも週一回開講しています。

国際ジャーナリズム

担当:山口勉(チャレンジセンター教授)

8年に及んだ教師生活で春秋と一貫して受講者が多いのが「国際ジャーナリズム」です。春はアメリカを中心に、秋は中国、中東を中心に国際ニュースを理解するうえでの最低限の知識を与えることを目標にしていますが、国際潮流の変化が激しいため、講義内容は前年のものから大きく変えざるを得ないことが多いです。

受講生は100名から最大200名ですが、毎回その回の講義内容への質問を書かせて次回に回答し、さらに毎学期4回のレポートを書かせて、目立ったレポートはその都度内容を紹介することにしています。質問やレポートはその世代の知識や興味の在り様を探る格好の素材ともなります。質問・レポートでは「南沙諸島の問題でなぜアメリカと中国は戦争をしないのか」といったぎょっとするものから、アラブ系のボーイフレンドとの交流を通じたイスラム論まで毎回楽しませてくれます。

ただ8年間を振り返れば最初の方がユニークな見方や意見が多く寄せられていたようにも感じられます。「ゆとり教育」が終わったためかとも思うのです。



研究業績

2014年度 学部等研究教育補助金による研究

2014年度学部等研究教育補助金にて、下記の2件の研究が行われた。

1. 情報機器を用いたアクティブラーニングの開発(岡田工、崔一英)
2. ジャーナリズム・ゼミナールA/ジャーナリズム・ゼミナールB 福島定点観測取材(岩田伊津樹)

情報機器を用いたアクティブラーニングの開発

担当: 岡田工、崔一英(チャレンジセンター教授)

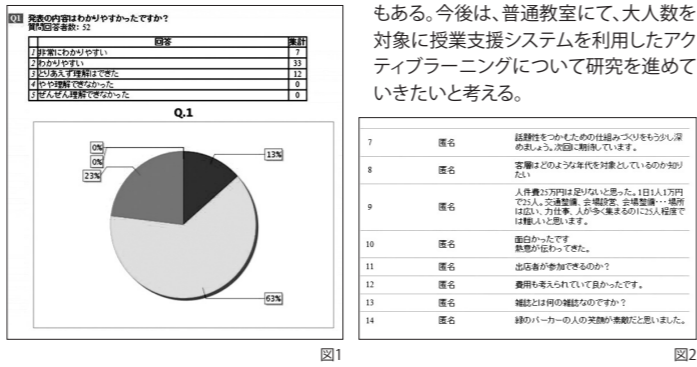
チャレンジセンターの開講科目は、学部学科、学年を問わず自由に履修出来る科目である。授業にアクティブラーニングを広めていくためには、授業の進め方をわかりやすくしたり、使いやすい教材や資料を準備する必要がある。今回、授業支援システムを利用してアクティブラーニングを行った。また、スマートフォンを利用して、授業の運営が可能であるかを検証した。

2014年度春学期、熊本キャンパスにおいて、「プロジェクト入門A」を開講した。この授業では、「幸福度」を上げるためのプロジェクトを学生に考えてもらう授業である。前半は、第一課題「大学における学生の幸福度とは?もっと幸せになるために」とし、後半は第二課題「地域活性化、地域における幸福度を上げるには?」の2テーマを考える授業内容とした。ここでは、授業支援システムを利用し、アクティブラーニングの実践を試行した。グループの討論結果や授業の振り返りなど、レポート機能を利用した。特にグループ発表においては、授業支援システムのアンケート機能を利用し、学生による発表の相互評価を行った。図1に学生発表の評価の一例を示す。アンケート結果は、リアルタイムでの集計が可能で、学生達の発表を瞬時に振り返りが出来るメリットがある。また、アンケートは記述回答も可能であり、図2のように学生から発表者に対して、意見を出す事が出来る。発表者への質問は学生にとって難しいと思われる部分であるが、アンケートの匿名記入を利用することで、多くの学生が質問内容を考えることが出来た。

1つのテーマにおいて、同一内容の発表を中間発表と最終発表として2回を行っている。初回の発表では、発表者は発表内容を理解することが精一杯で、他人に伝える部分まで気が回らない。しかし、初回発表後、受講学生からの評価状況を見ることにより、人

に伝えることの難しさや表現方法について改善点を見出すことが出来る。特に授業支援システムでは、リアルタイムに結果がわかるため、発表直後に自分達の振り返りが可能となる。このように授業支援システムを利用することにより、学生達が自ら理解し、今後どのように対応出来るかを検討することが可能となる。

授業支援システムは、スマートフォン等が利用可能であり、出席や資料、アンケート結果を手元で閲覧することが出来る。授業内で使用したスライド等は授業支援システム内に置かれており、学生は自由にダウンロード出来る。就職活動等で欠席した学生に対しても授業内容をフォロー出来るメリットもある。今後は、普通教室にて、大人数を対象に授業支援システムを利用したアクティブラーニングについて研究を進めたいと考える。



ジャーナリズム・ゼミナールA/ジャーナリズム・ゼミナールB 福島定点観測取材

担当: 岩田伊津樹(チャレンジセンター教授)

福島県と同じ家庭を継続的に取材することで、東日本大震災と福島第1原発事故の生活への影響と復興を記録し、同時に日本農業の問題点を考えようという趣旨で始めた観測取材も3年目を迎えた。今年度の取材行は2014年6月と2015年2月の2回実施した。

◆2014年6月14日(土)

1.福島県・鏡石の柳沼家(定点)

●農業の現況について

対応していただいたのは、柳沼家で一手に農業を取り仕切る千津子さん。風評被害の影響はまだ色濃く残り、解消されるには10年かかるのではとあきらめ顔だった。学生達も何とかしてあげたいという気持ちを持った。

2.津波跡の復興状況

原発事故現場の一角で通行止めが続いていた国道6号線が間も無く再開するというニュースが流れたばかりだったので福島経由で浜通りへ。現場周辺へは、関係車両だけの通行のようだったが南相馬の海岸を見る。復興工事は進んでいるようだった。住民が元の生活へ果たして戻れるのかどうか、極めて厳しい状況といわざるをえない。

■行動記録

- 9:00 郡山駅集合後 レンタカーで鏡石・柳沼家へ
- 9:55 柳沼家到着、取材
- 11:45 果樹園で取材
- 12:10 果樹園から相馬市へ出発
- 14:33 南相馬の海岸で現地取材
- 16:13 南相馬から仙台へ移動
- 19:10 仙台駅到着、反省会後、現地解散

◆2015年2月21日(土)~22日(日)

1.福島県・鏡石の柳沼家(定点)

1999年、「茨城県で起きたJCO東海事業所の臨界事故でも風評被害が10年続いた」と柳沼千津子はため息をついた。しかし、昨年は豊作だったというのが何よりの救いだ。

2.津波被害からの復興

●宮城県名取市閑上の現状

住宅の密集した漁村だったというのが、津波で地域一帯が根こそぎ流された。多くの人が訪れる土地となり、立派な慰霊碑が出来ていた。

●宮城県石巻市の現状

前年度もお会いした石巻市の千葉紀子さん、登米町の高橋是枝さん、それに今回新た

に参加していただいた阿部美紀さんの3名に最近の生活ぶりを聞いた。小学校教諭の阿部さんの話からは、被災当時の意外な出来事を幾つも聞くことが出来た。石巻は、町の大部分が津波で流されたが、着々と復興が進んでいる印象だった。また、南三陸町では、土地のかさ上げなど大土木工事の現場となっていた。

■行動記録

- | 日 | 時刻 | 内容 |
|----------|-------------|----------------|
| 2月21日(土) | 10:30 | JR郡山駅集合 |
| | 11:00~13:15 | 柳沼さん宅で取材 |
| | 15:44~16:20 | 宮城県名取市閑上地区取材 |
| 2月22日(日) | 18:35~22:20 | 石巻市内で住民の方々に取材 |
| | 8:50 | ホテル発 |
| | 9:00~9:47 | 石巻市内取材 |
| | 10:28~10:55 | 大川小学校跡を取材 |
| | 11:59~13:24 | 南三陸町取材 |
| | 13:30~17:25 | 気仙沼取材を経て仙台駅着解散 |

3.考察

一か所を継続的に取材することで時間的な変化を記録するとともに学生の取材技術も磨いていこう。そんな考えから東日本大震災と福島原発の事故をきっかけにスタートしたこの取り組みも3年目を迎えた。この間、定点を引き受けてもらった福島・鏡石の柳沼家を中心に福島、宮城の両県の被災地を計6回取材した。本来の目的である定点取材の原則からいえば、なるべく同じ学生に繰り返し取材してもらいたいところですが、継続参加はごく一部だった。チャレンジセンター科目のゼミというコースの位置づけからやむを得ない面もあると思う。

しかし、「実際に自分達の目で確かめ現地の人達の話聞いて感じたのと、メディアを経由して聞いていた情報とは大きな違いがあることがわかった」と参加学生のだれもが話すように、少しでも現場を見ることの重要性が実感出来たら成功だったと思う。



2015年度学部等研究教育補助金による研究

チャレンジセンター科目における反転授業に関する研究

担当: 岡田工(チャレンジセンター教授)

1.担当者・分担者 岡田工、崔一英、末延吉正(チャレンジセンター教授)

2.計画概要及び実施方法

- i) チャレンジセンターでは、社会人実践力を身につける授業を展開している。現在、JMBOOKなどインターネット上の動画を利用した反転授業が注目されている。本研究は、チャレンジセンター科目において、反転授業を行なうことを目的とし、授業内容を含め研究していく。
- ii) 本年度は、プロジェクト入門に注目し、授業内で利用出来るコンテンツについて検討する。来年度以降その他の科目、またはその他の教員に広めていけるように準備していく。
- iii) 今年度は、ビデオカメラを含め、ハードウェアを中心に整備していく。

チャレンジセンター授業参観実施報告(2014年度秋学期)

担当: 堀本麻由子(チャレンジセンター准教授)

1.授業参観者 岩田伊津樹(チャレンジセンター教授)

2.参観実施日時 2014年12月22日(月)3限

3.対象授業 : 「成し遂げ力(入門)」 ~テーマ:セルフマネジメントによって成し遂げる力について考える

教室 : 1C-203

教員名 : 堀本麻由子(チャレンジセンター准教授)

4.この日の授業の進め方

グループごとの討議なのに全体が話し合っているような効果が得られるワールドカフェという手法の実践。

討議のテーマはセルフマネジメント。

まず、「ワールドカフェ」の進め方について約10分程度の説明があった。

説明に従って100名程度のクラスを3名から5名程度ずつ22のグループに分ける。

グループごとに模造紙1枚と幾つかの色のマジックを配る。

これを使って、それぞれの意見を紙に書いてゆく。

初めは各人の簡単な自己紹介をするが、当然のことながら話しははずむグループもあれば淡々と進むところもある。討議を反映して模造紙の上にどンドン文字が書かれていく所と数語だけで行き詰るところと出て来る。

教員は、教室内を回ってアドバイスする。

最初の討議は30分ほどで終了、ホストと呼ばれる1名を残してあとの人達(旅人)は指定された別のグループに行って前のグループでの話し合いの結果を報告する。同時に

研究業績一覧

【著書・学術論文】

- 青木孝子「数学と人間行動」2015年度数学教育学会秋季例会発表論文集(掲載予定)
- 青木孝子「大学教育と生涯学習」日本数学教育学会第3回春期研究大会論文集(掲載予定)
- 安森信郎、岡田工・崔一英「永久磁石の「片側磁場」だけを用いたホール効果」物理教育Vol.63, No.4 252p-257p (2015年12月)
- 安森信郎、岡田工・崔一英「ルータを用いたホール効果実験用棚形シリコン試料の製作」東海大学教育研究所紀要第23号(2016年3月)
- 堀本麻由子「省察的実践者の教育(ドナルド・ショーン著)」風書房、8章翻訳担当(2016年12月刊行予定)

【学会・学術集会】

・国際会議

- Mayuko Horimoto & Kumiko Tanaka「Global Citizenship Education Program through PBL/CBL at Tokai University」J Annual Conference 2015 NAFSA: Association of International Educators., May 26, 2015- May 31, 2015, Boston, USA(2015年5月)
- Tajima, S., Asoh, N., Shoun, A., & Sakamoto, A. The effects of career education and television viewing on work values of young people. IAEVG International Conference 2015, The 11th Asia Regional Association for Career Development Conference, The 37th Conference of the Japan Society for the Study of Career Education, Program Book, 94, (Tsukuba, Japan), (2015年9月)
- Funayama, T., Yamamoto, Y., Tomita, M., Kajita, Y., Tajima, S., Utsu, K. & Uchida, O. Disaster Mitigation Support System using Web Services and SNS Information, The 13th International Conference of ICT and Knowledge Engineering, (Accepted), (Bangkok, Thailand), (2015年11月)
- Uchida, O., Kosugi, M., Endo, G., Funayama, T., Uts, K., Tajima, S., Tomita, M., Kajita, Y., & Yamamoto, Y. A Real-Time Disaster-Related Information Sharing System, Proc. 5th International Conference on Social Media Technologies, Communication, and Informatics, 22-25, (Barcelona, Spain), (2015年11月)

・国内学会発表

- 青木孝子「大学教育と生涯学習」日本数学教育学会 第3回春期大会(2015年6月)
- 岡田工・村田浩平・土屋守正「モバイルWi-Fiルータを使用した遠隔授業の実践」日本情報科教育学会 第8回全国大会(2015年06月)
- 田島祥「第107回心理ロキウム シャイネスとオンライン環境」(京:中部大学)(2015年7月)

iv) プロジェクト入門では、グループワークを行い、その結果をプレゼンテーションする授業内容である。特にプレゼンテーションについて、アプリケーションの使い方は学生に不要となってきたが、プレゼンテーションの方法については知識の浅い学生も多い。時間数の少ない中、プレゼンテーションの説明について時間を使うよりも反転授業を活かした方が効率が見込まれる。今回、プレゼンテーションの方法も着目し、ビデオ映像を作る予定である。

3.期待される成果

v) 今回の作成したビデオ教材はプロジェクト入門だけでなく、プロジェクト活動をはじめ多くの活動にプラスになるのではと考えている。

5.教授法について参考になった点

印象的だったのは、授業中の時間管理だった。説明や各ラウンドの話し合いが極めてスムーズに予定通りに進行して無駄がない。

これは、事前に綿密なグループ分けが準備されていることや配布資料が行き届いていることなどが大きい。

特に、学生達は一定時間ごとに教室内を移動、その都度文字を書くなどするため、眠くなったりあきたりするひまがない。学生達にテーマを与えてそれぞれの考えをまとめよ——といっても、漠然として学生達は何から手をつけていかかわからない者が多い。それをグループ化、段階化することで思考の進め方が身に付いていくのではないかとと思われる。

6.結論

授業中、積極的に学生側から発言することが期待出来ないクラスでは、こうしたアクティブ・ラーニングの手法を取り入れてゆくことが有効かと思われる。ただ、一般の授業でどのように取り入れるかは、方法的に試行錯誤が必要になると思われる。

- 田島祥・松尾由美・寺本水羽・祥雲暎代・相田麻里・坂元章「メディア利用がシャイネスに及ぼす影響—暗黙の自己観による調整効果の検討—」日本パーソナリティ心理学会第24回大会発表論文集, 44, (2015年8月)
- 渋谷恵・田島祥・松尾由美・寺本水羽・坂元章「シャイネス者の事前情報収集が初対面面での不適応改善に及ぼす効果(1)—自己評定に関する検討—」日本パーソナリティ心理学会第24回大会発表論文集, 42, (2015年8月)
- 寺本水羽・松尾由美・田島祥・渋谷恵・祥雲暎代・相田麻里・坂元章「2因子集団間不安尺度の改訂—信頼性と妥当性の検討—」日本パーソナリティ心理学会第24回大会発表論文集, 67, (2015年8月)
- 松尾由美・田島祥・寺本水羽・祥雲暎代・相田麻里・坂元章「新奇恐怖と評価懸念がシャイネスの諸側面に及ぼす影響」日本パーソナリティ心理学会第24回大会発表論文集, 43, (2015年8月)
- 青木孝子「数学と現実世界—数学の特性とその進化論的基礎 人間行動の数学」数学教育学会 秋季例会(2015年9月)
- 内田理・小杉将史・遠藤岳・船山貴光・宇津圭祐・田島祥・富田誠・梶田佳孝・山本義徳「Twitterを用いた災害情報共有システム」2015年電子情報通信学会基礎・境界ソサイエティ大会(2015年9月)
- 堀本麻由子(コーディネーター)「社会教育における「労働と生活」—実践における生活と科学との関係性を手がかりに—」日本社会教育学会第62回研究大会(於:首都大学)ラウンドテーブル(2015年9月)
- 松尾由美・田島祥・寺本水羽・祥雲暎代・相田麻里・渋谷恵・坂元章「SNS上での外国人利用者との接触と外国人イメージに及ぼす影響」日本心理学会第79回大会発表論文集, 179, (2015年9月)
- 鹿田光一・小林行雄・中嶋卓雄・岡田工・崔一英・園田由紀子・木村英樹 事前・事後学習「授業支援システムを活用したアクティブラーニング 社会的実践力養成科目への適用」平成27年度教育改革ICT戦略大会A-11(2015年9月)
- 広川美津雄「携帯端末オンラインストレージとスマホを活用したPBLにおける主体的な授業外学習の試み」平成27年度教育改革ICT戦略大会D-9(2015年9月)
- 田島祥・麻生奈央子・祥雲暎代・坂元章「キャリア教育が中学生・高校生の勤労観・職業不決断に及ぼす影響—テレビ視聴による調整効果の検討—」日本社会心理学会第56回大会発表論文集, 381, (2015年10月)
- 寺本水羽・松尾由美・田島祥・渋谷恵・祥雲暎代・相田麻里・坂元章「SNS上での外国人との接触が外国人に対する態度に与える影響—集団間不安の調整効果の検討—」日本社会心理学会第56回大会発表論文集, 391, (2015年10月)
- 松尾由美・田島祥・寺本水羽・祥雲暎代・相田麻里・渋谷恵・坂元章「SNS上での間接接触が外国人イメージに及ぼす影響」日本社会心理学会第56回大会発表論文集, 388, (2015年10月)
- 祥雲暎代・田島祥・麻生奈央子・坂元章「物語への没入感がテレビドラマ視聴へ与える影響」日本社会心理学会第56回大会発表論文集, 225, (2015年11月)

2015年度は、本センターの開講科目について、教員間で情報を共有し、授業内容の改善を図ることを目的としてFD研修会を開催した。また、キャリア就職センターと合同でFD研究会を開催した。本教員の発表する各センター開催のFD研究会をチャレンジセンターFD研究会として振り替えた。

総合教育センター・チャレンジセンター・To-Collabo推進室合同FD研究会報告 パブリック・アチーブメント (PA) 型教育とは何か	日時：2015年6月10日(水)17:00～18:15 場所：東海大学湘南キャンパス 8号館4階 408教室
---	---

全体の目的：
「PA:コーチのためのガイドブック」の内容について、訳者の先生方にご講演いただき、関係部署でPAに関する予備知識を共有する。

【講演1】 PA型教育とは何か？
-PAガイドブック第1～5章を手がかりとして-

大江一平(総合教育センター准教授)
 シティズンシップの定義やCOCにおけるシティズンシップ教育の位置づけについて解説された。その後、アメリカ合衆国におけるシティズンシップ教育の背景や、PA型教育の例として、オクスバーク大学の実践が紹介された。
 最後に、講師の専門である憲法学の観点からの検討と今後の課題が述べられた。

【講演2】 教職員(学習支援者)に求められる役割について
-PAのコーチングを参考に-

堀本麻由子(チャレンジセンター准教授)
 PA型教育を進める上で教職員(学習支援者)に求められる役割について、相手が何に関心があるのかを引き出していく「コーチング」を中心に解説された。特に生涯発達コーチングは、若者の主体性不足に効果をもつことが明らかになっており、教育現場で注目されているものであることが紹介された。

質疑・感想等
 講演内容に対する質問や感想として、1フリー・スペースについて、2オクスバーク大学の実践で扱っている課題の内容について、3PA型教育の効果について、4地域と学生をつなぐコーディネーターの役割の重要性について、等がフロアから指摘され、講師からの解説を含めたディスカッションが行われた。

チャレンジセンターFD研修会報告 PA型教育教職員研修「PAワークショップ」	日時：2015年8月18日(火)、19日(水) 場所：東海大学湘南キャンパス 18号館サイエンス・フォーラム
---	---

本研修会は、本学における全学的なPA型教育の導入・推進に先駆け、本学の教職員がPAに関する理解を深めることを目的として2日間に渡り湘南キャンパスにて開催された。当日は、湘南、高輪、清水、伊勢原、熊本、阿蘇キャンパスから集まった教職員や他大学の学生ら36名が参加。PAの先進国である米国Augsburg College PAナショナルオーガナイザーのデニス・ドノヴァン氏を講師に迎え、シティズンシップ(PAのコア・コンセプト)の紹介、若者のシティズンシップ育成における支援者(教員、職員)の役割とスキル開発、Civic Agency(市民的エージェンシー)やPAプロジェクトの運営方法から授業への活用などについて解説された。また2日目には、実践形式でPAのプロセスを体験するワークショップを実施した。

1日目は、堀井龍太郎副学長から挨拶があり、研修の目的、2017年度カリキュラム改訂に向けた進捗状況に関する説明がなされた後、ドノヴァン氏によるシティズンシップについての解説から研修がスタートした。PA型教育を行ううえで、重要となるのは「Civic Agency(市民的エージェンシー)」であり、Civic Agencyの特徴についても詳しく解説された。学生にとっての最初の大きな課題は何かというド

ノヴァン氏の問いに対して、PAコーチの経験を持ち、ドノヴァン氏のアシスタントとして参加したエリザベス・ボットさんは「自分は何に関心があるのか、なぜ情熱を感じるのかを知ることが最初の大切なステップでした。」と答えていた。

2日目は「Learning about how to create free space in the classroom」「Learning about how to evaluate student's outcomes in PA classes and projects」と題し、若者の社会参加に関する自己関心(self-interest)の引き出し方、One-on-One インタビュー、Power mappingなどの紹介をしていただき、ワークショップを実施した。

参加者からは、「講義だけではなく、ワークを含む研修であったので、理解度が高まったと思う。PA型教育に関するガイドブックを読むだけではわからない細かいことを学ぶことが出来て良かったと思います。」「これまでのFDで海外研修の報告という形でうかがっていたPAについて、直接レクチャーを受けることが出来てとても有意義でした。とても理解が深まったと思っています。」などのコメントが寄せられた。

総合教育センター・チャレンジセンター合同FD研究会 「100人規模の授業でPA型教育は可能か」	日時：2015年12月9日(水) 場所：東海大学湘南キャンパス 15号館4階 第1会議室
--	---

チャレンジセンター堀本麻由子准教授より、イントロダクションとして「100人規模の授業でPA型教育は可能か」という問題意識に沿って議論の素材を提供した。2018年度から開始される新カリキュラムの区分Ⅱでは、PA型3科目、シティズンシップ、ボランティアの開講が予定されており、区分Ⅴにおいては、PA型演習科目として資料に提示している科目が予定されている。今回の合同FD研究会では、事例を交えてPA型授業について議論していく。

【事例報告1】「挑み力(入門)」での授業実践の紹介

富永貴公(チャレンジセンター非常勤講師)
 「市民社会の形成に基づく学習」をテーマに、社会教育、生涯学習の視点からこの市民社会をどのように形成していくかを考えるという内容になっている。PAで社会の問題を捉え、考えていく上で知識があることが指摘されており、この授業においても、問題を捉えるための枠組みとなる知識、求められる教養の習得を重要視している。

キャリア就職センター・チャレンジセンター・To-Collabo推進室合同FD研修会 「PROGのテスト結果から見る基礎力について」	日時：2016年1月20日(水) 場所：東海大学湘南キャンパス 15号館4階 第1会議室
--	---

①ジェネリックスキルの求められる背景

はじめに、経団連の調査や中教審、グローバル人材育成戦略等を引用し、学力とは異なるジェネリックスキルの対するニーズが高まっていることが解説された。早期決定者と就職未決定者を比べるとPROGの「対人基礎力」の開きが大きいという。また、就職指導において気に掛ける学生をスクリーニングする手段としてPROGを活用する学校があることなどが紹介された。

②PROGについて

PROGについての基本的な情報として、ジェネリックスキルを「リテラシー(知識を活用して課題を解決する力)」と「コンピテンシー(経験を積むことで身に付いた行動特性)」に分けていることや、今回はコンピテンシーを測定していること、リテラシーは偏差値と相関があるが、コンピテンシーには関連はないことなどが説明された。

292校25万名が受験しており、主に次の3種類の活用のされ方が紹介された。
 1) 主体的な学びの促進として(PDCAサイクル)
 2) 学修成果の効果測定 / 学生の現状把握として(他大学との比較)
 3) 教育IRとして

【事例報告2】「成し遂げ力(入門)」での授業実践の紹介

崔一英、岡田工(チャレンジセンター教授)
 シラバスの紹介とこの授業の特徴である「スマートフォン」を使った授業の取り組みについて報告した。本授業のテーマは「地域理解とシティズンシップ」であり、PA科目4つのうち2つを足したものととなっている。本授業でスマートフォンをほとんどの学生が保持しており、これまでそれに関して特にトラブルも起こっていない。授業支援システムを利用することにより、学生のコメントを教員学生同士で相互に確認が出来て、さらに学生同士も共有可能な点が有効であった。

【ディスカッション】

堀本麻由子(ファシリテーター チャレンジセンター准教授)
 ディスカッションでは、授業内容や試験内容について質問があった。また、授業への参加をアクティブにすることが、市民社会への参加に繋がるという意見も出た。

③テスト結果・経年変化(本学の強み・課題等)(2014・2015年度比較)

本学の結果について、他大学との比較や経年変化がグラフを用いて報告された。2015年度は2,658名が受験しており、概要として1、2、3回目で伸びがみられるとのこと。また、本センターの3年生の結果は、四年制大学3年生の平均や東海大学3年生全体、湘南キャンパス3年生に比べてレベルが高く、特に「対自己基礎力」が高いことが報告された。経年比較によると、本センターの学生の結果としては、「課題発見力」に伸び悩みがみられるものの、「対人基礎力」は伸びていた。特に3年生の結果をみると、「対自己」が大きく伸びており、3年生になって活動内容や役割に変化があったことが反映しているのではないかと解説された(後輩指導など)。

④アンケートとのクロス集計結果

相關などの統計的な面は現在分析中であり、今回はクロス集計のみが報告された。大学生活に満足している学生は初期値が高く、その中で得点も伸びていた。一方、大学生生活を否定的にみている学生は、平均値では得点が下がっていた。「何をしたか」より「意識して取り組んだか」が重要であり、取り組みに対して意識した学生の伸長が高いことが示された。

※詳細については次ページに示す。

プロジェクト活動で身につける4つの力に関する評価

2009年に、本学は社会的な実践力を養うための具体的な教育目標・育成する力として『4つの力』を策定した。これは、本学の教育理念を現代社会に対応させて、分かりやすく表現したものであり、社会で求められている《士力》や《社会人基礎力》とも呼称するものである。運動して、2013年に東海大学学長室から『4つの力』によるルーブリックが公表された。本センターでは、開設当初から、「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」の3つの力について日々のプロジェクト活動を意識したルーブリックの検討を行ってきた。2014年には、これに学長室で策定された「自ら考える力」のルーブリックを加え、指定した4つのチャレンジプロジェクトにおいて試行した。プロジェクトのメンバーは、年度内に3回ルーブリックを用いた自己評価を行った。具体的には7月に年度初期(4月～6月の活動)を振り返り、10月に年度中期(7月～9月の活動)を振り返り、2月に年度終期(10月～1月の活動)を振り返った。同年の年度末には、実施したプロジェクトメンバーの意見を聴取り、さらに、チャレンジプロジェクトのリーダー研修会でもその意義を周知したうえで評価項目の検証を行った。その結果、以下の内容を中心に修正を行った。

『自ら考える力』…「情報収集」では、情報の定義がわかりづらいとの意見から、「そのときの活動に必要な情報」と定義する。

『集い力』…「コミュニケーション力」では、「相手の考え方や思いを理解しながら、自分の考え、意見も伝えることができる」という内容を、「スムーズに情報交換や意思疎通を行えること」また、「妥協や解決法という言葉を使用しないように修正」

『挑み力』…「問題発見力」では、「問題解決よりも問題発見が中心になるように文言を修正」「同構想力」では「アイデアの量と質、具体性・実現性を踏まえて階段を設定するように修正」「同プランニング力」では、「アイデアを具体化することとリスク対策をとれるようになることを含む修正」

『成し遂げ力』…「工程管理力」では、「人・物・資金・時間を対象とするように修正」「分析と修正力」では、「チーム活動の経過や成果について」を「プロジェクトにおける活動の経過や成果について」に修正

また、これまでに用いた5段階評価では、段階間の移行を十分に捉えることが出来なかったことから、それぞれの段階の間に文言を含まない段階を加えた9段階評価に変更した。例えば、「自ら考える力」における学習力の場合、必要な情報を得る方法を自分なりに考えて収集することが出来る(評価5)が、必要な情報を得る自分なりに考えて出来るが、幅広く収集(評価7)するところまでは達していない場合には、評価は6ということになる。

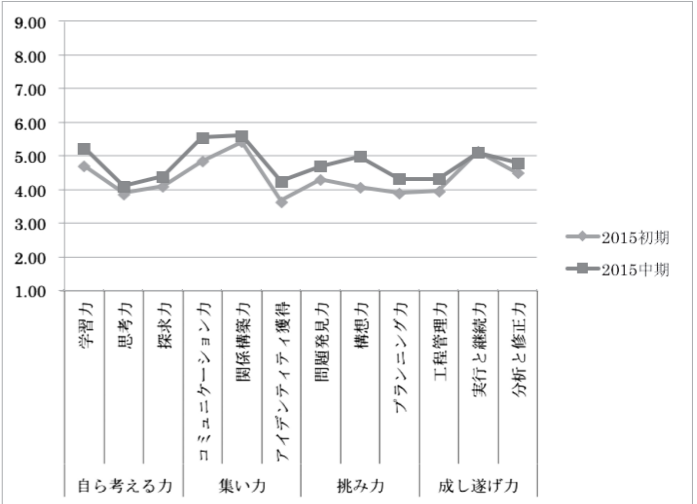
(表1) 自ら考える力・集い力・挑み力・成し遂げ力のルーブリック

以下を参照して、自分の現在のレベルを評価し、今後の目標設定をしよう。(年度の初期、中期・終期の3回行い、成長を自己確認します。)

学習力	1	活動中、その時に必要な情報は何で、それはどのようにして得られるか、考えない
	2	活動中、その時に必要な情報はわかるが、どのようにして得られるかはわからないことが多い
	3	必要な情報を得る方法を自分なりに考え、収集することができる
	4	必要な情報を得る方法を自分なりに考え、幅広く収集することができる
	5	日頃から幅広く情報に関心を持ち、必要な情報がどこにあるのか容易に想定でき、すみやかに情報収集できる
	6	活動中、その時に考えるべき事例について、得られた情報を整理し分析したりすることが少ない
	7	自分なりに情報を集めて整理をするが、視点が変わったり、分析が深まらないと感じることがある
	8	思い込みや推測をできるだけ入れずに情報を客観的に把握し、整理することができる
思考力	1	思い込みや推測をできるだけ入れずに情報を客観的に把握し、整理することができる
	2	思い込みや推測をできるだけ入れずに情報を客観的に把握し、整理することができる
	3	事実が複雑に絡み合っている問題でも、情報を客観的に分類・分析し、因果関係をわかり易く整理することができる
	4	1ものごとに対して、「なぜ、そうなるのか?」の理由や原因をあまり考えない
	5	2ものごとに対して、「なぜ、そうなるのか?」疑問をもち、理由や原因が明確になるよう考える
	6	3問題の原因や解決策が明確でないときには、自分なりの仮説を立て考えたり、調べたりする
	7	4問題の背景なども考えたりなど、ものごとに対して、自分なりの仮説を立てて考えたり、調べたりする
	8	5問題の背景なども考えたりなど「なぜ?」を何度も繰り返し深らして原因追究し、問題の本質に迫ることができる
コミュニケーション力	1	自分の意見を伝えるようしない、または、他者の意見を理解しようとしてない
	2	自分の意見を伝えること、他者の意見を理解すること、どちらかばかり得意だが、もう一方は得意でないことが多い
	3	自分の意見を伝えることも、他者の意見を理解することも得意。しかし、意見の違いについてうまく対応できないことが多い
	4	7自分と他者の意見の違いについて話し合い、どちらか一方の考え方にあわせて対応することができる
	5	自分と他者の意見の違いについて話し合い、どちらも一方の考え方にあわせて対応することができる
	6	自分と他者の意見の違いについて話し合い、どちらも一方の考え方にあわせて対応することができる
	7	自分と他者の意見の違いについて話し合い、どちらも一方の考え方にあわせて対応することができる
	8	自分と他者の意見の違いについて話し合い、どちらも一方の考え方にあわせて対応することができる
関係構築力	1	自分と他者の意見の違いについて話し合い、どちらも一方の考え方にあわせて対応することができる
	2	自分と他者の意見の違いについて話し合い、どちらも一方の考え方にあわせて対応することができる
	3	自分と他者の意見の違いについて話し合い、どちらも一方の考え方にあわせて対応することができる
	4	自分と他者の意見の違いについて話し合い、どちらも一方の考え方にあわせて対応することができる
	5	自分と他者の意見の違いについて話し合い、どちらも一方の考え方にあわせて対応することができる
	6	自分と他者の意見の違いについて話し合い、どちらも一方の考え方にあわせて対応することができる
	7	自分と他者の意見の違いについて話し合い、どちらも一方の考え方にあわせて対応することができる
	8	自分と他者の意見の違いについて話し合い、どちらも一方の考え方にあわせて対応することができる
アイデンティティ獲得	1	期待されている役割は理解し、それを実践する行動を行っている
	2	期待されている役割を理解し、それを実践することができる
	3	期待されている役割を果たすだけでなく、自分の強みや特徴を活かした役割を自分で見つけ出すことができる
	4	期待されている役割を果たすだけでなく、自分の強みや特徴を活かした役割を自分で見つけ出すことができる
	5	期待されている役割を果たすだけでなく、自分の強みや特徴を活かした役割を自分で見つけ出すことができる
	6	期待されている役割を果たすだけでなく、自分の強みや特徴を活かした役割を自分で見つけ出すことができる
	7	期待されている役割を果たすだけでなく、自分の強みや特徴を活かした役割を自分で見つけ出すことができる
	8	期待されている役割を果たすだけでなく、自分の強みや特徴を活かした役割を自分で見つけ出すことができる

前述の経過により、プロジェクト活動の実践を主眼としたチャレンジセンター版の『4つの力ルーブリック』が完成し、2015年には2014年度と同様の4プロジェクトを対象にルーブリックを用いた自己評価を実施した(対象学年は1～3年生)。
 *2015年度試行の評価項目を以下に表示する。(表1)

○2015年度初期と同年中期の比較(図1)



○対象者:4プロジェクト 2015初期 121名 2015中期 120名

図1から「自ら考える力」の学習力、「集い力」のコミュニケーション力とアイデンティティ獲得、「挑み力」の構想力、「成し遂げ力」の工程管理力を中心に数値が上昇し、「自ら考える力」の思考力、「集い力」の関係構築力では数値はほぼ横ばいとなっていた。一方、「成し遂げ力」の実行と継続力ではわずかに数値が低下していた。「自ら考える力」、「集い力」、「挑み力」、「成し遂げ力」全てにおいて、平均値では伸長が見られた。

問題発見力	1	プロジェクト活動を実施していく中で、テーマや活動内容に対して特に疑問や問題意識を持っていない
	2	プロジェクト活動を実施していく中で、テーマや活動内容に対して漠然とした疑問や問題意識は持っているが、はっきりと説明することができない
	3	はっきりとした疑問や問題意識を持っているが、どのように取り組んだらいいかわからない
	4	はっきりとした疑問や問題意識を持ち、それに対して実際に取り組んでいる
	5	その時点で感じている疑問や問題に取り組んだ上で、さらなる課題はないか視野を広げて考えることができる
	6	プロジェクト活動における問題や課題に対して、自分からアイデアを出すことはない
	7	プロジェクト活動における問題や課題に対して、アイデアをいくつか出し出すことができる
	8	プロジェクト活動における問題や課題に対して、アイデアをいくつか出し出すことができる。ただし、以前の企画や、他者の案をまねてしまうことが多い
構想力	1	これまでになかった新しいアイデアを複数出し、実現に向けて具体的に考えをまとめることができる
	2	自分自身またはプロジェクトで考えたアイデアに対し、具体的なゴールイメージ(最終的な成果に対するイメージ)をもつことができない
	3	ある程度具体的な成果をイメージできるが、全体の流れを考えたプランをたてることができない
	4	全体の流れを考えたプランをたてることができるが、起こりうるリスク(危険性)を想定することができない
	5	全体の流れを考えたプランをたてることができる。ある程度リスク(危険性)に対してもしっかりと対策をとれる
	6	全体の流れを考えたプランをたてることができ、リスク(危険性)に対してもしっかりと対策をとれる
	7	全体の流れを考えたプランをたてることができ、リスク(危険性)に対してもしっかりと対策をとれる
	8	全体の流れを考えたプランをたてることができ、リスク(危険性)に対してもしっかりと対策をとれる
プランニング力	1	プロジェクトの企画の準備や実行のために、どのくらいの資源(人材・物資・資金など)がかかるかを考えようとしていない
	2	企画の準備や実行のために、どのくらいの資源(人材・物資・資金など)がかかるかを考えようとするが、予測が不正確である
	3	企画や実行に必要な資源(人材・物資・時間・資金など)について予測できる。しかし、資源の管理のみがわからず、対策がとれない
	4	必要な資源(人材・物資・時間・資金など)について予測できる。資源を管理しようとするが、うまくいかないことが多い
	5	必要な資源(人材・物資・時間・資金など)について予測できる。資源を管理し、効果的に配分することができる
	6	プロジェクトの目標や計画の実現に向けて、行動をおこなっていない
	7	目標や計画の実現に向けて行動を起こせる。失敗や困難に直面してもそれを乗り越えようとする意志が失われない
	8	目標や計画の実現に向けて行動を起こせる。失敗や困難に直面してもそれを乗り越えようとする意志が失われない
実行と継続力	1	プロジェクトにおける活動の経過や成果について、良かったところ・悪かったところを分析しようとしていない
	2	プロジェクトにおける活動の経過や成果について、良かったところ・悪かったところを分析し、説明が不十分である
	3	活動の経過や成果について、良かったところ・悪かったところを説明し、改善策を提案・実行できる
	4	活動の経過や成果について、良かったところ・悪かったところを説明し、改善策を提案・実行できる
	5	活動の経過や成果について、良かったところ・悪かったところを説明し、改善策を提案・実行できる
	6	活動の経過や成果について、良かったところ・悪かったところを説明し、改善策を提案・実行できる
	7	活動の経過や成果について、良かったところ・悪かったところを説明し、改善策を提案・実行できる
	8	活動の経過や成果について、良かったところ・悪かったところを説明し、改善策を提案・実行できる

To-Collaboプログラムの取り組み

2015年度大学推進プロジェクト

安心安全プロジェクト

代表:内田理(情報理工学部情報科学科准教授)、崔一英(チャレンジセンター教授)、広川美津雄(教育研究所教授)、福崎稔(高輪教養教育センター教授)、田島祥(チャレンジセンター講師)、木村直樹(チャレンジセンター推進室職員)、他11名

本取組の目的は、多様な災害への対応を自治体や地域住民と連携して確立することです。

本年度は、6月13日に湘南キャンパスにおいて「防災フォーラム～市民で考える防災・減災～」を大根地区自治会連合会、秦野市、本学の共催で実施しました。市民や学生、教職員約300名が参加し、地震予知や災害時の対応についての最新の知見を学び、住民同士が意見交換することで地域の防災意識の向上につなげました。このフォーラムに3.11生活復興支援プロジェクトからパネリスト1名が参加し、発表しました。キャンパスストリートプロジェクトからは、4名がスタッフとして活動しました。防災フォーラムの開催ポスター、チラシの制作には教養学部の学生が参加しました。

11月22日には、高輪キャンパスにおいて、「高輪まつり2015～防災・減災を考える交流会～」を開催しました。「世代を超えた知の共有と育成を目指した地域運動型教育プログラムの構築」「科学コミュニケーション活動を通じた地域活性化プロジェクト」との共同の取り組みで、高輪地区防災ネットワークの協力を得て実現しました。

12月13日には、湘南キャンパスにおいて、「親子で楽しむ防災広場 in 湘南」を開催し、多くの子供達の防災意識を高めることが出来ました。

その他に、土木工学科の学生・教員および地域住民が合同でフィールドワークを行い、大根地区の防災マップを作成しました。さらに、防犯キャンペーンの一環として、盗難防止ポスターを大根自治連と学生・教員が共同で作成し、地域の防犯意識を高める活動も行いました。このように、本プロジェクトは大学近隣地域の安心で安全な社会実現に大きく貢献することが出来ました。



「防災フォーラム」の様子



「防災フォーラム」ポスター

2015年度地域志向教育研究経費プロジェクト

科学コミュニケーション活動を通じた地域活性化プロジェクト

代表:岡田工(チャレンジセンター教授)、内田晴久(教養学部人間環境学科教授)、平野葉一(文学部ヨーロッパ文明学科教授)、石原良美(理学部化学科教授)、瀧川洋二(教育研究所教授)、安森偉郎(教育研究所准教授)、他13名

本学では、これまでに地域の理数系教育の推進に向け、学内の教職員と学生による地域貢献活動が各地で展開されてきました。地域の子供達を対象とした科学教室の開催は、子ども達の理系へ興味を広げ、日本にとって重要となる理数系人材の育成へとつながって行きます。本事業では、大学が知(地)の拠点として地域の初等中等教育と連携し、学生達による科学教室における科学コミュニケーションを通じて、教員や学生と地域の子供達や住民達との交流を図り、大学開放を進めるプロジェクトです。本年度は、湘南キャンパスを初め、熊本キャンパス、清水キャンパス及び札幌キャンパスにて科学教室を開催し、地域との連携の在り方を検討し、あるべき姿を提案していきます。また、担当者同士の情報交換と連携を深めることで、学生の地域連携に対する理解をさらに促し、同時に、学生自身の成長につなげて行く予定です。地域の子供達と地域住民が楽しむことが出来る科学イベントを各キャンパスにて開催しました。6月13・14日(札幌キャンパス)「青少年のための科学の祭典in北海道2015」をはじめ、7月には30日(平塚市立大野小学校)「夏休みのお楽しみ会「理科実験教室」」を含む2件、8月には9日(熊本キャンパス)「世界一歩行きたい科学広場in熊本」を含む5件、9月には19日(清水キャンパス)「みんなであつた元気が出るドリームサイエンス2015 in Shimizu」を開催しました。また、10月には、24日(秦野市立大根小学校)「第23回大根ふれあい祭り」など2件に、11月には7日(港区高輪区民センター)「輪い輪まつり」と地域が主催するイベントにも参加しました。

9月8日には、神奈川県立秦野高校の体験授業において、湘南キャンパスと農学部阿蘇キャンパスをTV会議システムにて接続した遠隔科学授業を試行。阿蘇キャンパスの魅力や数多くの昆虫標本を高校生に見せることが出来ました。本研究は、以下の2点から成果が期待されています。

1. 科学コミュニケーション活動を拡大させることにより、開かれた大学、開かれた研究室のイメージが浸透します。知(地)の拠点である大学が、子ども達にわかりやすい、親しみやすい大学として認知され、地域住民からも信頼を深めることが出来ます。また、教員および学生のボランティア活動の在り方や地域ニーズとの連携の必要性がより明確になり、学生が社会連携の意義を自覚出来るよい経験となります。特に、教員志望学生にとっては教育力向上を図る具体的なプログラムの構築につながります。同時に、本センターの活動のように、学生同士の連携や教員の関わり方などについて、実践教育の場を広げていくことが出来ます。
2. 初等中等教育においては、大学生が模擬授業や模擬実験を行なうことにより、子ども達にとってわかりやすく、身近で親しみやすいため、教育効果をあげることが出来ます。特に初等教育における科学コミュニケーションは、生徒達の理数系教科への興味関心をさらに深めていくと考えられます。今後、日本の技術産業を支える人材の育成に寄与出来るようになることが出来ます。



8月22日(湘南キャンパス)「親子の科学教室」



8月9日(熊本キャンパス)「世界一歩行きたい科学広場in熊本」【湘南サイエンスコミュニケーター】

広報媒体 (ポスター・チラシ・パネル・広報誌)

〈チラシ〉



ライトパワープロジェクト

〈チラシ〉



スポーツ社会貢献プロジェクト

〈パネル〉



サイエンスコミュニケーター

〈ポスター〉



東海大学学生ロケットプロジェクト

〈パネル〉



Tokai Formula Club

〈パネル〉



3.11生活復興支援プロジェクト

〈ポスター〉



病院ボランティアプロジェクト

〈パネル〉



キャンパスストリートプロジェクト

〈チラシ〉



Tokai International Communication Club

〈パネル〉



環境キャラバン隊

〈ポスター〉



Music Art Project

〈ポスター〉



Japan Community Development Association

広報媒体 (ポスター・チラシ・パネル・広報誌)

〈ポスター〉



DAN DAN DANCE & SPORTS プロジェクト

〈チラシ〉



Takanawa共育プロジェクト

〈ポスター〉



先端技術コミュニティACOT

〈チラシ〉



熊本地域プロデュース プロジェクト

〈広報誌〉



福祉除雪プロジェクト

〈ポスター〉



チャレンジセンター

〈ポスター〉



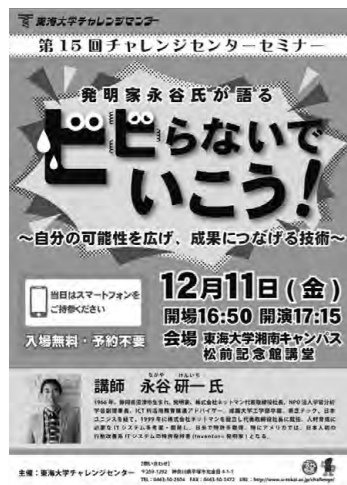
チャレンジセンター

〈ポスター〉



チャレンジセンター

〈ポスター〉



チャレンジセンター

〈ポスター〉



チャレンジセンター

〈ポスター〉



チャレンジセンター

〈チラシ〉



チャレンジセンター

メディア掲載一覧

プロジェクト名	月日	分類	掲載メディア
ライトパワープロジェクト	4月 1日	専門誌	太陽エネルギー
	6月 4日	情報誌	タウンニュース
	8月 27日	Web	PRTIMES(パナソニックのプレスリリース)
	8月 27日	Web	朝日新聞デジタル
	8月 27日	Web	ヤフーニュース
	8月 27日	Web	毎日新聞
	8月 27日	Web	毎日新聞
	8月 27日	Web	Car watch
	8月 27日	Web	ヤフーニュース
	8月 27日	Web	Zero to Darwin Project
	8月 28日	新聞	朝日新聞
	8月 28日	新聞	読売新聞
	8月 28日	新聞	電気新聞
	8月 28日	Web	レスポンス
	8月 28日	Web	ヤフーニュース
	8月 29日	新聞	日刊自動車新聞
	9月 1日	Web	オートックワン
	9月 1日	Web	スマートジャパン
	9月 1日	専門誌	新エネルギー新報
	9月 2日	Web	毎日新聞
	9月 2日	新聞	自動車タイヤ新聞
	9月 2日	TV	鳥人間コンテスト
	9月 3日	情報誌	タウンニュース
	9月 5日	Web	Zero to Darwin Project
	9月 8日	Web	日本経済新聞 電子版
	9月 8日	Web	Car watch
	9月 9日	新聞	日本経済新聞
	9月 11日	新聞	科学新聞
	9月 11日	専門誌	週刊Car&レジャー
	9月 15日	専門誌	モーターファン・イラストレーテッド
	10月 15日	Web	gizmog
	10月 17日	ラジオ	SPO☆LOVE
10月 17日	Web	時事ドットコム	
10月 17日	Web	日刊アメーバニュース	
10月 18日	Web	NHKオンライン	
10月 18日	TV	NHKニュース	
10月 18日	新聞	日本経済新聞	
10月 18日	Web	朝日新聞デジタル	
10月 18日	Web	SBS	
10月 19日	Web	The Asahi Shimbun	
10月 19日	新聞	朝日新聞	
10月 19日	Web	レスポンス	
10月 19日	Web	arabian business.com	
10月 19日	Web	HERALDTIMESONLINE.COM	
10月 19日	ラジオ	クロス	
10月 19日	ラジオ	TIMELINE	
10月 20日	Web	ischoolguide	
10月 20日	Web	NT news	
10月 22日	新聞	毎日新聞	
10月 22日	TV	NHKニュース	
10月 22日	Web	NHKオンライン	
10月 22日	Web	時事ドットコム	
10月 22日	Web	ヤフーニュース	
10月 22日	Web	日刊アメーバニュース	
10月 22日	Web	BIGLOBEニュース	
10月 22日	Web	日本経済新聞 電子版	
10月 22日	Web	47NEWS	
10月 22日	Web	北海道新聞	
10月 22日	Web	岩手日報	
10月 22日	Web	秋田魁新報	
10月 22日	Web	河北新報	
10月 22日	Web	中日新聞	
10月 22日	Web	福井新聞	
10月 22日	Web	神戸新聞	
10月 22日	Web	琉球新報	
10月 22日	Web	MICHIGAN NEWS(University of Michigan)	
10月 22日	Web	The Green Optimistic	
10月 22日	Web	TIME	
10月 22日	Web	MashableAsia	
10月 22日	Web	BBC News	
10月 22日	Web	streetinsider.com	
10月 22日	Web	THE Fiscal TIMES	
10月 22日	Web	KFGO	
10月 22日	Web	BUSINESS INSIDER	
10月 22日	Web	WKZO	
10月 22日	Web	Town Hall.com	
10月 22日	Web	WHBL	
10月 22日	Web	ABC	
10月 22日	Web	Daily Mail	
10月 22日	Web	UPI	
10月 23日	Web	asiaone	
10月 23日	Web	SolarServer	
10月 23日	Web	autoworldnews.com	
10月 23日	Web	ABC	
10月 23日	Web	REUTERS	
10月 23日	Web	7News	
10月 23日	Web	YAHOO! Tech	
10月 23日	Web	MICHIGAN NEWS(University of Michigan)	
10月 23日	Web	PV magazine	
10月 23日	新聞	日本経済新聞	

プロジェクト名	月日	分類	掲載メディア			
ライトパワープロジェクト	10月 23日	新聞	神奈川新聞			
	10月 23日	新聞	静岡新聞			
	10月 23日	新聞	北日本新聞			
	10月 25日	Web	NHKオンライン			
	10月 25日	TV	NHKニュース			
	10月 27日	Web	iol motoring			
	10月 28日	Web	San Jose mercurynews			
	10月 30日	新聞	毎日新聞			
	11月 19日	Web	DOGOnews			
	11月 28日	新聞	日本経済新聞			
	11月 28日	TV	BSジャパン開局15周年特別企画「太陽を追え!激走!ソーラーカーレース~オーストラリア縦断3,000キロ~」			
東海大学学生ロボットプロジェクト	3月 4日	新聞	十勝毎日新聞			
	3月 4日	新聞	北海道新聞			
	3月 14日	新聞	朝日新聞			
	Tokai Formula Club	6月 16日	新聞	読売新聞		
		4月 26日	新聞	東海新報		
		4月 26日	TV	ニュース645		
		4月 27日	新聞	岩手日報		
		4月 28日	新聞	東海新報		
		6月 16日	新聞	朝日新聞		
		7月 1日	ラジオ	ナバサ☆タイムス afternoon ナバサで防災「~いざという時のために~/「地震 その時あなたは!」		
		7月 2日	TV	「地震 その時あなたは!」		
7月 7日		ラジオ	J-WAVE[TOKYO MORNING RADIO]			
10月 14日		ラジオ	ナバサ☆タイムス afternoon ナバサで防災「~いざという時のために~/「地震 その時あなたは!」			
11月 11日		新聞	東海新報			
11月 25日	ラジオ	ナバサ☆タイムス afternoon ナバサで防災「~いざという時のために~/「地震 その時あなたは!」				
病院ボランティアプロジェクト	2月 16日	新聞	毎日新聞			
	2月 18日	情報誌	タウンニュース			
	2月 19日	情報誌	湘南ジャーナル			
	2月 19日	新聞	東京新聞			
	2月 20日	新聞	朝日新聞			
	2月 25日	ラジオ	Activation Students			
	3月 10日	新聞	朝日新聞			
	5月 1日	新聞	読売新聞			
	5月 29日	情報誌	タウンニュース			
	6月 11日	新聞	朝日新聞			
	環境キャラバン隊	11月 11日	Web	Re-Style		
キャンパスストリートプロジェクト		7月 9日	情報誌	タウンニュース		
		11月 23日	新聞	日本経済新聞		
		11月 26日	情報誌	タウンニュース		
		12月 5日	情報誌	タウンニュース		
		12月 25日	新聞	毎日新聞(夕刊)		
		12月 26日	情報誌	タウンニュース		
		Tokai International Communication Club	1月 10日	新聞	毎日新聞	
			1月 23日	情報誌	タウンニュース	
			1月 21日	情報誌	タウンニュース	
			DAN DAN DANCE & SPORTS プロジェクト	11月 21日	新聞	東京新聞(夕刊)
	Takanawa共育プロジェクト			4月 2日	TV	くまもと県民テレビニュース
4月 3日				新聞	熊本日日新聞	
4月 3日				Web	くまもと経済	
6月 14日				新聞	熊本日日新聞	
12月 13日				新聞	読売新聞	
12月 15日				新聞	熊本日日新聞	
メカトロマイスター				7月 10日	Web	くまもと経済
		阿蘇は箱舟プロジェクト		6月 12日	新聞	読売新聞
				8月 21日	TV	NHKニュース(熊本)
				福祉除雪プロジェクト	1月 26日	TV
			3月 12日		TV	ふらり途中下車の旅
	ワンダフル・マリンアニマルズ		6月 29日		新聞	熊本日日新聞
			7月 14日		新聞	中日新聞
			7月 14日		新聞	静岡新聞
			10月 31日		新聞	熊本日日新聞
			11月 22日		新聞	静岡新聞
			知産地商		7月 1日	新聞
7月 1日					Web	Yahoo!ココ(地域情報)
7月 1日		Web			Walkerplus	
7月 1日		Web			パナソニック おでかけガイド	
7月 1日		Web		ニコソ すぽっとサーチ		
7月 1日		Web		まちこみZAQ		
7月 9日	情報誌	タウンニュース				
12月 1日	Web	Yahoo!ココ(地域情報)				
12月 1日	Web	朝日新聞デジタル				
12月 1日	Web	パナソニック おでかけガイド				
12月 1日	Web	ニコソ すぽっとサーチ				
12月 1日	Web	まちこみZAQ				
12月 1日	Web	ゆこゆこ				
12月 1日	Web	リハっぴい暮らしナビ(大東建設)				
2月 27日	ラジオ	キャンパス寄席				

チャレンジプロジェクト活動一覧

4月1日～7月25日 / [湘]TSRP:文部科学省で企画展示・ワークショップ 4月～2016年2月 / [高]Takanawa共育:地域に向けた定期活動の実施 4月14日～7月2日、10月1日～12月17日(毎週火・木曜日) / [湘]C.A.P.:学内パン販売
 5月8日～7月17日、9月25日～2016年1月12日 / [湘]TICC:Communication Lunch 6月1日～12月22日 / [湘]病ボラ:2015年度病棟ボランティア 12月8日～2016年2月25日 / [札]福祉除雪:除雪活動

	月	火	水	木	金	土	日
4月	3月23日		1	2	3	4	5
	6	7	8	9	10	11	12
	13	14	15	16	17	18	19
	20	21	22	23	24	25	26
	27	28	29	30			

	月	火	水	木	金	土	日
5月					1	2	3
	4	5	6	7	8	9	10
	11	12	13	14	15	16	17
	18	19	20	21	22	23	24
	25	26	27	28	29	30	31

	月	火	水	木	金	土	日
6月	1	2	3	4	5	6	7
	8	9	10	11	12	13	14
	15	16	17	18	19	20	21
	22	23	24	25	26	27	28
	29	30					

	月	火	水	木	金	土	日
7月			1	2	3	4	5
	6	7	8	9	10	11	12
	13	14	15	16	17	18	19
	20	21	22	23	24	25	26
	27	28	29	30	31		

	月	火	水	木	金	土	日
8月	3	4	5	6	7	8	9
	10	11	12	13	14	15	16
	17	18	19	20	21	22	23
	24	25	26	27	28	29	30
	31						

	月	火	水	木	金	土	日
9月		1	2	3	4	5	6
	7	8	9	10	11	12	13
	14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27	
28	29	30					

4月15日～8月6日、9月9日、2016年3月24日(毎週水・木曜日) / [湘]TICC:ここティー教室

	月	火	水	木	金	土	日
10月				1	2	3	4
	5	6	7	8	9	10	11
	12	13	14	15	16	17	18
	19	20	21	22	23	24	25
	26	27	28	29	30	31	

	月	火	水	木	金	土	日
11月						1	2
	9	10	11	12	13	14	15
	16	17	18	19	20	21	22
	23	24	25	26	27	28	29
	30						

	月	火	水	木	金	土	日
12月		1	2	3	4	5	6
	7	8	9	10	11	12	13
	14	15	16	17	18	19	20
	21	22	23	24	25	26	27
	28	29	30	31			

	月	火	水	木	金	土	日
1月					1	2	3
	4	5	6	7	8	9	10
	11	12	13	14	15	16	17

	月	火	水	木	金	土	日
2月	1	2	3	4	5	6	7
	8	9	10	11	12	13	14
	15	16	17	18	19	20	21

	月	火	水	木	金	土	日
3月		1	2	3	4	5	6
	7	8	9	10	11	12	13
	14	15	16	17	18	19	20

ライト:ライトパワープロジェクト
スポーツ:スポーツ社会貢献プロジェクト
サイエンス:サイエンスコミュニケーター
TSRP:東海大学学生ロボットプロジェクト
TFC:Tokai Formula Club
3.11:3.11生活復興支援プロジェクト
病ボラ:病院ボランティアプロジェクト
C.A.P.:キャンパスストリートプロジェクト
TICC:Tokai International Communication Club
環キャラ:環境キャラバン隊
MAP:Music Art Project
BML:Beijo Me Liga
JCDA:Japan Community Development Association
DANCE:DAN DAN DANCE & SPORTS プロジェクト
Takanawa共育:Takanawa共育プロジェクト
ACOT:先端技術コミュニティACOT
メカトロ:メカトロマイスター
熊ボラ:熊本地域プロデュースプロジェクト
阿蘇農:阿蘇農コミュニティプロジェクト
箱舟:阿蘇は箱舟プロジェクト
あにまる:あにまるれすきゅープロジェクト
福祉除雪:福祉除雪プロジェクト
 湘南キャンパス…湘 阿蘇キャンパス…阿
 高輪キャンパス…高 札幌キャンパス…札
 熊本キャンパス…熊

